

0001 化学的有害因子> ガス・蒸気・有機溶剤 | 難易度：基礎

次の二つの論点に関する説明の組合せとして、両方とも適切なものはどれか。

A：中毒機序

B：急性中毒

ア．【中毒機序】一酸化炭素はヘモグロビンと強く結合し、血液の酸素運搬を妨げて組織低酸素を起こす /
【急性中毒】救助者自身のばく露を防ぐ呼吸用保護具等を確保し、被災者を新鮮な空気のところへ移す
イ．【中毒機序】一酸化炭素はヘモグロビンと強く結合し、血液の酸素運搬を妨げて組織低酸素を起こす /
【急性中毒】眼刺激がなければ硫化水素中毒を否定する
ウ．【中毒機序】主な慢性影響は騒音性難聴である /
【急性中毒】救助者自身のばく露を防ぐ呼吸用保護具等を確保し、被災者を新鮮な空気のところへ移す
エ．【中毒機序】主として皮膚を腐食して中毒を起こす /
【急性中毒】作業場所の扉を閉め、被災者をそのまま休ませる

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。一酸化炭素は酸素運搬を阻害し、頭痛、めまい、意識障害などにつながる。
Bも適切。正しい。硫化水素は吸入で生命に危険となり得るため、救助者の保護と新鮮空気への移動が重要である。
イ：Aは適切。正しい。一酸化炭素は酸素運搬を阻害し、頭痛、めまい、意識障害などにつながる。
一方Bは不適切。硫化水素は中枢神経、心血管、呼吸器へ影響し、眼症状がないことだけでは否定できない。
ウ：Aは不適切。騒音性難聴は騒音ばく露による障害である。
一方Bは適切。正しい。硫化水素は吸入で生命に危険となり得るため、救助者の保護と新鮮空気への移動が重要である。
エ：Aは不適切。一酸化炭素は腐食性液体ではない。Bも不適切。汚染区域内に留めてはいけない。
総合解説：Aについて：一酸化炭素は無色の有毒ガスで、血液の酸素運搬を阻害するため、脳や心臓など酸素需要の大きい臓器に重篤な影響を及ぼし得る。
Bについて：硫化水素は高濃度で急速に重篤化し得る。救助者の安全確保、汚染区域からの退避、速やかな医療対応が必要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0002 化学的有害因子> ガス・蒸気・有機溶剤 | 難易度：標準

新人教育用の確認資料を作成する。次の組合せのうち、二つの説明がともに適切なものはどれか。

A：急性中毒

B：標的臓器

ア．【急性中毒】救助者自身のばく露を防ぐ呼吸用保護具等を確保し、被災者を新鮮な空気のところへ移す /
【標的臓器】電離放射線による白血球減少だけ
イ．【急性中毒】救助者自身のばく露を防ぐ呼吸用保護具等を確保し、被災者を新鮮な空気のところへ移す /
【標的臓器】末梢神経障害
ウ．【急性中毒】眼刺激がなければ硫化水素中毒を否定する / 【標的臓器】末梢神経障害
エ．【急性中毒】作業場所の扉を閉め、被災者をそのまま休ませる / 【標的臓器】皮膚の石綿小体形成

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。硫化水素は吸入で生命に危険となり得るため、救助者の保護と新鮮空気への移動が重要である。
一方Bは不適切。電離放射線の影響とは異なる。
イ：Aは適切。正しい。硫化水素は吸入で生命に危険となり得るため、救助者の保護と新鮮空気への移動が重要である。
Bも適切。正しい。ノルマルヘキサンは末梢神経障害の原因となり得る。
ウ：Aは不適切。硫化水素は中枢神経、心血管、呼吸器へ影響し、眼症状がないことだけでは否定できない。
一方Bは適切。正しい。ノルマルヘキサンは末梢神経障害の原因となり得る。
エ：Aは不適切。汚染区域内に留めてはいけない。Bも不適切。石綿小体は石綿ばく露に関連する。
総合解説：Aについて：硫化水素は高濃度で急速に重篤化し得る。救助者の安全確保、汚染区域からの退避、速やかな医療対応が必要である。Bについて：ノルマルヘキサンでは反復ばく露による末梢神経障害が重要で、生物学的モニタリングでは尿中2,5-ヘキサジオンが用いられる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0003 化学的有害因子> ガス・蒸気・有機溶剤 | 難易度：基礎

衛生管理の復習として、二つの事項を同時に確認する。記述の組合せとして正しいものはどれか。

A：標的臓器
B：代謝物対応

ア．【標的臓器】造血系障害と発がん性 / 【代謝物対応】尿中メチル馬尿酸
イ．【標的臓器】手腕振動障害 / 【代謝物対応】尿中馬尿酸
ウ．【標的臓器】造血系障害と発がん性 / 【代謝物対応】尿中馬尿酸
エ．【標的臓器】腎結石だけ / 【代謝物対応】尿中N-メチルホルムアミド

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。ベンゼンは造血系障害を起こし、発がん性もある。一方Bは不適切。メチル馬尿酸はキシレンに対応する。
イ：Aは不適切。手腕振動障害は振動工具による。一方Bは適切。正しい。トルエンでは尿中馬尿酸が検査項目となる。
ウ：Aは適切。正しい。ベンゼンは造血系障害を起こし、発がん性もある。
Bも適切。正しい。トルエンでは尿中馬尿酸が検査項目となる。
エ：Aは不適切。ベンゼンの代表的慢性標的は造血系である。
Bも不適切。N-メチルホルムアミドはN,N-ジメチルホルムアミドに対応する。
総合解説：Aについて：ベンゼンは反復ばく露で造血系に障害を及ぼし、発がん性が認められているため、発散抑制とばく露管理が重要である。Bについて：有機溶剤の生物学的モニタリングでは、物質ごとに対応する尿中代謝物を区別して覚える必要がある。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0004 化学的有害因子> ガス・蒸気・有機溶剤 | 難易度：基礎

次のA・Bに関する説明のうち、誤りを含まない組合せはどれか。

A：標的臓器
B：急性影響

ア．【標的臓器】末梢神経障害 / 【急性影響】必ず不可逆性のじん肺を起こす
イ．【標的臓器】皮膚の石綿小体形成 / 【急性影響】頭痛、めまい、眠気などの中枢神経系症状
ウ．【標的臓器】高気圧による減圧症 / 【急性影響】必ず聴力を完全に失う
エ．【標的臓器】末梢神経障害 / 【急性影響】頭痛、めまい、眠気などの中枢神経系症状

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。ノルマルヘキサンは末梢神経障害の原因となり得る。
一方Bは不適切。じん肺は主に粉じん吸入による慢性肺疾患である。
イ：Aは不適切。石綿小体は石綿ばく露に関連する。
一方Bは適切。正しい。多くの有機溶剤は高濃度吸入で中枢神経抑制作用を示し得る。
ウ：Aは不適切。減圧症は高気圧環境からの減圧に関連する。Bも不適切。聴力完全喪失が必発するわけではない。
エ：Aは適切。正しい。ノルマルヘキサンは末梢神経障害の原因となり得る。
Bも適切。正しい。多くの有機溶剤は高濃度吸入で中枢神経抑制作用を示し得る。
総合解説：Aについて：ノルマルヘキサンでは反復ばく露による末梢神経障害が重要で、生物学的モニタリングでは尿中2,5-ヘキサジオンが用いられる。Bについて：有機溶剤の急性中毒では中枢神経抑制が重要である一方、物質ごとに肝、腎、末梢神経、造血系など標的臓器が異なる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0005 化学的有害因子> ガス・蒸気・有機溶剤 | 難易度：標準

研修担当者が二つの事項を説明した。内容がともに適切なものを選べ。

A：急性影響

B：検査項目

ア：【急性影響】頭痛、めまい、眠気などの中枢神経系症状 / 【検査項目】眼底検査

イ：【急性影響】頭痛、めまい、眠気などの中枢神経系症状 / 【検査項目】血中鉛量

ウ：【急性影響】必ず不可逆性のじん肺を起こす / 【検査項目】眼底検査

エ：【急性影響】必ず聴力を完全に失う / 【検査項目】じん肺の胸部X線写真

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。多くの有機溶剤は高濃度吸入で中枢神経抑制作用を示し得る。

Bも適切。正しい。二硫化炭素では眼底検査が規定されている。

イ：Aは適切。正しい。多くの有機溶剤は高濃度吸入で中枢神経抑制作用を示し得る。

一方Bは不適切。鉛の生物学的モニタリング項目である。

ウ：Aは不適切。じん肺は主に粉じん吸入による慢性肺疾患である。

一方Bは適切。正しい。二硫化炭素では眼底検査が規定されている。

エ：Aは不適切。聴力完全喪失が発生するわけではない。Bも不適切。じん肺健康診断の項目である。

総合解説：Aについて：有機溶剤の急性中毒では中枢神経抑制が重要である一方、物質ごとに肝、腎、末梢神経、造血系など標的臓器が異なる。Bについて：二硫化炭素は有機溶剤健康診断の中でも眼底検査が特徴的であり、物質別の検査項目を区別する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0006 化学的有害因子> ガス・蒸気・有機溶剤 | 難易度：基礎

次の二つの事項について整理したメモのうち、両方とも正しいものはどれか。

A：代謝物対応

B：代謝物と臓器

ア：【代謝物対応】尿中馬尿酸 / 【代謝物と臓器】聴力検査と尿中馬尿酸

イ：【代謝物対応】尿中馬尿酸 / 【代謝物と臓器】肝機能検査と尿中N-メチルホルムアミド

ウ：【代謝物対応】尿中2,5-ヘキサンジオン / 【代謝物と臓器】肝機能検査と尿中N-メチルホルムアミド

エ：【代謝物対応】尿中メチル馬尿酸 / 【代謝物と臓器】胸部X線と血中鉛

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。トルエンでは尿中馬尿酸が検査項目となる。一方Bは不適切。トルエン等と混同している。

イ：Aは適切。正しい。トルエンでは尿中馬尿酸が検査項目となる。

Bも適切。正しい。N,N-ジメチルホルムアミドでは肝機能と尿中N-メチルホルムアミドが重要である。

ウ：Aは不適切。2,5-ヘキサンジオンはノルマルヘキサンに対応する。

一方Bは適切。正しい。N,N-ジメチルホルムアミドでは肝機能と尿中N-メチルホルムアミドが重要である。

エ：Aは不適切。メチル馬尿酸はキシレンに対応する。Bも不適切。鉛や粉じんの項目と混同している。

総合解説：Aについて：有機溶剤の生物学的モニタリングでは、物質ごとに対応する尿中代謝物を区別して覚える必要がある。

Bについて：有機溶剤ごとに標的臓器と生物学的モニタリング項目が異なるため、物質名と検査項目を結び付けて理解する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0007 化学的有害因子> ガス・蒸気・有機溶剤 | 難易度：基礎

試験対策として二つの関連事項を比較する。正しい説明の組合せはどれか。

A：代謝物対応

B：急性中毒

ア．【代謝物対応】尿中メチル馬尿酸 / 【急性中毒】眼刺激がなければ硫化水素中毒を否定する

イ．【代謝物対応】尿中馬尿酸 /

【急性中毒】救助者自身のばく露を防ぐ呼吸用保護具等を確保し、被災者を新鮮な空気のところへ移す

ウ．【代謝物対応】尿中メチル馬尿酸 /

【急性中毒】救助者自身のばく露を防ぐ呼吸用保護具等を確保し、被災者を新鮮な空気のところへ移す

エ．【代謝物対応】尿中デルタアミノレブリン酸 /

【急性中毒】作業場所の扉を閉め、被災者をそのまま休ませる

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。キシレンでは尿中メチル馬尿酸が用いられる。
一方Bは不適切。硫化水素は中枢神経、心血管、呼吸器へ影響し、眼症状がないことだけでは否定できない。

イ：Aは不適切。馬尿酸はトルエンに対応する。

一方Bは適切。正しい。硫化水素は吸入で生命に危険となり得るため、救助者の保護と新鮮空気への移動が重要である。

ウ：Aは適切。正しい。キシレンでは尿中メチル馬尿酸が用いられる。

Bも適切。正しい。硫化水素は吸入で生命に危険となり得るため、救助者の保護と新鮮空気への移動が重要である。

エ：Aは不適切。デルタアミノレブリン酸は鉛ばく露で用いられる。Bも不適切。汚染区域内に留めてはいけない。

総合解説：Aについて：トルエン＝馬尿酸、キシレン＝メチル馬尿酸という対応は頻出である。

Bについて：硫化水素は高濃度で急速に重篤化し得る。救助者の安全確保、汚染区域からの退避、速やかな医療対応が必要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0008 化学的有害因子> ガス・蒸気・有機溶剤 | 難易度：標準

次の確認事項A・Bについて、適切な説明だけを組み合わせたものはどれか。

A：代謝物と臓器

B：中毒機序

ア．【代謝物と臓器】肝機能検査と尿中N-メチルホルムアミド /

【中毒機序】粉じんとして肺に沈着してじん肺を起こす

イ．【代謝物と臓器】胸部X線と血中鉛 /

【中毒機序】一酸化炭素はヘモグロビンと強く結合し、血液の酸素運搬を妨げて組織低酸素を起こす

ウ．【代謝物と臓器】眼底検査と尿中メチル馬尿酸 / 【中毒機序】主な慢性影響は騒音性難聴である

エ．【代謝物と臓器】肝機能検査と尿中N-メチルホルムアミド /

【中毒機序】一酸化炭素はヘモグロビンと強く結合し、血液の酸素運搬を妨げて組織低酸素を起こす

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。N,N-ジメチルホルムアミドでは肝機能と尿中N-メチルホルムアミドが重要である。

一方Bは不適切。一酸化炭素は気体であり、粉じん沈着によるじん肺の原因ではない。

イ：Aは不適切。鉛や粉じんの項目と混同している。

一方Bは適切。正しい。一酸化炭素は酸素運搬を阻害し、頭痛、めまい、意識障害などにつながる。

ウ：Aは不適切。組合せが対応しない。Bも不適切。騒音性難聴は騒音ばく露による障害である。

エ：Aは適切。正しい。N,N-ジメチルホルムアミドでは肝機能と尿中N-メチルホルムアミドが重要である。

Bも適切。正しい。一酸化炭素は酸素運搬を阻害し、頭痛、めまい、意識障害などにつながる。

総合解説：Aについて：有機溶剤ごとに標的臓器と生物学的モニタリング項目が異なるため、物質名と検査項目を結び付けて理解する。

Bについて：一酸化炭素は無色の有毒ガスで、血液の酸素運搬を阻害するため、脳や心臓など酸素需要の大きい臓器に重篤な影響を及ぼし得る。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0009

化学的有害因子> ガス・蒸気・有機溶剤 | 難易度：標準

二つの論点を関連付けて判断する問題である。両方の記述が正しい選択肢はどれか。

A：検査項目

B：急性中毒

ア．【検査項目】眼底検査 /

【急性中毒】急速に重篤化し得る化学物質中毒として、救助者の安全を確保し直ちに救急対応を行う

イ．【検査項目】眼底検査 / 【急性中毒】慢性じん肺として数か月後に評価すればよい

ウ．【検査項目】血中鉛量 /

【急性中毒】急速に重篤化し得る化学物質中毒として、救助者の安全を確保し直ちに救急対応を行う

エ．【検査項目】じん肺の胸部X線写真 / 【急性中毒】作業を継続しながら経過を見る

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。二硫化炭素では眼底検査が規定されている。

Bも適切。正しい。シアン化水素は急性毒性が高く、迅速な退避・救急対応が必要である。

イ：Aは適切。正しい。二硫化炭素では眼底検査が規定されている。一方Bは不適切。急性毒性が高く、遅らせるべきではない。

ウ：Aは不適切。鉛の生物学的モニタリング項目である。

一方Bは適切。正しい。シアン化水素は急性毒性が高く、迅速な退避・救急対応が必要である。

エ：Aは不適切。じん肺健康診断の項目である。Bも不適切。ばく露継続は危険である。

総合解説：Aについて：二硫化炭素は有機溶剤健康診断の中でも眼底検査が特徴的であり、物質別の検査項目を区別する。

Bについて：急性毒性の高いガスでは、救助者の二次ばく露を避けつつ、汚染源からの退避と緊急医療を優先する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0010

化学的有害因子> ガス・蒸気・有機溶剤 | 難易度：応用

次のA・Bの説明を確認した。訂正の必要がない組合せはどれか。

A：急性中毒

B：急性中毒

ア．【急性中毒】急速に重篤化し得る化学物質中毒として、救助者の安全を確保し直ちに救急対応を行う /

【急性中毒】眼刺激がなければ硫化水素中毒を否定する

イ．【急性中毒】急速に重篤化し得る化学物質中毒として、救助者の安全を確保し直ちに救急対応を行う /

【急性中毒】救助者自身のばく露を防ぐ呼吸用保護具等を確保し、被災者を新鮮な空気のところへ移す

ウ．【急性中毒】慢性じん肺として数か月後に評価すればよい /

【急性中毒】救助者自身のばく露を防ぐ呼吸用保護具等を確保し、被災者を新鮮な空気のところへ移す

エ．【急性中毒】作業を継続しながら経過を見る / 【急性中毒】作業場所の扉を閉め、被災者をそのまま休ませる

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。シアン化水素は急性毒性が高く、迅速な退避・救急対応が必要である。

一方Bは不適切。硫化水素は中枢神経、心血管、呼吸器へ影響し、眼症状がないことだけでは否定できない。

イ：Aは適切。正しい。シアン化水素は急性毒性が高く、迅速な退避・救急対応が必要である。

Bも適切。正しい。硫化水素は吸入で生命に危険となり得るため、救助者の保護と新鮮空気への移動が重要である。

ウ：Aは不適切。急性毒性が高く、遅らせるべきではない。

一方Bは適切。正しい。硫化水素は吸入で生命に危険となり得るため、救助者の保護と新鮮空気への移動が重要である。

エ：Aは不適切。ばく露継続は危険である。Bも不適切。汚染区域内に留めてはいけない。

総合解説：Aについて：急性毒性の高いガスでは、救助者の二次ばく露を避けつつ、汚染源からの退避と緊急医療を優先する。

Bについて：硫化水素は高濃度で急速に重篤化し得る。救助者の安全確保、汚染区域からの退避、速やかな医療対応が必要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0011 化学的有害因子 > 特定化学物質・金属 | 難易度：基礎

次の二つの論点に関する説明の組合せとして、両方とも適切なものはどれか。

A：鉛毒性

B：標的臓器

ア．【鉛毒性】血中鉛量と尿中デルタアミノレブリン酸 / 【標的臓器】眼の水晶体だけ

イ．【鉛毒性】尿中メチル馬尿酸と聴力検査 / 【標的臓器】腎臓や肺など

ウ．【鉛毒性】血中鉛量と尿中デルタアミノレブリン酸 / 【標的臓器】腎臓や肺など

エ．【鉛毒性】尿中馬尿酸と眼底検査 / 【標的臓器】末梢神経だけ

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。鉛では血中鉛量と尿中デルタアミノレブリン酸が重要な生物学的指標となる。

一方Bは不適切。水晶体だけではない。

イ：Aは不適切。キシレンの指標と騒音健診を混同している。

一方Bは適切。正しい。反復ばく露では腎臓、肺、血液、骨等への障害が問題となる。

ウ：Aは適切。正しい。鉛では血中鉛量と尿中デルタアミノレブリン酸が重要な生物学的指標となる。

Bも適切。正しい。反復ばく露では腎臓、肺、血液、骨等への障害が問題となる。

エ：Aは不適切。有機溶剤の指標を混同している。Bも不適切。末梢神経だけに限定されない。

総合解説：Aについて：鉛はヘム合成系などに影響し、血中鉛量や尿中デルタアミノレブリン酸を用いて体内負荷・影響を評価する。

Bについて：カドミウムは吸入毒性が高く、慢性ばく露では腎臓や肺など複数臓器への影響が重要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0012 化学的有害因子 > 特定化学物質・金属 | 難易度：基礎

新人教育用の確認資料を作成する。次の組合せのうち、二つの説明がともに適切なものはどれか。

A：標的臓器

B：発がん性物質

ア．【標的臓器】腎臓や肺など / 【発がん性物質】低酸素環境だけで有害になる物質だから

イ．【標的臓器】眼の水晶体だけ / 【発がん性物質】造血系への反復ばく露影響と発がん性があるため

ウ．【標的臓器】末梢神経だけ / 【発がん性物質】主な障害が一時的な皮膚乾燥だけだから

エ．【標的臓器】腎臓や肺など / 【発がん性物質】造血系への反復ばく露影響と発がん性があるため

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。反復ばく露では腎臓、肺、血液、骨等への障害が問題となる。

一方Bは不適切。ベンゼンは低酸素環境だけで有害になる物質ではない。

イ：Aは不適切。水晶体だけではない。一方Bは適切。正しい。造血系障害と発がん性が重要である。

ウ：Aは不適切。末梢神経だけに限定されない。Bも不適切。ベンゼンの重要な慢性影響を過小評価している。

エ：Aは適切。正しい。反復ばく露では腎臓、肺、血液、骨等への障害が問題となる。

Bも適切。正しい。造血系障害と発がん性が重要である。

総合解説：Aについて：カドミウムは吸入毒性が高く、慢性ばく露では腎臓や肺など複数臓器への影響が重要である。Bについて：発がん性物質では、短期症状が目立たなくても長期リスクを考慮して、代替・密閉化・局排等によりばく露を低減する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0013 化学的有害因子> 特定化学物質・金属 | 難易度：基礎

衛生管理の復習として、二つの事項を同時に確認する。記述の組合せとして正しいものはどれか。

A：標的臓器

B：慢性影響

ア：【標的臓器】神経系および呼吸器への障害 /

【慢性影響】急性症状が軽くても、発がん性や臓器毒性など長期・反復ばく露影響を別に評価する

イ：【標的臓器】神経系および呼吸器への障害 / 【慢性影響】刺激臭がなければ慢性影響もない

ウ：【標的臓器】減圧症 /

【慢性影響】急性症状が軽くても、発がん性や臓器毒性など長期・反復ばく露影響を別に評価する

エ：【標的臓器】じん肺だけで神経系への影響はない /

【慢性影響】急性毒性が低ければリスクアセスメント不要である

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。反復ばく露による神経系・呼吸器障害が問題となる。

Bも適切。正しい。急性影響と慢性影響は分けて評価する必要がある。

イ：Aは適切。正しい。反復ばく露による神経系・呼吸器障害が問題となる。

一方Bは不適切。臭気の有無は慢性毒性の有無を保証しない。

ウ：Aは不適切。減圧症は異常気圧に関連する。一方Bは適切。正しい。急性影響と慢性影響は分けて評価する必要がある。

エ：Aは不適切。マンガンでは神経系影響が重要である。Bも不適切。慢性毒性等を考慮する必要がある。

総合解説：Aについて：マンガンばく露では中枢神経系への慢性影響が重要で、粉じん・ヒュームの吸入抑制が必要である。

Bについて：化学物質管理では、急性毒性だけでなく発がん性、反復ばく露毒性、生殖毒性、皮膚吸収等も含めて評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0014 化学的有害因子> 特定化学物質・金属 | 難易度：標準

次のA・Bに関する説明のうち、誤りを含まない組合せはどれか。

A：発がん性物質

B：ばく露経路

ア：【発がん性物質】造血系への反復ばく露影響と発がん性があるため /

【ばく露経路】窓を閉め切ってヒュームを室内に保持する

イ：【発がん性物質】造血系への反復ばく露影響と発がん性があるため /

【ばく露経路】発生源で捕集・排気し、必要に応じ呼吸用保護具を併用する

ウ：【発がん性物質】主な障害が一時的な皮膚乾燥だけだから /

【ばく露経路】発生源で捕集・排気し、必要に応じ呼吸用保護具を併用する

エ：【発がん性物質】水に溶けないため健康影響がないから / 【ばく露経路】臭いが弱ければ対策しない

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。造血系障害と発がん性が重要である。一方Bは不適切。室内濃度を上昇させるおそれがある。

イ：Aは適切。正しい。造血系障害と発がん性が重要である。

Bも適切。正しい。吸入ばく露には発散源対策・局所排気等の工学的対策を優先する。

ウ：Aは不適切。ベンゼンの重要な慢性影響を過小評価している。

一方Bは適切。正しい。吸入ばく露には発散源対策・局所排気等の工学的対策を優先する。

エ：Aは不適切。溶解性だけで健康有害性を否定できない。Bも不適切。臭いの強弱は有害性や濃度の信頼できる指標ではない。

総合解説：Aについて：発がん性物質では、短期症状が目立たなくても長期リスクを考慮して、代替・密閉化・局排等によりばく露を低減する。

Bについて：金属ヒューム・粉じんでは、発生源近傍での捕集や工程の密閉化など、吸入経路を断つ対策が重要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0015 化学的有害因子>特定化学物質・金属 | 難易度：標準

研修担当者が二つの事項を説明した。内容がともに適切なものを選べ。

A：ばく露経路

B：対策優先順位

- ア．【ばく露経路】発生源で捕集・排気し、必要に応じ呼吸用保護具を併用する /
【対策優先順位】保護具を使うと作業環境測定ができないから
イ．【ばく露経路】窓を閉め切ってヒュームを室内に保持する /
【対策優先順位】発生源対策や密閉・局排など、より上位の対策でばく露自体を減らすことが基本だから
ウ．【ばく露経路】発生源で捕集・排気し、必要に応じ呼吸用保護具を併用する /
【対策優先順位】発生源対策や密閉・局排など、より上位の対策でばく露自体を減らすことが基本だから
エ．【ばく露経路】臭いが弱ければ対策しない / 【対策優先順位】保護具は必ず有害物を増やすから

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。吸入ばく露には発散源対策・局所排気等の工学的対策を優先する。
一方Bは不適切。測定可否とは別の問題である。
イ：Aは不適切。室内濃度を上昇させるおそれがある。
一方Bは適切。正しい。リスク低減は代替・工学的対策・管理的対策・保護具の順に検討する。
ウ：Aは適切。正しい。吸入ばく露には発散源対策・局所排気等の工学的対策を優先する。
Bも適切。正しい。リスク低減は代替・工学的対策・管理的対策・保護具の順に検討する。
エ：Aは不適切。臭いの強弱は有害性や濃度の信頼できる指標ではない。Bも不適切。保護具は有効な対策だが単独依存を避ける。
総合解説：Aについて：金属ヒューム・粉じんでは、発生源近傍での捕集や工程の密閉化など、吸入経路を断つ対策が重要である。
Bについて：重篤な健康影響を持つ物質では、保護具は最後の防護線と位置付け、発散源対策や工程改善を優先する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0016 化学的有害因子>特定化学物質・金属 | 難易度：標準

次の二つの事項について整理したメモのうち、両方とも正しいものはどれか。

A：慢性影響

B：ばく露経路

- ア．【慢性影響】急性症状が軽くても、発がん性や臓器毒性など長期・反復ばく露影響を別に評価する /
【ばく露経路】吸入濃度だけ低ければ、皮膚接触の有無は常は無視できる
イ．【慢性影響】皮膚から吸収される物質は吸入対策が不要である /
【ばく露経路】皮膚・吸入・経口など複数経路を考慮し、物質の性質に応じて対策する
ウ．【慢性影響】刺激臭がなければ慢性影響もない / 【ばく露経路】皮膚吸収する物質では換気は逆効果である
エ．【慢性影響】急性症状が軽くても、発がん性や臓器毒性など長期・反復ばく露影響を別に評価する /
【ばく露経路】皮膚・吸入・経口など複数経路を考慮し、物質の性質に応じて対策する

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。急性影響と慢性影響は分けて評価する必要がある。
一方Bは不適切。皮膚吸収が重要な物質では皮膚接触も評価する。
イ：Aは不適切。複数のばく露経路があり得るため総合的な対策が必要である。
一方Bは適切。正しい。ばく露経路を総合的に評価する。
ウ：Aは不適切。臭気の有無は慢性毒性の有無を保証しない。Bも不適切。吸入ばく露があるなら換気等も必要である。
エ：Aは適切。正しい。急性影響と慢性影響は分けて評価する必要がある。Bも適切。正しい。ばく露経路を総合的に評価する。
総合解説：Aについて：化学物質管理では、急性毒性だけでなく発がん性、反復ばく露毒性、生殖毒性、皮膚吸収等も含めて評価する。
Bについて：化学物質によって主要なばく露経路は異なるため、SDS等を用いて吸入・皮膚・経口の可能性を把握する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0017 化学的有害因子> 特定化学物質・金属 | 難易度：標準

試験対策として二つの関連事項を比較する。正しい説明の組合せはどれか。

A：粒子特性

B：標的臓器

- ア．【粒子特性】粒子径は呼吸器内への到達・沈着部位に影響する / 【標的臓器】腎臓や肺など
イ．【粒子特性】粒子径は呼吸器内への到達・沈着部位に影響する / 【標的臓器】眼の結晶体だけ
ウ．【粒子特性】粒子径は騒音レベルだけを定める / 【標的臓器】腎臓や肺など
エ．【粒子特性】粒子径は毒性と全く関係しないので測定不要である / 【標的臓器】末梢神経だけ

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。粒子径は鼻咽頭、気管支、肺胞などへの到達性に影響する。
Bも適切。正しい。反復ばく露では腎臓、肺、血液、骨等への障害が問題となる。
イ：Aは適切。正しい。粒子径は鼻咽頭、気管支、肺胞などへの到達性に影響する。一方Bは不適切。結晶体だけではない。
ウ：Aは不適切。騒音レベルを決める要因ではない。
一方Bは適切。正しい。反復ばく露では腎臓、肺、血液、骨等への障害が問題となる。
エ：Aは不適切。吸入ばく露評価で粒子径は重要である。Bも不適切。末梢神経だけに限定されない。
総合解説：Aについて：粉じん・ヒュームの健康影響では、化学組成に加えて粒子径と呼吸器への沈着性も重要となる。
Bについて：カドミウムは吸入毒性が高く、慢性ばく露では腎臓や肺など複数臓器への影響が重要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0018 化学的有害因子> 特定化学物質・金属 | 難易度：標準

次の確認事項A・Bについて、適切な説明だけを組み合わせたものはどれか。

A：ばく露経路

B：鉛毒性

- ア．【ばく露経路】皮膚・吸入・経口など複数経路を考慮し、物質の性質に応じて対策する / 【鉛毒性】尿中2,5-ヘキサジオンと肺活量
イ．【ばく露経路】皮膚・吸入・経口など複数経路を考慮し、物質の性質に応じて対策する / 【鉛毒性】血中鉛量と尿中デルタアミノレブリン酸
ウ．【ばく露経路】皮膚吸収する物質では換気は逆効果である / 【鉛毒性】血中鉛量と尿中デルタアミノレブリン酸
エ．【ばく露経路】手袋を着ければ吸入対策は一切不要である / 【鉛毒性】尿中メチル馬尿酸と聴力検査

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。ばく露経路を総合的に評価する。一方Bは不適切。ノルマルヘキサンと高気圧健診の項目を混同している。
イ：Aは適切。正しい。ばく露経路を総合的に評価する。
Bも適切。正しい。鉛では血中鉛量と尿中デルタアミノレブリン酸が重要な生物学的指標となる。
ウ：Aは不適切。吸入ばく露があるなら換気等も必要である。
一方Bは適切。正しい。鉛では血中鉛量と尿中デルタアミノレブリン酸が重要な生物学的指標となる。
エ：Aは不適切。保護手袋と呼吸管理は役割が異なる。Bも不適切。キシレンの指標と騒音健診を混同している。
総合解説：Aについて：化学物質によって主要なばく露経路は異なるため、SDS等を用いて吸入・皮膚・経口の可能性を把握する。
Bについて：鉛はヘム合成系などに影響し、血中鉛量や尿中デルタアミノレブリン酸を用いて体内負荷・影響を評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0019 化学的有害因子>特定化学物質・金属 | 難易度：応用

二つの論点を関連付けて判断する問題である。両方の記述が正しい選択肢はどれか。

A：対策優先順位

B：事例

ア．【対策優先順位】発生源対策や密閉・局排など、より上位の対策でばく露自体を減らすことが基本だから / 【事例】粉じんの色が薄ければ作業を続ける
イ．【対策優先順位】保護具を使うと作業環境測定ができないから / 【事例】呼吸器・腎臓等への重篤な影響を考慮し、ばく露を継続せず設備を是正してから作業再開を判断する
ウ．【対策優先順位】発生源対策や密閉・局排など、より上位の対策でばく露自体を減らすことが基本だから / 【事例】呼吸器・腎臓等への重篤な影響を考慮し、ばく露を継続せず設備を是正してから作業再開を判断する
エ．【対策優先順位】保護具は必ず有害物を増やすから / 【事例】健康診断を年末に行う予定なので今は対策しない

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。リスク低減は代替・工学的対策・管理的対策・保護具の順に検討する。
一方Bは不適切。見た目は濃度・危険性の確実な指標ではない。
イ：Aは不適切。測定可否とは別の問題である。
一方Bは適切。正しい。カドミウム粉じんの吸入は重篤な健康障害につながり得るため、工学的対策の不備を放置しない。
ウ：Aは適切。正しい。リスク低減は代替・工学的対策・管理的対策・保護具の順に検討する。
Bも適切。正しい。カドミウム粉じんの吸入は重篤な健康障害につながり得るため、工学的対策の不備を放置しない。
エ：Aは不適切。保護具は有効な対策だが単独依存を避ける。Bも不適切。健康診断はばく露低減の代替にならない。
総合解説：Aについて：重篤な健康影響を持つ物質では、保護具は最後の防護線と位置付け、発散源対策や工程改善を優先する。
Bについて：高有害性物質を扱う工程では、局排等の工学的対策が機能しない状態で通常作業を継続しないことが重要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0020 化学的有害因子>特定化学物質・金属 | 難易度：応用

次のA・Bの説明を確認した。訂正の必要がない組合せはどれか。

A：事例

B：標的臓器

ア．【事例】呼吸器・腎臓等への重篤な影響を考慮し、ばく露を継続せず設備を是正してから作業再開を判断する / 【標的臓器】眼の水晶体だけ
イ．【事例】粉じんの色が薄ければ作業を続ける / 【標的臓器】腎臓や肺など
ウ．【事例】健康診断を年末に行う予定なので今は対策しない / 【標的臓器】末梢神経だけ
エ．【事例】呼吸器・腎臓等への重篤な影響を考慮し、ばく露を継続せず設備を是正してから作業再開を判断する / 【標的臓器】腎臓や肺など

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。カドミウム粉じんの吸入は重篤な健康障害につながり得るため、工学的対策の不備を放置しない。
一方Bは不適切。水晶体だけではない。
イ：Aは不適切。見た目は濃度・危険性の確実な指標ではない。
一方Bは適切。正しい。反復ばく露では腎臓、肺、血液、骨等への障害が問題となる。
ウ：Aは不適切。健康診断はばく露低減の代替にならない。Bも不適切。末梢神経だけに限定されない。
エ：Aは適切。正しい。カドミウム粉じんの吸入は重篤な健康障害につながり得るため、工学的対策の不備を放置しない。
Bも適切。正しい。反復ばく露では腎臓、肺、血液、骨等への障害が問題となる。
総合解説：Aについて：高有害性物質を扱う工程では、局排等の工学的対策が機能しない状態で通常作業を継続しないことが重要である。
Bについて：カドミウムは吸入毒性が高く、慢性ばく露では腎臓や肺など複数臓器への影響が重要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0021 化学的有害因子 > 化学物質中毒・生物学的モニタリング | 難易度：基礎

次の二つの論点に関する説明の組合せとして、両方とも適切なものはどれか。

A：定義
B：対応表

ア．【定義】血液や尿中の化学物質・代謝物等を測定し、体内への取り込みの程度を評価する /
【対応表】トルエン—尿中馬尿酸、キシレン—尿中メチル馬尿酸
イ．【定義】血液や尿中の化学物質・代謝物等を測定し、体内への取り込みの程度を評価する /
【対応表】両方とも血中鉛量
ウ．【定義】局所排気装置の風速だけを測定する /
【対応表】トルエン—尿中馬尿酸、キシレン—尿中メチル馬尿酸
エ．【定義】作業場の騒音レベルだけを測定する / 【対応表】両方とも尿中2,5-ヘキサンジオン

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。生体試料を用いて体内負荷や影響を評価する。
Bも適切。正しい。トルエンは馬尿酸、キシレンはメチル馬尿酸である。
イ：Aは適切。正しい。生体試料を用いて体内負荷や影響を評価する。一方Bは不適切。鉛の指標である。
ウ：Aは不適切。局排風速測定は設備管理である。一方Bは適切。正しい。トルエンは馬尿酸、キシレンはメチル馬尿酸である。
エ：Aは不適切。騒音測定は作業環境測定である。Bも不適切。ノルマルヘキサンの指標である。
総合解説：Aについて：生物学的モニタリングは、吸入だけでなく皮膚等からの取り込みも含めた総合的な体内負荷の把握に役立つ。
。Bについて：有機溶剤健診の代謝物は名称が似ているため、トルエンとキシレンの対応を正確に区別する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0022 化学的有害因子 > 化学物質中毒・生物学的モニタリング | 難易度：基礎

新人教育用の確認資料を作成する。次の組合せのうち、二つの説明がともに適切なものはどれか。

A：対応表
B：対応表

ア．【対応表】トルエン—尿中馬尿酸、キシレン—尿中メチル馬尿酸 /
【対応表】尿中N-メチルホルムアミドと肝機能
イ．【対応表】トルエン—尿中馬尿酸、キシレン—尿中メチル馬尿酸 /
【対応表】血中鉛量と尿中デルタアミノレブリン酸
ウ．【対応表】両方とも血中鉛量 / 【対応表】血中鉛量と尿中デルタアミノレブリン酸
エ．【対応表】両方とも尿中2,5-ヘキサンジオン / 【対応表】尿中馬尿酸と尿中メチル馬尿酸

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。トルエンは馬尿酸、キシレンはメチル馬尿酸である。
一方Bは不適切。N,N-ジメチルホルムアミドの項目である。
イ：Aは適切。正しい。トルエンは馬尿酸、キシレンはメチル馬尿酸である。
Bも適切。正しい。鉛では血中鉛量と尿中デルタアミノレブリン酸が重要である。
ウ：Aは不適切。鉛の指標である。一方Bは適切。正しい。鉛では血中鉛量と尿中デルタアミノレブリン酸が重要である。
エ：Aは不適切。ノルマルヘキサンの指標である。Bも不適切。有機溶剤の指標である。
総合解説：Aについて：有機溶剤健診の代謝物は名称が似ているため、トルエンとキシレンの対応を正確に区別する。
Bについて：生物学的モニタリングでは、ばく露物質に対応した検査項目を選択する必要がある。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0023 化学的有害因子>化学物質中毒・生物学的モニタリング | 難易度：基礎

衛生管理の復習として、二つの事項を同時に確認する。記述の組合せとして正しいものはどれか。

A：対応表

B：比較

ア．【対応表】尿中2,5-ヘキサンジオン / 【比較】どちらか一方を行えば他方は必ず不要である

イ．【対応表】血中鉛量 / 【比較】作業環境測定は環境中の濃度等を、生物学的モニタリングは体内取り込み等を評価し、相補的に活用できる

ウ．【対応表】尿中2,5-ヘキサンジオン / 【比較】作業環境測定は環境中の濃度等を、生物学的モニタリングは体内取り込み等を評価し、相補的に活用できる

エ．【対応表】尿中N-メチルホルムアミド /

【比較】生物学的モニタリングは作業場の換気量を直接測る方法である

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。ノルマルヘキサンでは尿中2,5-ヘキサンジオンが用いられる。

一方Bは不適切。評価対象が異なるため単純な代替関係ではない。

イ：Aは不適切。鉛ばく露の指標である。一方Bは適切。正しい。外部環境と体内負荷の異なる側面を評価する。

ウ：Aは適切。正しい。ノルマルヘキサンでは尿中2,5-ヘキサンジオンが用いられる。

Bも適切。正しい。外部環境と体内負荷の異なる側面を評価する。

エ：Aは不適切。N,N-ジメチルホルムアミドに対応する。Bも不適切。換気量測定ではない。

総合解説：Aについて：ノルマルヘキサンの末梢神経障害リスクと、尿中2,5-ヘキサンジオンをセットで理解する。

Bについて：外部ばく露の状況と実際の体内取り込みは一致しない場合があり、必要に応じ複数の情報を統合する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0024 化学的有害因子>化学物質中毒・生物学的モニタリング | 難易度：標準

次のA・Bに関する説明のうち、誤りを含まない組合せはどれか。

A：対応表

B：採取時期

ア．【対応表】血中鉛量と尿中デルタアミノレブリン酸 /

【採取時期】作業前後を区別せずいつでも同じ値になる

イ．【対応表】尿中馬尿酸と尿中メチル馬尿酸 /

【採取時期】代謝・排泄速度があるため、試料採取の時期を標準化・確認する

ウ．【対応表】尿中2,5-ヘキサンジオンと眼底検査 / 【採取時期】尿量や代謝の影響は一切受けない

エ．【対応表】血中鉛量と尿中デルタアミノレブリン酸 /

【採取時期】代謝・排泄速度があるため、試料採取の時期を標準化・確認する

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。鉛では血中鉛量と尿中デルタアミノレブリン酸が重要である。

一方Bは不適切。作業との時間関係が重要である。

イ：Aは不適切。有機溶剤の指標である。一方Bは適切。正しい。体内動態に応じて採取時期が結果解釈に影響する。

ウ：Aは不適切。ノルマルヘキサンと二硫化炭素の項目を混同している。

Bも不適切。生体試料値は生理的変動等の影響も受け得る。

エ：Aは適切。正しい。鉛では血中鉛量と尿中デルタアミノレブリン酸が重要である。

Bも適切。正しい。体内動態に応じて採取時期が結果解釈に影響する。

総合解説：Aについて：生物学的モニタリングでは、ばく露物質に対応した検査項目を選択する必要がある。

Bについて：生物学的モニタリングは単一数値だけで判断せず、採取時刻、作業条件、ばく露経路等を合わせて評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0025 化学的有害因子 > 化学物質中毒・生物学的モニタリング | 難易度：標準

研修担当者が二つの事項を説明した。内容がともに適切なものを選べ。

A：採取時期

B：結果解釈

- ア．【採取時期】代謝・排泄速度があるため、試料採取の時期を標準化・確認する /
【結果解釈】値はばく露評価の一情報であり、症状、作業条件、他の検査結果等と合わせて評価する
イ．【採取時期】代謝・排泄速度があるため、試料採取の時期を標準化・確認する /
【結果解釈】検査値だけで作業環境改善の必要性を否定できる
ウ．【採取時期】作業前後を区別せずいつでも同じ値になる /
【結果解釈】値はばく露評価の一情報であり、症状、作業条件、他の検査結果等と合わせて評価する
エ．【採取時期】尿量や代謝の影響は一切受けない /
【結果解釈】基準を超えれば、それだけで特定の職業病の確定診断となる

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。体内動態に応じて採取時期が結果解釈に影響する。Bも適切。正しい。総合的評価が必要である。
イ：Aは適切。正しい。体内動態に応じて採取時期が結果解釈に影響する。
一方Bは不適切。環境管理は独立して評価する必要がある。
ウ：Aは不適切。作業との時間関係が重要である。一方Bは適切。正しい。総合的評価が必要である。
エ：Aは不適切。生体試料値は生理的変動等の影響も受け得る。
Bも不適切。生物学的指標だけで疾病診断が確定するとは限らない。
総合解説：Aについて：生物学的モニタリングは単一数値だけで判断せず、採取時刻、作業条件、ばく露経路等を合わせて評価する。
Bについて：生物学的モニタリングは、健康診断・作業環境・作業条件と統合して判断するための指標である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0026 化学的有害因子 > 化学物質中毒・生物学的モニタリング | 難易度：標準

次の二つの事項について整理したメモのうち、両方とも正しいものはどれか。

A：比較

B：多経路ばく露

- ア．【比較】作業環境測定は環境中の濃度等を、生物学的モニタリングは体内取り込み等を評価し、相補的に活用できる /
【多経路ばく露】環境濃度が低ければ生物学的モニタリング値は必ず誤りと判断する
イ．【比較】作業環境測定は環境中の濃度等を、生物学的モニタリングは体内取り込み等を評価し、相補的に活用できる /
【多経路ばく露】皮膚吸収や作業方法、保護具の不適切使用など他のばく露経路も確認する
ウ．【比較】作業環境測定は血液中濃度を測る方法である /
【多経路ばく露】皮膚吸収や作業方法、保護具の不適切使用など他のばく露経路も確認する
エ．【比較】どちらか一方を行えば他方は必ず不要である /
【多経路ばく露】生物学的モニタリング値は作業と無関係なので無視する

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。外部環境と体内負荷の異なる側面を評価する。
一方Bは不適切。測定値の不一致には複数の原因があり得る。
イ：Aは適切。正しい。外部環境と体内負荷の異なる側面を評価する。
Bも適切。正しい。体内取り込みは吸入以外の経路も影響し得る。
ウ：Aは不適切。血液中濃度は生体試料の評価である。一方Bは適切。正しい。体内取り込みは吸入以外の経路も影響し得る。
エ：Aは不適切。評価対象が異なるため単純な代替関係ではない。Bも不適切。作業との関連を評価するために用いる。
総合解説：Aについて：外部ばく露の状況と実際の体内取り込みは一致しない場合があり、必要に応じ複数の情報を統合する。
Bについて：外部濃度と体内負荷が一致しない場合は、皮膚接触、保護具、作業時間、採取時期等を再評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0027 化学的有害因子 > 化学物質中毒・生物学的モニタリング | 難易度：応用

試験対策として二つの関連事項を比較する。正しい説明の組合せはどれか。

A：緊急対応

B：対応表

- ア．【緊急対応】救助者の安全を確保してばく露源から退避させ、救急対応を開始する / 【対応表】両方とも血中鉛量
- イ．【緊急対応】尿中代謝物の結果が出るまで現場で待機させる / 【対応表】トルエン—尿中馬尿酸、キシレン—尿中メチル馬尿酸
- ウ．【緊急対応】救助者の安全を確保してばく露源から退避させ、救急対応を開始する / 【対応表】トルエン—尿中馬尿酸、キシレン—尿中メチル馬尿酸
- エ．【緊急対応】翌月の特殊健康診断まで経過観察する / 【対応表】両方とも尿中2,5-ヘキサジオン

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。生命危機がある場合は退避・救命・医療を優先する。一方Bは不適切。鉛の指標である。

イ：Aは不適切。検査結果待ちで緊急対応を遅らせてはならない。

一方Bは適切。正しい。トルエンは馬尿酸、キシレンはメチル馬尿酸である。

ウ：Aは適切。正しい。生命危機がある場合は退避・救命・医療を優先する。

Bも適切。正しい。トルエンは馬尿酸、キシレンはメチル馬尿酸である。

エ：Aは不適切。急性重症症状では直に対応する。Bも不適切。ノルマルヘキサンの指標である。

総合解説：Aについて：生物学的モニタリングは有用だが、急性中毒の救命処置を遅らせるものではない。

Bについて：有機溶剤健診の代謝物は名称が似ているため、トルエンとキシレンの対応を正確に区別する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0028 化学的有害因子 > 化学物質中毒・生物学的モニタリング | 難易度：標準

次の確認事項A・Bについて、適切な説明だけを組み合わせたものはどれか。

A：多経路ばく露

B：定義

- ア．【多経路ばく露】皮膚吸収や作業方法、保護具の不適切使用など他のばく露経路も確認する / 【定義】胸部X線だけで作業場濃度を算出する
- イ．【多経路ばく露】生物学的モニタリング値は作業と無関係なので無視する / 【定義】血液や尿中の化学物質・代謝物等を測定し、体内への取り込みの程度を評価する
- ウ．【多経路ばく露】換気を止めて値の変化を見る / 【定義】局所排気装置の風速だけを測定する
- エ．【多経路ばく露】皮膚吸収や作業方法、保護具の不適切使用など他のばく露経路も確認する / 【定義】血液や尿中の化学物質・代謝物等を測定し、体内への取り込みの程度を評価する

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。体内取り込みは吸入以外の経路も影響し得る。

一方Bは不適切。胸部X線は生体影響評価であり、環境濃度算出法ではない。

イ：Aは不適切。作業との関連を評価するために用いる。一方Bは適切。正しい。生体試料を用いて体内負荷や影響を評価する。

ウ：Aは不適切。換気停止はばく露増加につながる。Bも不適切。局排風速測定は設備管理である。

エ：Aは適切。正しい。体内取り込みは吸入以外の経路も影響し得る。

Bも適切。正しい。生体試料を用いて体内負荷や影響を評価する。

総合解説：Aについて：外部濃度と体内負荷が一致しない場合は、皮膚接触、保護具、作業時間、採取時期等を再評価する。

Bについて：生物学的モニタリングは、吸入だけでなく皮膚等からの取り込みも含めた総合的な体内負荷の把握に役立つ。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0029 化学的有害因子 > 化学物質中毒・生物学的モニタリング | 難易度：応用

二つの論点を関連付けて判断する問題である。両方の記述が正しい選択肢はどれか。

A：結果解釈

B：事後措置

ア．【結果解釈】値はばく露評価の一情報であり、症状、作業条件、他の検査結果等と合わせて評価する /

【事後措置】作業条件や換気設備、保護具、環境測定結果を再点検し、ばく露低減措置を検討する

イ．【結果解釈】値はばく露評価の一情報であり、症状、作業条件、他の検査結果等と合わせて評価する /

【事後措置】個人の体質だけで決めつけて作業条件を調べない

ウ．【結果解釈】検査値だけで作業環境改善の必要性を否定できる /

【事後措置】作業条件や換気設備、保護具、環境測定結果を再点検し、ばく露低減措置を検討する

エ．【結果解釈】基準を超えれば、それだけで特定の職業病の確定診断となる /

【事後措置】異常者を叱責して作業を続けさせる

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。総合的評価が必要である。Bも適切。正しい。健康管理情報を作業環境・作業管理の改善へ還元する。
イ：Aは適切。正しい。総合的評価が必要である。一方Bは不適切。集団的傾向があれば作業要因を検討すべきである。

ウ：Aは不適切。環境管理は独立して評価する必要がある。

一方Bは適切。正しい。健康管理情報を作業環境・作業管理の改善へ還元する。

エ：Aは不適切。生物学的指標だけで疾病診断が確定するとは限らない。Bも不適切。健康障害防止につながらない。

総合解説：Aについて：生物学的モニタリングは、健康診断・作業環境・作業条件と統合して判断するための指標である。

Bについて：労働衛生の三管理は相互に関連する。健診で問題が示唆された場合、作業環境管理・作業管理を含め原因を検討する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0030 化学的有害因子 > 化学物質中毒・生物学的モニタリング | 難易度：応用

次のA・Bの説明を確認した。訂正の必要がない組合せはどれか。

A：事後措置

B：対応表

ア．【事後措置】作業条件や換気設備、保護具、環境測定結果を再点検し、ばく露低減措置を検討する /

【対応表】両方とも血中鉛量

イ．【事後措置】作業条件や換気設備、保護具、環境測定結果を再点検し、ばく露低減措置を検討する /

【対応表】トルエン—尿中馬尿酸、キシレン—尿中メチル馬尿酸

ウ．【事後措置】個人の体質だけで決めつけて作業条件を調べない /

【対応表】トルエン—尿中馬尿酸、キシレン—尿中メチル馬尿酸

エ．【事後措置】異常者を叱責して作業を続けさせる / 【対応表】両方とも尿中2,5-ヘキサンジオン

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。健康管理情報を作業環境・作業管理の改善へ還元する。一方Bは不適切。鉛の指標である。

イ：Aは適切。正しい。健康管理情報を作業環境・作業管理の改善へ還元する。

Bも適切。正しい。トルエンは馬尿酸、キシレンはメチル馬尿酸である。

ウ：Aは不適切。集団的傾向があれば作業要因を検討すべきである。

一方Bは適切。正しい。トルエンは馬尿酸、キシレンはメチル馬尿酸である。

エ：Aは不適切。健康障害防止につながらない。Bも不適切。ノルマルヘキサンの指標である。

総合解説：Aについて：労働衛生の三管理は相互に関連する。健診で問題が示唆された場合、作業環境管理・作業管理を含め原因を検討する。Bについて：有機溶剤健診の代謝物は名称が似ているため、トルエンとキシレンの対応を正確に区別する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0031 粉じん・物理的有害因子>粉じん・石綿・じん肺 | 難易度：基礎

次の二つの論点に関する説明の組合せとして、両方とも適切なものはどれか。

A：原因物質

B：粒子径

ア．【原因物質】けい肺 / 【粒子径】大きい粒子ほど必ず肺胞深部に到達する

イ．【原因物質】騒音性難聴 / 【粒子径】微細な呼吸性粉じんは肺胞領域まで到達し得る

ウ．【原因物質】けい肺 / 【粒子径】微細な呼吸性粉じんは肺胞領域まで到達し得る

エ．【原因物質】減圧症 / 【粒子径】粉じんはすべて鼻腔だけに沈着する

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。遊離けい酸を含む粉じんの吸入はけい肺の原因となる。

一方Bは不適切。大きな粒子は上気道で捕捉されやすい。

イ：Aは不適切。騒音ばく露による障害である。一方Bは適切。正しい。微細粒子は深部呼吸器へ到達しやすい。

ウ：Aは適切。正しい。遊離けい酸を含む粉じんの吸入はけい肺の原因となる。

Bも適切。正しい。微細粒子は深部呼吸器へ到達しやすい。

エ：Aは不適切。異常気圧による障害である。Bも不適切。微細粉じんは肺胞まで到達し得る。

総合解説：Aについて：けい肺はじん肺の代表で、遊離けい酸を含む呼吸性粉じんへの長期ばく露により発症する。

Bについて：粉じんの健康影響は化学組成だけでなく、粒子径と呼吸器内への到達性に左右される。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0032 粉じん・物理的有害因子>粉じん・石綿・じん肺 | 難易度：基礎

新人教育用の確認資料を作成する。次の組合せのうち、二つの説明がともに適切なものはどれか。

A：粒子径

B：管理区分

ア．【粒子径】微細な呼吸性粉じんは肺胞領域まで到達し得る /

【管理区分】粉じん作業歴があるだけの状態

イ．【粒子径】大きい粒子ほど必ず肺胞深部に到達する /

【管理区分】大きな大陰影がある、または著しい肺機能障害がある状態

ウ．【粒子径】粉じんはすべて鼻腔だけに沈着する / 【管理区分】胸部X線にじん肺所見がない状態

エ．【粒子径】微細な呼吸性粉じんは肺胞領域まで到達し得る /

【管理区分】大きな大陰影がある、または著しい肺機能障害がある状態

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。微細粒子は深部呼吸器へ到達しやすい。一方Bは不適切。作業歴だけでは管理四にならない。

イ：Aは不適切。大きな粒子は上気道で捕捉されやすい。

一方Bは適切。正しい。管理四は重いX線所見や著しい肺機能障害を含む。

ウ：Aは不適切。微細粉じんは肺胞まで到達し得る。Bも不適切。管理一に相当する。

エ：Aは適切。正しい。微細粒子は深部呼吸器へ到達しやすい。

Bも適切。正しい。管理四は重いX線所見や著しい肺機能障害を含む。

総合解説：Aについて：粉じんの健康影響は化学組成だけでなく、粒子径と呼吸器内への到達性に左右される。

Bについて：管理四はじん肺管理区分の中で最も重い区分であり、X線像や肺機能障害の程度で判定される。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0033 粉じん・物理的有害因子>粉じん・石綿・じん肺 | 難易度：標準

衛生管理の復習として、二つの事項を同時に確認する。記述の組合せとして正しいものはどれか。

A：管理区分

B：長期影響

ア．【管理区分】じん肺の所見がないと認められる状態 /

【長期影響】長い潜伏期間を考慮し、過去ばく露歴も含めて継続的に健康管理する

イ．【管理区分】じん肺の所見がないと認められる状態 /

【長期影響】作業終了直後に症状がなければ将来リスクはない

ウ．【管理区分】療養を要する状態を一律にいう /

【長期影響】長い潜伏期間を考慮し、過去ばく露歴も含めて継続的に健康管理する

エ．【管理区分】著しい肺機能障害がある状態 /

【長期影響】臭いがしない日は石綿ばく露がないと判断する

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。管理一はじん肺所見なしと認められるもの。

Bも適切。正しい。過去のばく露歴を含め長期的な健康管理が必要である。

イ：Aは適切。正しい。管理一はじん肺所見なしと認められるもの。一方Bは不適切。石綿関連疾患は長い潜伏期間を持つ。

ウ：Aは不適切。管理一は療養状態を示す区分ではない。

一方Bは適切。正しい。過去のばく露歴を含め長期的な健康管理が必要である。

エ：Aは不適切。著しい肺機能障害がある場合は管理一ではない。Bも不適切。石綿は臭気で安全確認できない。

総合解説：Aについて：じん肺管理区分は管理一から管理四まであり、X線像や肺機能障害等に基づいて健康管理を行う。

Bについて：石綿は健康影響が発現するまで長期間を要することがあり、記録・健診が長期保存される背景にもなっている。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0034 粉じん・物理的有害因子>粉じん・石綿・じん肺 | 難易度：標準

次のA・Bに関する説明のうち、誤りを含まない組合せはどれか。

A：管理区分

B：関連疾患

ア．【管理区分】大きな大陰影がある、または著しい肺機能障害がある状態 /

【関連疾患】一酸化炭素中毒、騒音性難聴、腰痛

イ．【管理区分】大きな大陰影がある、または著しい肺機能障害がある状態 /

【関連疾患】石綿肺、肺がん、中皮腫

ウ．【管理区分】胸部X線にじん肺所見がない状態 / 【関連疾患】石綿肺、肺がん、中皮腫

エ．【管理区分】第一型で肺機能障害が全くない状態 / 【関連疾患】有機溶剤中毒、皮膚凍傷、眼精疲労

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。管理四は重いX線所見や著しい肺機能障害を含む。一方Bは不適切。原因が異なる。

イ：Aは適切。正しい。管理四は重いX線所見や著しい肺機能障害を含む。

Bも適切。正しい。石綿では肺線維症である石綿肺のほか、肺がんや中皮腫が重要である。

ウ：Aは不適切。管理一に相当する。

一方Bは適切。正しい。石綿では肺線維症である石綿肺のほか、肺がんや中皮腫が重要である。

エ：Aは不適切。一般に管理二等に関連する。Bも不適切。原因が異なる。

総合解説：Aについて：管理四はじん肺管理区分の中で最も重い区分であり、X線像や肺機能障害の程度で判定される。

Bについて：石綿は長い潜伏期間を経て石綿肺、肺がん、中皮腫などを生じ得るため、ばく露防止と長期健康管理が重要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0035 粉じん・物理的有害因子>粉じん・石綿・じん肺 | 難易度：基礎

研修担当者が二つの事項を説明した。内容がともに適切なものを選べ。

A：関連疾患

B：健康診断

ア：【関連疾患】石綿肺、肺がん、中皮腫 / 【健康診断】手指の末梢循環を測る

イ：【関連疾患】一酸化炭素中毒、騒音性難聴、腰痛 /

【健康診断】じん肺による粒状影・不整形陰影・大陰影等の肺所見を評価する

ウ：【関連疾患】石綿肺、肺がん、中皮腫 /

【健康診断】じん肺による粒状影・不整形陰影・大陰影等の肺所見を評価する

エ：【関連疾患】有機溶剤中毒、皮膚凍傷、眼精疲労 / 【健康診断】聴力低下の程度を測る

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。石綿では肺線維症である石綿肺のほか、肺がんや中皮腫が重要である。

一方Bは不適切。末梢循環は振動障害評価に関連する。

イ：Aは不適切。原因が異なる。一方Bは適切。正しい。X線像はじん肺の型・管理区分判断の重要な情報となる。

ウ：Aは適切。正しい。石綿では肺線維症である石綿肺のほか、肺がんや中皮腫が重要である。

Bも適切。正しい。X線像はじん肺の型・管理区分判断の重要な情報となる。

エ：Aは不適切。原因が異なる。Bも不適切。聴力は騒音健診等で評価する。

総合解説：Aについて：石綿は長い潜伏期間を経て石綿肺、肺がん、中皮腫などを生じ得るため、ばく露防止と長期健康管理が重要である。Bについて：じん肺法では胸部X線像を第一型から第四型まで区分し、肺機能等と合わせて管理区分を判断する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0036 粉じん・物理的有害因子>粉じん・石綿・じん肺 | 難易度：標準

次の二つの事項について整理したメモのうち、両方とも正しいものはどれか。

A：長期影響

B：保護具

ア：【長期影響】長い潜伏期間を考慮し、過去ばく露歴も含めて継続的に健康管理する /

【保護具】防じんマスクを着ければ局所排気装置は必ず停止してよい

イ：【長期影響】皮膚症状だけを確認すればよい /

【保護具】適切な種類・性能・装着状態を確保し、工学的対策と組み合わせて用いる

ウ：【長期影響】作業終了直後に症状がなければ将来リスクはない /

【保護具】マスクは顔から浮いていてもろ過材が新品ならよい

エ：【長期影響】長い潜伏期間を考慮し、過去ばく露歴も含めて継続的に健康管理する /

【保護具】適切な種類・性能・装着状態を確保し、工学的対策と組み合わせて用いる

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。過去のばく露歴を含め長期的な健康管理が必要である。

一方Bは不適切。保護具は工学的対策の代替として安易に使わない。

イ：Aは不適切。主要な問題は呼吸器・悪性腫瘍等である。一方Bは適切。正しい。選択と適正装着が重要である。

ウ：Aは不適切。石綿関連疾患は長い潜伏期間を持つ。Bも不適切。漏れ込みが生じるため密着が必要である。

エ：Aは適切。正しい。過去のばく露歴を含め長期的な健康管理が必要である。Bも適切。正しい。選択と適正装着が重要である。

総合解説：Aについて：石綿は健康影響が発現するまで長期間を要することがあり、記録・健診が長期保存される背景にもなっている。Bについて：呼吸用保護具は危険性に応じて選び、面体の密着や保守管理を含めて適正使用する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0037 粉じん・物理的有害因子>粉じん・石綿・じん肺 | 難易度：標準

試験対策として二つの関連事項を比較する。正しい説明の組合せはどれか。

A：工学的対策

B：管理区分

ア．【工学的対策】発生源の密閉化、湿潤化、局所排気等で粉じんの発散を抑える /

【管理区分】じん肺の所見がないと認められる状態

イ．【工学的対策】発生源の密閉化、湿潤化、局所排気等で粉じんの発散を抑える /

【管理区分】大陰影がある状態だけをいう

ウ．【工学的対策】作業後のうがいだけを行う / 【管理区分】じん肺の所見がないと認められる状態

エ．【工学的対策】窓を閉めて粉じんを室内に保持する / 【管理区分】療養を要する状態を一律にいう

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。発散源対策や工学的対策を優先する。 Bも適切。正しい。管理一はじん肺所見なしと認められるもの。

イ：Aは適切。正しい。発散源対策や工学的対策を優先する。 一方Bは不適切。大陰影はX線像第四型に関係する。

ウ：Aは不適切。うがいは発散源対策の代替にならない。 一方Bは適切。正しい。管理一はじん肺所見なしと認められるもの。

エ：Aは不適切。室内濃度を高めるおそれがある。 Bも不適切。管理一は療養状態を示す区分ではない。

総合解説：Aについて：粉じん障害防止では、発散そのものを抑制し、作業環境濃度を低減した上で必要な保護具を使用する。

Bについて：じん肺管理区分は管理一から管理四まであり、X線像や肺機能障害等に基づいて健康管理を行う。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0038 粉じん・物理的有害因子>粉じん・石綿・じん肺 | 難易度：標準

次の確認事項A・Bについて、適切な説明だけを組み合わせたものはどれか。

A：保護具

B：粒子径

ア．【保護具】適切な種類・性能・装着状態を確保し、工学的対策と組み合わせる /

【粒子径】粉じんはすべて鼻腔だけに沈着する

イ．【保護具】適切な種類・性能・装着状態を確保し、工学的対策と組み合わせる /

【粒子径】微細な呼吸性粉じんは肺胞領域まで到達し得る

ウ．【保護具】マスクは顔から浮いていてもろ過材が新品ならよい /

【粒子径】微細な呼吸性粉じんは肺胞領域まで到達し得る

エ．【保護具】酸素欠乏場所でも通常の防じんマスクだけで十分である /

【粒子径】粒子径は呼吸器への到達部位に影響しない

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。選択と適正装着が重要である。 一方Bは不適切。微細粉じんは肺胞まで到達し得る。

イ：Aは適切。正しい。選択と適正装着が重要である。 Bも適切。正しい。微細粒子は深部呼吸器へ到達しやすい。

ウ：Aは不適切。漏れ込みが生じるため密着が必要である。 一方Bは適切。正しい。微細粒子は深部呼吸器へ到達しやすい。

エ：Aは不適切。酸素欠乏ではろ過式マスクは酸素を供給できない。 Bも不適切。粒子径は沈着部位を左右する重要因子である。

総合解説：Aについて：呼吸用保護具は危険性に応じて選び、面体の密着や保守管理を含めて適正使用する。

Bについて：粉じんの健康影響は化学組成だけでなく、粒子径と呼吸器内への到達性に左右される。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0039 粉じん・物理的有害因子>粉じん・石綿・じん肺 | 難易度：標準

二つの論点を関連付けて判断する問題である。両方の記述が正しい選択肢はどれか。

A：健康診断

B：原因物質

ア．【健康診断】じん肺による粒状影・不整形陰影・大陰影等の肺所見を評価する /

【原因物質】騒音性難聴

イ．【健康診断】手指の末梢循環を測る / 【原因物質】けい肺

ウ．【健康診断】じん肺による粒状影・不整形陰影・大陰影等の肺所見を評価する / 【原因物質】けい肺

エ．【健康診断】聴力低下の程度を測る / 【原因物質】減圧症

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。X線像はじん肺の型・管理区分判断の重要な情報となる。一方Bは不適切。騒音ばく露による障害である。

イ：Aは不適切。末梢循環は振動障害評価に関連する。

一方Bは適切。正しい。遊離けい酸を含む粉じんの吸入はけい肺の原因となる。

ウ：Aは適切。正しい。X線像はじん肺の型・管理区分判断の重要な情報となる。

Bも適切。正しい。遊離けい酸を含む粉じんの吸入はけい肺の原因となる。

エ：Aは不適切。聴力は騒音健診等で評価する。Bも不適切。異常気圧による障害である。

総合解説：Aについて：じん肺法では胸部X線像を第一型から第四型まで区分し、肺機能等と合わせて管理区分を判断する。

Bについて：けい肺はじん肺の代表で、遊離けい酸を含む呼吸性粉じんへの長期ばく露により発症する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0040 粉じん・物理的有害因子>騒音・振動 | 難易度：基礎

次の二つの論点に関する説明の組合せとして、両方とも適切なものはどれか。

A：健康影響

B：工学的対策

ア．【健康影響】長期間の強い騒音ばく露により生じる感音性難聴で、進行すると回復が困難である /

【工学的対策】作業者に大声で会話するよう指示する

イ．【健康影響】外耳道の汚れだけが原因で必ず完全回復する /

【工学的対策】低騒音機械への変更、防音囲い、吸音・遮音など発生源・伝ば経路の対策

ウ．【健康影響】騒音の強さやばく露時間とは無関係である /

【工学的対策】健康診断だけ行い騒音源はそのままにする

エ．【健康影響】長期間の強い騒音ばく露により生じる感音性難聴で、進行すると回復が困難である /

【工学的対策】低騒音機械への変更、防音囲い、吸音・遮音など発生源・伝ば経路の対策

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。内耳の感覚細胞等が障害される感音性難聴で、予防が重要である。

一方Bは不適切。さらに騒音ばく露を増やし得る。

イ：Aは不適切。伝音性の一時的障害だけではない。

一方Bは適切。正しい。発生源や伝ば経路で騒音を低減する工学的対策が優先される。

ウ：Aは不適切。騒音ばく露量が重要である。Bも不適切。健康診断は騒音低減の代替ではない。

エ：Aは適切。正しい。内耳の感覚細胞等が障害される感音性難聴で、予防が重要である。

Bも適切。正しい。発生源や伝ば経路で騒音を低減する工学的対策が優先される。

総合解説：Aについて：騒音性難聴は進行後の回復が難しいため、騒音源対策、ばく露時間管理、聴覚保護具、健康診断を組み合わせる。

Bについて：騒音対策は発生源対策・伝ば経路対策を優先し、作業時間管理や聴覚保護具を組み合わせる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0041 粉じん・物理的有害因子>騒音・振動 | 難易度：標準

新人教育用の確認資料を作成する。次の組合せのうち、二つの説明がともに適切なものはどれか。

A：工学的対策

B：健康影響

ア．【工学的対策】低騒音機械への変更、防音囲い、吸音・遮音など発生源・伝ば経路の対策 /

【健康影響】末梢循環障害、末梢神経障害、筋骨格系症状など

イ．【工学的対策】低騒音機械への変更、防音囲い、吸音・遮音など発生源・伝ば経路の対策 /

【健康影響】眼の水晶体混濁だけ

ウ．【工学的対策】作業者に大声で会話するよう指示する /

【健康影響】末梢循環障害、末梢神経障害、筋骨格系症状など

エ．【工学的対策】健康診断だけ行い騒音源はそのままにする / 【健康影響】肺胞の線維化だけ

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。発生源や伝ば経路で騒音を低減する工学的対策が優先される。

Bも適切。正しい。白ろう現象を含む循環障害などが代表的である。

イ：Aは適切。正しい。発生源や伝ば経路で騒音を低減する工学的対策が優先される。

一方Bは不適切。光学的・放射線等の障害と混同している。

ウ：Aは不適切。さらに騒音ばく露を増やし得る。一方Bは適切。正しい。白ろう現象を含む循環障害などが代表的である。

エ：Aは不適切。健康診断は騒音低減の代替ではない。Bも不適切。粉じんによる肺障害と混同している。

総合解説：Aについて：騒音対策は発生源対策・伝ば経路対策を優先し、作業時間管理や聴覚保護具を組み合わせる。

Bについて：手腕振動障害は循環・神経・筋骨格系の複合的障害で、工具の低振動化とばく露時間管理が重要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0042 粉じん・物理的有害因子>騒音・振動 | 難易度：標準

衛生管理の復習として、二つの事項を同時に確認する。記述の組合せとして正しいものはどれか。

A：保護具

B：数値基準

ア．【保護具】作業者に適した保護具を選び、正しく装着して遮音性能を確保する /

【数値基準】対策値を5.0m/s²、限界値を2.5m/s²とする

イ．【保護具】作業者に適した保護具を選び、正しく装着して遮音性能を確保する /

【数値基準】限界値を5.0m/s²、対策値を2.5m/s²とし、限界値超過を避ける

ウ．【保護具】耳栓を使えば騒音源対策は法律上禁止される /

【数値基準】限界値を5.0m/s²、対策値を2.5m/s²とし、限界値超過を避ける

エ．【保護具】どの耳栓でも装着方法に関係なく同じ効果が得られる /

【数値基準】限界値10m/s²、対策値8m/s²として管理する

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。種類の選定と装着が重要である。一方Bは不適切。限界値と対策値が逆である。

イ：Aは適切。正しい。種類の選定と装着が重要である。

Bも適切。正しい。5.0m/s²を超えないようにし、2.5m/s²超では低減対策に努める。

ウ：Aは不適切。耳栓と工学的対策は併用する。

一方Bは適切。正しい。5.0m/s²を超えないようにし、2.5m/s²超では低減対策に努める。

エ：Aは不適切。装着不良で期待した遮音性能が得られないことがある。Bも不適切。指針の値ではない。

総合解説：Aについて：聴覚保護具は実際の装着状態で性能が左右されるため、教育・点検と適切な選定が必要である。

Bについて：振動対策ではA(8) 5.0m/s²が日振動ばく露限界値、2.5m/s²が日振動ばく露対策値である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0043 粉じん・物理的有害因子>騒音・振動 | 難易度：基礎

次のA・Bに関する説明のうち、誤りを含まない組合せはどれか。

A：健康影響

B：ばく露評価

ア：【健康影響】末梢循環障害、末梢神経障害、筋骨格系症状など /

【ばく露評価】血中鉛濃度を表す指標である

イ：【健康影響】肺胞の線維化だけ /

【ばく露評価】振動加速度と1日のばく露時間を用いて8時間等価の振動ばく露を評価する指標である

ウ：【健康影響】末梢循環障害、末梢神経障害、筋骨格系症状など /

【ばく露評価】振動加速度と1日のばく露時間を用いて8時間等価の振動ばく露を評価する指標である

エ：【健康影響】白血病だけ / 【ばく露評価】放射線の実効線量を表す指標である

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。白ろう現象を含む循環障害などが代表的である。一方Bは不適切。生物学的モニタリング指標ではない。

イ：Aは不適切。粉じんによる肺障害と混同している。一方Bは適切。正しい。3軸合成振動加速度とばく露時間から求める。

ウ：Aは適切。正しい。白ろう現象を含む循環障害などが代表的である。

Bも適切。正しい。3軸合成振動加速度とばく露時間から求める。

エ：Aは不適切。放射線や化学物質等の影響と混同している。Bも不適切。放射線線量指標ではない。

総合解説：Aについて：手腕振動障害は循環・神経・筋骨格系の複合的障害で、工具の低振動化とばく露時間管理が重要である。

Bについて：A(8)を用いることで、工具の振動強さと使用時間を合わせて1日ばく露量として評価できる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0044 粉じん・物理的有害因子>騒音・振動 | 難易度：標準

研修担当者が二つの事項を説明した。内容がともに適切なものを選べ。

A：ばく露評価

B：健康影響

ア：【ばく露評価】振動加速度と1日のばく露時間を用いて8時間等価の振動ばく露を評価する指標である /

【健康影響】主症状は腎機能障害である

イ：【ばく露評価】血中鉛濃度を表す指標である /

【健康影響】長期間の強い騒音ばく露により生じる感音性難聴で、進行すると回復が困難である

ウ：【ばく露評価】放射線の実効線量を表す指標である /

【健康影響】外耳道の汚れだけが原因で必ず完全回復する

エ：【ばく露評価】振動加速度と1日のばく露時間を用いて8時間等価の振動ばく露を評価する指標である /

【健康影響】長期間の強い騒音ばく露により生じる感音性難聴で、進行すると回復が困難である

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。3軸合成振動加速度とばく露時間から求める。一方Bは不適切。腎機能障害は騒音性難聴の主症状ではない。

イ：Aは不適切。生物学的モニタリング指標ではない。

一方Bは適切。正しい。内耳の感覚細胞等が障害される感音性難聴で、予防が重要である。

ウ：Aは不適切。放射線線量指標ではない。Bも不適切。伝音性の一時的障害だけではない。

エ：Aは適切。正しい。3軸合成振動加速度とばく露時間から求める。

Bも適切。正しい。内耳の感覚細胞等が障害される感音性難聴で、予防が重要である。

総合解説：Aについて：A(8)を用いることで、工具の振動強さと使用時間を合わせて1日ばく露量として評価できる。

Bについて：騒音性難聴は進行後の回復が難しいため、騒音源対策、ばく露時間管理、聴覚保護具、健康診断を組み合わせる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0045 粉じん・物理的有害因子>騒音・振動 | 難易度：応用

次の二つの事項について整理したメモのうち、両方とも正しいものはどれか。

A：数値基準

B：作業方法

ア．【数値基準】限界値を 5.0m/s^2 、対策値を 2.5m/s^2 とし、限界値超過を避ける /

【作業方法】ハンドルを過度に強く握らず、可能なら支持装置等を用いて負担を減らす

イ．【数値基準】限界値を 5.0m/s^2 、対策値を 2.5m/s^2 とし、限界値超過を避ける /

【作業方法】ハンドルを最大限強く握り続ける

ウ．【数値基準】A(8)には数値による対策値・限界値を設けない /

【作業方法】ハンドルを過度に強く握らず、可能なら支持装置等を用いて負担を減らす

エ．【数値基準】対策値を 5.0m/s^2 、限界値を 2.5m/s^2 とする / 【作業方法】工具の振動を肩や腹で受け止める

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。 5.0m/s^2 を超えないようにし、 2.5m/s^2 超では低減対策に努める。

Bも適切。正しい。指針は過度な把持を避け、支持装置等を利用することを推奨する。

イ：Aは適切。正しい。 5.0m/s^2 を超えないようにし、 2.5m/s^2 超では低減対策に努める。

一方Bは不適切。過度な握力は筋緊張や振動伝達を増やす。

ウ：Aは不適切。明確な指標が示されている。

一方Bは適切。正しい。指針は過度な把持を避け、支持装置等を利用することを推奨する。

エ：Aは不適切。限界値と対策値が逆である。Bも不適切。身体に振動を直接伝える方法は避ける。

総合解説：Aについて：振動対策ではA(8) 5.0m/s^2 が日振動ばく露限界値、 2.5m/s^2 が日振動ばく露対策値である。

Bについて：振動障害予防では、低振動工具の選定、適正な保持、休止時間、保温、点検整備などを組み合わせる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0046 粉じん・物理的有害因子>騒音・振動 | 難易度：応用

試験対策として二つの関連事項を比較する。正しい説明の組合せはどれか。

A：簡易計算

B：健康影響

ア．【簡易計算】0.5倍 / 【健康影響】白血病だけ

イ．【簡易計算】0.5倍 / 【健康影響】末梢循環障害、末梢神経障害、筋骨格系症状など

ウ．【簡易計算】1倍のまま / 【健康影響】末梢循環障害、末梢神経障害、筋骨格系症状など

エ．【簡易計算】約0.71倍 / 【健康影響】眼の水晶体混濁だけ

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。 $\sqrt{2/8}=0.5$ なので半分になる。一方Bは不適切。放射線や化学物質等の影響と混同している。

イ：Aは適切。正しい。 $\sqrt{2/8}=0.5$ なので半分になる。Bも適切。正しい。白ろう現象を含む循環障害などが代表的である。

ウ：Aは不適切。ばく露時間が変わるため同じではない。一方Bは適切。正しい。白ろう現象を含む循環障害などが代表的である。

エ：Aは不適切。 $\sqrt{1/2}$ ではなく $\sqrt{2/8}=\sqrt{1/4}$ を用いる。Bも不適切。光学的・放射線等の障害と混同している。

総合解説：Aについて：A(8)はばく露時間の平方根に比例する。振動強度だけでなく使用時間短縮も有効な対策となる。

Bについて：手腕振動障害は循環・神経・筋骨格系の複合的障害で、工具の低振動化とばく露時間管理が重要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0047 粉じん・物理的有害因子>騒音・振動 | 難易度：標準

次の確認事項A・Bについて、適切な説明だけを組み合わせたものはどれか。

A：作業方法

B：保護具

ア：【作業方法】ハンドルを過度に強く握らず、可能なら支持装置等を用いて負担を減らす /

【保護具】耳栓を使えば騒音源対策は法律上禁止される

イ：【作業方法】工具の振動を肩や腹で受け止める /

【保護具】作業者に適した保護具を選び、正しく装着して遮音性能を確保する

ウ：【作業方法】ハンドルを過度に強く握らず、可能なら支持装置等を用いて負担を減らす /

【保護具】作業者に適した保護具を選び、正しく装着して遮音性能を確保する

エ：【作業方法】工具の重量をすべて腕力だけで支える /

【保護具】どの耳栓でも装着方法に関係なく同じ効果が得られる

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。指針は過度な把持を避け、支持装置等を利用することを推奨する。

一方Bは不適切。耳栓と工学的対策は併用する。

イ：Aは不適切。身体に振動を直接伝える方法は避ける。一方Bは適切。正しい。種類の選定と装着が重要である。

ウ：Aは適切。正しい。指針は過度な把持を避け、支持装置等を利用することを推奨する。

Bも適切。正しい。種類の選定と装着が重要である。

エ：Aは不適切。支持装置等で負担を軽減するのが望ましい。Bも不適切。装着不良で期待した遮音性能が得られないことがある。

総合解説：Aについて：振動障害予防では、低振動工具の選定、適正な保持、休止時間、保温、点検整備などを組み合わせる。

Bについて：聴覚保護具は実際の装着状態で性能が左右されるため、教育・点検と適切な選定が必要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0048 粉じん・物理的有害因子>放射線・有害光線・異常気圧 | 難易度：基礎

次の二つの論点に関する説明の組合せとして、両方とも適切なものはどれか。

A：管理区域

B：線量限度

ア：【管理区域】外部放射線等による実効線量が3か月につき1.3mSvを超えるおそれがある区域などを管理区域として明示する / 【線量限度】3か月1.3mSvが個人線量限度である

イ：【管理区域】放射線機器がある建物全体を無条件に管理区域とする /

【線量限度】5年間100mSvかつ1年間50mSvを超えない

ウ：【管理区域】1年間に1mSv以下でも必ず管理区域にする / 【線量限度】生涯で1mSvを超えてはならない

エ：【管理区域】外部放射線等による実効線量が3か月につき1.3mSvを超えるおそれがある区域などを管理区域として明示する / 【線量限度】5年間100mSvかつ1年間50mSvを超えない

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。線量や表面汚染の基準で設定する。一方Bは不適切。1.3mSv/3か月は管理区域基準の一つである。

イ：Aは不適切。機器の存在だけで一律に建物全体を管理区域とするわけではない。

一方Bは適切。正しい。5年100mSvかつ1年50mSvが限度である。

ウ：Aは不適切。規則上の管理区域基準による。Bも不適切。職業被ばくの法定限度ではない。

エ：Aは適切。正しい。線量や表面汚染の基準で設定する。Bも適切。正しい。5年100mSvかつ1年50mSvが限度である。

総合解説：Aについて：管理区域は放射線ばく露を管理するための区域で、標識や立入管理、線量測定等が行われる。

Bについて：放射線防護では累積線量と単年線量の双方を管理し、個人線量測定を行う。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0049 粉じん・物理的有害因子>放射線・有害光線・異常気圧 | 難易度：標準

新人教育用の確認資料を作成する。次の組合せのうち、二つの説明がともに適切なものはどれか。

A：線量限度
B：保護具選択

ア：【線量限度】5年間100mSvかつ1年間50mSvを超えない /
【保護具選択】レーザーの波長や出力に適合した保護眼鏡を選定する
イ：【線量限度】5年間100mSvかつ1年間50mSvを超えない /
【保護具選択】保護眼鏡があれば光路の遮へいは不要である
ウ：【線量限度】3か月1.3mSvが個人線量限度である /
【保護具選択】レーザーの波長や出力に適合した保護眼鏡を選定する
エ：【線量限度】生涯で1mSvを超えてはならない /
【保護具選択】透明であればどのレーザーにも同じ眼鏡を使う

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。5年100mSvかつ1年50mSvが限度である。
Bも適切。正しい。使用レーザーに適合した保護性能が必要である。
イ：Aは適切。正しい。5年100mSvかつ1年50mSvが限度である。一方Bは不適切。工学的対策も重要である。
ウ：Aは不適切。1.3mSv/3か月は管理区域基準の一つである。
一方Bは適切。正しい。使用レーザーに適合した保護性能が必要である。
エ：Aは不適切。職業被ばくの法定限度ではない。Bも不適切。レーザーの波長・出力に必要な遮光性能が異なる。
総合解説：Aについて：放射線防護では累積線量と単年線量の双方を管理し、個人線量測定を行う。
Bについて：レーザー保護具は『眼鏡なら何でもよい』のではなく、対象波長や出力に応じた選択が必要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0050 粉じん・物理的有害因子>放射線・有害光線・異常気圧 | 難易度：基礎

衛生管理の復習として、二つの事項を同時に確認する。記述の組合せとして正しいものはどれか。

A：有害光線
B：減圧管理

ア：【有害光線】眼と皮膚 / 【減圧管理】作業者の聴力を測定するため
イ：【有害光線】眼と皮膚 /
【減圧管理】体内の不活性ガスを安全に排出させ、減圧症リスクを低減するため
ウ：【有害光線】膝関節だけ /
【減圧管理】体内の不活性ガスを安全に排出させ、減圧症リスクを低減するため
エ：【有害光線】腎臓だけ / 【減圧管理】血中鉛を下げるため

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。レーザー光線は眼や皮膚に重篤な障害を起こし得る。一方Bは不適切。聴力検査とは別の措置である。
イ：Aは適切。正しい。レーザー光線は眼や皮膚に重篤な障害を起こし得る。
Bも適切。正しい。過度に速い減圧を避けることが減圧症防止の基本である。
ウ：Aは不適切。主標的ではない。一方Bは適切。正しい。過度に速い減圧を避けることが減圧症防止の基本である。
エ：Aは不適切。レーザー障害の主標的ではない。Bも不適切。鉛とは関係しない。
総合解説：Aについて：レーザー業務では波長・出力等に応じて、光路管理、遮へい、保護眼鏡等により眼・皮膚へのばく露を防ぐ。
。Bについて：高気圧作業では圧力変化そのものが健康リスクとなるため、加圧・減圧手順の遵守が必要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0051 粉じん・物理的有害因子>放射線・有害光線・異常気圧 | 難易度：標準

次のA・Bに関する説明のうち、誤りを含まない組合せはどれか。

A：保護具選択

B：異常気圧

ア：【保護具選択】レーザーの波長や出力に適合した保護眼鏡を選定する /

【異常気圧】騒音で内耳だけが損傷する

イ：【保護具選択】透明であればどのレーザーにも同じ眼鏡を使える /

【異常気圧】体内に溶解していた不活性ガスが気泡化し、組織や血流に障害を生じる

ウ：【保護具選択】レーザーの波長や出力に適合した保護眼鏡を選定する /

【異常気圧】体内に溶解していた不活性ガスが気泡化し、組織や血流に障害を生じる

エ：【保護具選択】サングラスなら波長に関係なく十分である /

【異常気圧】石綿線維が急に肺胞へ析出する

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。使用レーザーに適合した保護性能が必要である。一方Bは不適切。騒音障害とは異なる。

イ：Aは不適切。レーザーの波長・出力に必要な遮光性能が異なる。

一方Bは適切。正しい。高圧下で溶け込んだ窒素等が急減圧で気泡化することが主要機序である。

ウ：Aは適切。正しい。使用レーザーに適合した保護性能が必要である。

Bも適切。正しい。高圧下で溶け込んだ窒素等が急減圧で気泡化することが主要機序である。

エ：Aは不適切。一般用サングラスで代替できるとは限らない。Bも不適切。石綿ばく露とは関係しない。

総合解説：Aについて：レーザー保護具は『眼鏡なら何でもよい』のではなく、対象波長や出力に応じた選択が必要である。

Bについて：減圧症予防では、規定された減圧・浮上速度や停止時間を守り、必要な場合は再圧治療につなげる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0052 粉じん・物理的有害因子>放射線・有害光線・異常気圧 | 難易度：基礎

研修担当者が二つの事項を説明した。内容がともに適切なものを選べ。

A：異常気圧

B：管理区域

ア：【異常気圧】体内に溶解していた不活性ガスが気泡化し、組織や血流に障害を生じる /

【管理区域】管理区域は労働者が自由に飲食する場所として設ける

イ：【異常気圧】騒音で内耳だけが損傷する / 【管理区域】外部放射線等による実効線量が3か月につき1.3mSvを超える

おそれがある区域などを管理区域として明示する

ウ：【異常気圧】石綿線維が急に肺胞へ析出する / 【管理区域】放射線機器がある建物全体を無条件に管理区域とする

エ：【異常気圧】体内に溶解していた不活性ガスが気泡化し、組織や血流に障害を生じる / 【管理区域】外部放射線等

による実効線量が3か月につき1.3mSvを超えるおそれがある区域などを管理区域として明示する

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。高圧下で溶け込んだ窒素等が急減圧で気泡化することが主要機序である。

一方Bは不適切。管理区域では立入・汚染等を管理する。

イ：Aは不適切。騒音障害とは異なる。一方Bは適切。正しい。線量や表面汚染の基準で設定する。

ウ：Aは不適切。石綿ばく露とは関係しない。Bも不適切。機器の存在だけで一律に建物全体を管理区域とするわけではない。

エ：Aは適切。正しい。高圧下で溶け込んだ窒素等が急減圧で気泡化することが主要機序である。

Bも適切。正しい。線量や表面汚染の基準で設定する。

総合解説：Aについて：減圧症予防では、規定された減圧・浮上速度や停止時間を守り、必要な場合は再圧治療につなげる。

Bについて：管理区域は放射線ばく露を管理するための区域で、標識や立入管理、線量測定等が行われる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0053 粉じん・物理的有害因子>放射線・有害光線・異常気圧 | 難易度：標準

次の二つの事項について整理したメモのうち、両方とも正しいものはどれか。

A：減圧管理

B：総合判断

ア．【減圧管理】体内の不活性ガスを安全に排出させ、減圧症リスクを低減するため /

【総合判断】電離放射線—個人線量管理、レーザー—波長に適した遮へい・保護眼鏡、高気圧—適切な減圧管理

イ．【減圧管理】体内の不活性ガスを安全に排出させ、減圧症リスクを低減するため /

【総合判断】電離放射線—防振手袋、レーザー—防じんマスク、高気圧—耳栓だけ

ウ．【減圧管理】有機溶剤蒸気を捕集するため /

【総合判断】電離放射線—個人線量管理、レーザー—波長に適した遮へい・保護眼鏡、高気圧—適切な減圧管理

エ．【減圧管理】作業者の聴力を測定するため /

【総合判断】電離放射線—尿中馬尿酸、レーザー—局排だけ、高気圧—血中鉛測定

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。過度に速い減圧を避けることが減圧症防止の基本である。

Bも適切。正しい。各有害因子の物理的特性に応じた対策が必要である。

イ：Aは適切。正しい。過度に速い減圧を避けることが減圧症防止の基本である。一方Bは不適切。対策の対応が誤っている。

ウ：Aは不適切。局所排気の目的である。一方Bは適切。正しい。各有害因子の物理的特性に応じた対策が必要である。

エ：Aは不適切。聴力検査とは別の措置である。Bも不適切。検査・対策の組合せが誤っている。

総合解説：Aについて：高気圧作業では圧力変化そのものが健康リスクとなるため、加圧・減圧手順の遵守が必要である。

Bについて：物理的有害因子は性質が大きく異なるため、線量、光路、圧力など各因子に対応した管理指標と対策を用いる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0054 粉じん・物理的有害因子>放射線・有害光線・異常気圧 | 難易度：標準

試験対策として二つの関連事項を比較する。正しい説明の組合せはどれか。

A：健康診断

B：保護具選択

ア．【健康診断】鼓膜・聴力、四肢の運動機能、肺活量など /

【保護具選択】サングラスなら波長に関係なく十分である

イ．【健康診断】鼓膜・聴力、四肢の運動機能、肺活量など /

【保護具選択】レーザーの波長や出力に適合した保護眼鏡を選定する

ウ．【健康診断】尿中馬尿酸だけ / 【保護具選択】レーザーの波長や出力に適合した保護眼鏡を選定する

エ．【健康診断】血中鉛量だけ / 【保護具選択】保護眼鏡があれば光路の遮へいは不要である

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。耳、運動器、呼吸器等を含む検査が行われる。

一方Bは不適切。一般用サングラスで代替できるとは限らない。

イ：Aは適切。正しい。耳、運動器、呼吸器等を含む検査が行われる。

Bも適切。正しい。使用レーザーに適合した保護性能が必要である。

ウ：Aは不適切。有機溶剤の指標である。一方Bは適切。正しい。使用レーザーに適合した保護性能が必要である。

エ：Aは不適切。鉛の指標である。Bも不適切。工学的対策も重要である。

総合解説：Aについて：高気圧業務では耳管・鼓膜、呼吸器、循環器、運動器等への影響を考慮した健康診断が行われる。

Bについて：レーザー保護具は『眼鏡なら何でもよい』のではなく、対象波長や出力に応じた選択が必要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0055 粉じん・物理的有害因子>放射線・有害光線・異常気圧 | 難易度：応用

次の確認事項A・Bについて、適切な説明だけを組み合わせたものはどれか。

A：総合判断

B：有害光線

ア：【総合判断】電離放射線—個人線量管理、レーザー—波長に適した遮へい・保護眼鏡、高気圧—適切な減圧管理 / 【有害光線】膝関節だけ

イ：【総合判断】電離放射線—尿中馬尿酸、レーザー—局排だけ、高気圧—血中鉛測定 /

【有害光線】眼と皮膚

ウ：【総合判断】電離放射線—個人線量管理、レーザー—波長に適した遮へい・保護眼鏡、高気圧—適切な減圧管理 / 【有害光線】眼と皮膚

エ：【総合判断】三者とも同じ保護具だけで管理する / 【有害光線】腎臓だけ

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。各有害因子の物理的特性に応じた対策が必要である。一方Bは不適切。主標的ではない。
イ：Aは不適切。検査・対策の組合せが誤っている。一方Bは適切。正しい。レーザー光線は眼や皮膚に重篤な障害を起こし得る。
ウ：Aは適切。正しい。各有害因子の物理的特性に応じた対策が必要である。
Bも適切。正しい。レーザー光線は眼や皮膚に重篤な障害を起こし得る。
エ：Aは不適切。有害因子ごとに管理方法は異なる。Bも不適切。レーザー障害の主標的ではない。
総合解説：Aについて：物理的有害因子は性質が大きく異なるため、線量、光路、圧力など各因子に対応した管理指標と対策を用いる。Bについて：レーザー業務では波長・出力等に応じて、光路管理、遮へい、保護眼鏡等により眼・皮膚へのばく露を防ぐ。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0056 有害業務の管理>作業環境測定・評価 | 難易度：基礎

次の二つの論点に関する説明の組合せとして、両方とも適切なものはどれか。

A：制度目的

B：A測定

ア：【制度目的】作業場の有害因子の状態を把握し、作業環境改善やばく露低減につなげる /

【A測定】最も高濃度となる1点だけを狙って測定する

イ：【制度目的】労働者の賃金を決定する /

【A測定】単位作業場所の有害物濃度の平均的な分布状態を把握するため、定めた測定点で測定する

ウ：【制度目的】健康診断を完全に不要にする / 【A測定】局所排気装置のファン回転数だけを測る

エ：【制度目的】作業場の有害因子の状態を把握し、作業環境改善やばく露低減につなげる /

【A測定】単位作業場所の有害物濃度の平均的な分布状態を把握するため、定めた測定点で測定する

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。作業環境測定は有害因子の分布・濃度等を把握し、環境管理に活用する。
一方Bは不適切。これはB測定の考え方に近い。
イ：Aは不適切。賃金決定の制度ではない。
一方Bは適切。正しい。A測定は単位作業場所全体の濃度分布を代表させる考え方である。
ウ：Aは不適切。健康診断と役割が異なり、代替関係ではない。Bも不適切。設備点検でありA測定ではない。
エ：Aは適切。正しい。作業環境測定は有害因子の分布・濃度等を把握し、環境管理に活用する。
Bも適切。正しい。A測定は単位作業場所全体の濃度分布を代表させる考え方である。
総合解説：Aについて：作業環境測定は労働衛生の作業環境管理の中核であり、測定・評価結果を工学的改善へ結び付ける。
Bについて：A測定は作業場全体の平均的な濃度分布を把握するための測定で、B測定と役割が異なる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0057 有害業務の管理 > 作業環境測定・評価 | 難易度：標準

新人教育用の確認資料を作成する。次の組合せのうち、二つの説明がともに適切なものはどれか。

A：A測定

B：管理区分

ア．【A測定】単位作業場所の有害物濃度の平均的な分布状態を把握するため、定めた測定点で測定する / 【管理区分】作業環境管理が適切であると判断される状態

イ．【A測定】単位作業場所の有害物濃度の平均的な分布状態を把握するため、定めた測定点で測定する / 【管理区分】健康診断異常者が1人いる状態をいう

ウ．【A測定】最も高濃度となる1点だけを狙って測定する /

【管理区分】作業環境管理が適切であると判断される状態

エ．【A測定】局所排気装置のファン回転数だけを測る /

【管理区分】作業環境管理が適切でないため直ちに全面改善を要する状態

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。A測定は単位作業場所全体の濃度分布を代表させる考え方である。

Bも適切。正しい。第一管理区分は作業環境管理が適切な状態である。

イ：Aは適切。正しい。A測定は単位作業場所全体の濃度分布を代表させる考え方である。

一方Bは不適切。健康診断結果だけで管理区分を決めない。

ウ：Aは不適切。これはB測定の考え方に近い。一方Bは適切。正しい。第一管理区分は作業環境管理が適切な状態である。

エ：Aは不適切。設備点検でありA測定ではない。Bも不適切。第三管理区分の説明に近い。

総合解説：Aについて：A測定は作業場全体の平均的な濃度分布を把握するための測定で、B測定と役割が異なる。

Bについて：管理区分は作業環境の状態を第一～第三に区分し、第三になるほど改善の必要性が高い。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0058 有害業務の管理 > 作業環境測定・評価 | 難易度：標準

衛生管理の復習として、二つの事項を同時に確認する。記述の組合せとして正しいものはどれか。

A：B測定

B：評価指標

ア．【B測定】有害物質の発散源に近接するなど、労働者のばく露が最も大きくなると考えられる作業位置で測定する / 【評価指標】個人の疾病診断基準そのものである

イ．【B測定】有害物質の発散源に近接するなど、労働者のばく露が最も大きくなると考えられる作業位置で測定する / 【評価指標】作業環境測定結果を評価し管理区分を決めるための指標であり、個人ばく露限界と同一概念ではない

ウ．【B測定】作業者の休憩室だけを測定する /

【評価指標】作業環境測定結果を評価し管理区分を決めるための指標であり、個人ばく露限界と同一概念ではない

エ．【B測定】作業場全体を等間隔で測るだけの方法である /

【評価指標】値を超えたら必ずその場の全員が中毒していることを意味する

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。B測定は最も高いばく露が想定される場所を評価する。一方Bは不適切。診断基準ではない。

イ：Aは適切。正しい。B測定は最も高いばく露が想定される場所を評価する。

Bも適切。正しい。管理濃度は作業環境評価のための行政的な管理指標である。

ウ：Aは不適切。作業ばく露の代表点とはならない。

一方Bは適切。正しい。管理濃度は作業環境評価のための行政的な管理指標である。

エ：Aは不適切。A測定の考え方に近い。Bも不適切。濃度超過と疾病発症は同義ではない。

総合解説：Aについて：B測定は作業工程や発散源との位置関係を考慮して、高濃度ばく露の可能性を捉えるために行う。

Bについて：環境管理の管理濃度と、個人ばく露評価や健康診断の指標は目的が異なるため混同しない。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0059 有害業務の管理 > 作業環境測定・評価 | 難易度：基礎

次のA・Bに関する説明のうち、誤りを含まない組合せはどれか。

A：管理区分

B：改善措置

ア．【管理区分】作業環境管理が適切であると判断される状態 / 【改善措置】測定結果を記録から削除する

イ．【管理区分】作業環境管理が適切でないため直ちに全面改善を要する状態 /

【改善措置】施設・設備・工程・作業方法を点検し、必要な改善を行って再測定・再評価する

ウ．【管理区分】作業環境管理が適切であると判断される状態 /

【改善措置】施設・設備・工程・作業方法を点検し、必要な改善を行って再測定・再評価する

エ．【管理区分】測定不能で評価を放棄する状態 / 【改善措置】健康診断だけ実施し作業環境は変更しない

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。第一管理区分は作業環境管理が適切な状態である。

一方Bは不適切。記録を削除して問題を解決することはできない。

イ：Aは不適切。第三管理区分の説明に近い。

一方Bは適切。正しい。第三管理区分では直ちに改善措置を講じ、その効果を確認する。

ウ：Aは適切。正しい。第一管理区分は作業環境管理が適切な状態である。

Bも適切。正しい。第三管理区分では直ちに改善措置を講じ、その効果を確認する。

エ：Aは不適切。評価不能とは異なる。Bも不適切。健康管理だけでは作業環境改善を代替できない。

総合解説：Aについて：管理区分は作業環境の状態を第一～第三に区分し、第三になるほど改善の必要性が高い。

Bについて：第三管理区分では発散源・設備・工程・作業方法を見直し、第一または第二管理区分となるよう改善する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0060 有害業務の管理 > 作業環境測定・評価 | 難易度：応用

研修担当者が二つの事項を説明した。内容がともに適切なものを選び。

A：改善措置

B：三管理

ア．【改善措置】施設・設備・工程・作業方法を点検し、必要な改善を行って再測定・再評価する /

【三管理】両者は同じ検査なのでどちらか一方だけ行う

イ．【改善措置】測定結果を記録から削除する /

【三管理】環境測定は作業場の有害因子を、健康診断は労働者の健康影響を評価し、両者の情報を衛生管理に活用する

ウ．【改善措置】健康診断だけ実施し作業環境は変更しない / 【三管理】健康診断をすれば環境測定は不要である

エ．【改善措置】施設・設備・工程・作業方法を点検し、必要な改善を行って再測定・再評価する /

【三管理】環境測定は作業場の有害因子を、健康診断は労働者の健康影響を評価し、両者の情報を衛生管理に活用する

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。第三管理区分では直ちに改善措置を講じ、その効果を確認する。一方Bは不適切。同一の検査ではない。

イ：Aは不適切。記録を削除して問題を解決することはできない。一方Bは適切。正しい。評価対象が異なるため相補的に用いる。

ウ：Aは不適切。健康管理だけでは作業環境改善を代替できない。Bも不適切。法定対象では双方を適切に実施する。

エ：Aは適切。正しい。第三管理区分では直ちに改善措置を講じ、その効果を確認する。

Bも適切。正しい。評価対象が異なるため相補的に用いる。

総合解説：Aについて：第三管理区分では発散源・設備・工程・作業方法を見直し、第一または第二管理区分となるよう改善する。

Bについて：作業環境管理、作業管理、健康管理を相互に関連付けことが労働衛生管理の基本である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0061 有害業務の管理 > 作業環境測定・評価 | 難易度：応用

次の二つの事項について整理したメモのうち、両方とも正しいものはどれか。

A：評価指標

B：結果解釈

ア：【評価指標】作業環境測定結果を評価し管理区分を決めるための指標であり、個人ばく露限界と同一概念ではない /

【結果解釈】良好な状態を維持しつつ、工程変更・設備状態・個人ばく露など必要な情報も継続して確認する

イ：【評価指標】作業環境測定結果を評価し管理区分を決めるための指標であり、個人ばく露限界と同一概念ではない /

【結果解釈】今後の工程変更や設備劣化を含めても永久に安全が保証される

ウ：【評価指標】生物学的モニタリングの尿中濃度を示す値である /

【結果解釈】良好な状態を維持しつつ、工程変更・設備状態・個人ばく露など必要な情報も継続して確認する

エ：【評価指標】個人の疾病診断基準そのものである /

【結果解釈】皮膚吸収など他のばく露経路は一切考えなくてよい

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。管理濃度は作業環境評価のための行政的な管理指標である。

Bも適切。正しい。良好な状態を維持し、必要な監視を継続する。

イ：Aは適切。正しい。管理濃度は作業環境評価のための行政的な管理指標である。一方Bは不適切。環境条件は変化し得る。

ウ：Aは不適切。尿中指標ではない。一方Bは適切。正しい。良好な状態を維持し、必要な監視を継続する。

エ：Aは不適切。診断基準ではない。Bも不適切。化学物質によっては皮膚ばく露も重要である。

総合解説：Aについて：環境管理の管理濃度と、個人ばく露評価や健康診断の指標は目的が異なるため混同しない。

Bについて：第一管理区分は望ましい状態だが、将来の変化や他のばく露経路を無視する根拠にはならない。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0062 有害業務の管理 > 作業環境測定・評価 | 難易度：標準

試験対策として二つの関連事項を比較する。正しい説明の組合せはどれか。

A：個人サンプリング

B：B測定

ア：【個人サンプリング】作業者の呼吸域付近に試料採取器を装着し、作業に伴うばく露を把握する /

【B測定】健康診断の代わりに尿を測定する方法である

イ：【個人サンプリング】作業者の呼吸域付近に試料採取器を装着し、作業に伴うばく露を把握する /

【B測定】有害物質の発散源に近接するなど、労働者のばく露が最も大きくなると考えられる作業位置で測定する

ウ：【個人サンプリング】固定点だけに機器を置き作業者の移動を無視する /

【B測定】有害物質の発散源に近接するなど、労働者のばく露が最も大きくなると考えられる作業位置で測定する

エ：【個人サンプリング】作業場の温度だけを測る / 【B測定】作業者の休憩室だけを測定する

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。胸元など呼吸域付近に採取器を装着して測定する。

一方Bは不適切。生物学的モニタリングと混同している。

イ：Aは適切。正しい。胸元など呼吸域付近に採取器を装着して測定する。

Bも適切。正しい。B測定は最も高いばく露が想定される場所を評価する。

ウ：Aは不適切。固定点測定とは異なる。一方Bは適切。正しい。B測定は最も高いばく露が想定される場所を評価する。

エ：Aは不適切。温度測定ではない。Bも不適切。作業ばく露の代表点とはならない。

総合解説：Aについて：個人サンプリングは作業者の移動や作業内容を反映した濃度評価に有用である。

Bについて：B測定は作業工程や発散源との位置関係を考慮して、高濃度ばく露の可能性を捉えるために行う。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0063 有害業務の管理 > 作業環境測定・評価 | 難易度：標準

次の確認事項A・Bについて、適切な説明だけを組み合わせたものはどれか。

A：結果解釈

B：A測定

ア．【結果解釈】良好な状態を維持しつつ、工程変更・設備状態・個人ばく露など必要な情報も継続して確認する / 【A測定】局所排気装置のファン回転数だけを測る

イ．【結果解釈】皮膚吸収など他のばく露経路は一切考えなくてよい /

【A測定】単位作業場所の有害物濃度の平均的な分布状態を把握するため、定めた測定点で測定する

ウ．【結果解釈】良好な状態を維持しつつ、工程変更・設備状態・個人ばく露など必要な情報も継続して確認する /

【A測定】単位作業場所の有害物濃度の平均的な分布状態を把握するため、定めた測定点で測定する

エ．【結果解釈】健康診断や作業管理はすべて不要になる / 【A測定】作業者1人の血液中濃度を測定する

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。良好な状態を維持し、必要な監視を継続する。一方Bは不適切。設備点検でありA測定ではない。

イ：Aは不適切。化学物質によっては皮膚ばく露も重要である。

一方Bは適切。正しい。A測定は単位作業場所全体の濃度分布を代表させる考え方である。

ウ：Aは適切。正しい。良好な状態を維持し、必要な監視を継続する。

Bも適切。正しい。A測定は単位作業場所全体の濃度分布を代表させる考え方である。

エ：Aは不適切。三管理は相互に補完する。Bも不適切。生物学的モニタリングの説明である。

総合解説：Aについて：第一管理区分は望ましい状態だが、将来の変化や他のばく露経路を無視する根拠にはならない。

Bについて：A測定は作業場全体の平均的な濃度分布を把握するための測定で、B測定と役割が異なる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0064 有害業務の管理 > 作業環境測定・評価 | 難易度：応用

二つの論点を関連付けて判断する問題である。両方の記述が正しい選択肢はどれか。

A：三管理

B：制度目的

ア．【三管理】環境測定は作業場の有害因子を、健康診断は労働者の健康影響を評価し、両者の情報を衛生管理に活用する / 【制度目的】労働者の賃金を決定する

イ．【三管理】両者は同じ検査なのでどちらか一方だけ行う /

【制度目的】作業場の有害因子の状態を把握し、作業環境改善やばく露低減につなげる

ウ．【三管理】健康診断をすれば環境測定は不要である / 【制度目的】健康診断を完全に不要にする

エ．【三管理】環境測定は作業場の有害因子を、健康診断は労働者の健康影響を評価し、両者の情報を衛生管理に活用する / 【制度目的】作業場の有害因子の状態を把握し、作業環境改善やばく露低減につなげる

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。評価対象が異なるため相補的に用いる。一方Bは不適切。賃金決定の制度ではない。

イ：Aは不適切。同一の検査ではない。

一方Bは適切。正しい。作業環境測定は有害因子の分布・濃度等を把握し、環境管理に活用する。

ウ：Aは不適切。法定対象では双方を適切に実施する。Bも不適切。健康診断と役割が異なり、代替関係ではない。

エ：Aは適切。正しい。評価対象が異なるため相補的に用いる。

Bも適切。正しい。作業環境測定は有害因子の分布・濃度等を把握し、環境管理に活用する。

総合解説：Aについて：作業環境管理、作業管理、健康管理を相互に関連付けることが労働衛生管理の基本である。

Bについて：作業環境測定は労働衛生の作業環境管理の中核であり、測定・評価結果を工学的改善へ結び付ける。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0065

有害業務の管理＞局所排気・換気・発散源対策 | 難易度：基礎

次の二つの論点に関する説明の組合せとして、両方とも適切なものはどれか。

A：対策優先順位

B：フード形式

ア．【対策優先順位】有害物質を発生源で抑え、密閉化・局所排気等で作業場への拡散を防ぐ /
【フード形式】発散源をできるだけ囲い、有害物質が作業場へ拡散する前に捕捉しやすい
イ．【対策優先順位】有害物質を発生源で抑え、密閉化・局所排気等で作業場への拡散を防ぐ /
【フード形式】外乱気流の影響を最も受けやすく、必ず最大風量が必要である
ウ．【対策優先順位】発生した有害物質を作業者が吸入してから健康診断で見つける /
【フード形式】発散源をできるだけ囲い、有害物質が作業場へ拡散する前に捕捉しやすい
エ．【対策優先順位】臭いが弱ければ換気を止める /
【フード形式】作業者の後方から有害物質を顔へ吹き付ける装置である

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。発生源対策・工学的対策を優先する。
Bも適切。正しい。囲い込むほど小さい排風量でも効率よく捕捉しやすい。
イ：Aは適切。正しい。発生源対策・工学的対策を優先する。一方Bは不適切。囲い式は外乱気流の影響を比較的受けにくい。
ウ：Aは不適切。事後的な健康診断だけではばく露を防げない。
一方Bは適切。正しい。囲い込むほど小さい排風量でも効率よく捕捉しやすい。
エ：Aは不適切。臭気は安全性の信頼できる指標ではない。Bも不適切。ばく露を増やす配置である。
総合解説：Aについて：リスク低減では、代替・工程変更、密閉化や局所排気など工学的対策を優先し、その後に管理的対策・保護具を検討する。Bについて：局所排気では発散源を囲うほど捕捉効率が高く、外付け式より必要排風量を抑えやすい。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0066

有害業務の管理＞局所排気・換気・発散源対策 | 難易度：基礎

新人教育用の確認資料を作成する。次の組合せのうち、二つの説明がともに適切なものはどれか。

A：フード形式

B：換気方式

ア．【フード形式】発散源をできるだけ囲い、有害物質が作業場へ拡散する前に捕捉しやすい /
【換気方式】一般事務室の二酸化炭素濃度を管理する場合
イ．【フード形式】発散源をできるだけ囲い、有害物質が作業場へ拡散する前に捕捉しやすい /
【換気方式】有害性が高く、発生量が多い物質を局所的に大量発散する作業
ウ．【フード形式】外乱気流の影響を最も受けやすく、必ず最大風量が必要である /
【換気方式】有害性が高く、発生量が多い物質を局所的に大量発散する作業
エ．【フード形式】作業者の後方から有害物質を顔へ吹き付ける装置である /
【換気方式】低濃度の熱や臭気を広い空間で希釈する場合

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。囲い込むほど小さい排風量でも効率よく捕捉しやすい。一方Bは不適切。一般換気で管理することがある。
イ：Aは適切。正しい。囲い込むほど小さい排風量でも効率よく捕捉しやすい。
Bも適切。正しい。高毒性・高発生量では発生源での捕捉が重要である。
ウ：Aは不適切。囲い式は外乱気流の影響を比較的受けにくい。
一方Bは適切。正しい。高毒性・高発生量では発生源での捕捉が重要である。
エ：Aは不適切。ばく露を増やす配置である。Bも不適切。全体換気が利用される場面がある。
総合解説：Aについて：局所排気では発散源を囲うほど捕捉効率が高く、外付け式より必要排風量を抑えやすい。Bについて：希釈換気は有害物を作業場全体に拡散させて濃度を下げる方式であり、高毒性物質や局所高濃度発生には局所排気等が適する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0067

有害業務の管理＞局所排気・換気・発散源対策 | 難易度：標準

衛生管理の復習として、二つの事項を同時に確認する。記述の組合せとして正しいものはどれか。

A：フード配置

B：気流設計

ア．【フード配置】発散源にできるだけ近づけ、作業者の呼吸域を通らずフードへ流れるよう配置する /
【気流設計】上方吸引では電氣を使用できないから

イ．【フード配置】外付け式では制御風速を確認する必要はない /

【気流設計】蒸気が作業者の呼吸域を通り、吸入ばく露を増やすおそれがある

ウ．【フード配置】発散源にできるだけ近づけ、作業者の呼吸域を通らずフードへ流れるよう配置する /

【気流設計】蒸気が作業者の呼吸域を通り、吸入ばく露を増やすおそれがある

エ．【フード配置】発散源から離せるだけ離し、作業者の呼吸域を通過した後に吸引する /

【気流設計】外付け式フードは法令上すべて禁止されているから

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。発散源近傍で捕捉し、作業者を汚染気流の下流に置かない。

一方Bは不適切。電源使用の可否とは関係しない。

イ：Aは不適切。制御風速の確認が重要である。一方Bは適切。正しい。汚染気流を作業者の呼吸域へ通さない配置が基本である。

ウ：Aは適切。正しい。発散源近傍で捕捉し、作業者を汚染気流の下流に置かない。

Bも適切。正しい。汚染気流を作業者の呼吸域へ通さない配置が基本である。

エ：Aは不適切。距離が増えるほど捕捉効率が低下する。Bも不適切。外付け式フード自体は禁止されていない。

総合解説：Aについて：外付け式フードでは発散源との距離と周囲気流の影響が大きいため、位置・向き・制御風速を適切に設計する。Bについて：局排設計では捕捉効率だけでなく、発散源—作業者—フードの位置関係を考え、汚染空気を呼吸域へ流さない。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0068

有害業務の管理＞局所排気・換気・発散源対策 | 難易度：標準

次のA・Bに関する説明のうち、誤りを含まない組合せはどれか。

A：換気方式

B：制御風速

ア．【換気方式】有害性が高く、発生量が多い物質を局所的に大量発散する作業 /

【制御風速】換気扇の電気料金を示す

イ．【換気方式】低濃度の熱や臭気を広い空間で希釈する場合 /

【制御風速】フードが有害物質を所定の範囲から捕捉するために確保すべき気流の速さを示す

ウ．【換気方式】室内の温度調整を行う場合 / 【制御風速】健康診断の判定区分を示す

エ．【換気方式】有害性が高く、発生量が多い物質を局所的に大量発散する作業 /

【制御風速】フードが有害物質を所定の範囲から捕捉するために確保すべき気流の速さを示す

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。高毒性・高発生量では発生源での捕捉が重要である。一方Bは不適切。電気料金ではない。

イ：Aは不適切。全体換気が利用される場面がある。

一方Bは適切。正しい。フード形式や対象物質に応じて必要な制御風速が定められる。

ウ：Aは不適切。換気・空調の目的となり得る。Bも不適切。健康診断の指標ではない。

エ：Aは適切。正しい。高毒性・高発生量では発生源での捕捉が重要である。

Bも適切。正しい。フード形式や対象物質に応じて必要な制御風速が定められる。

総合解説：Aについて：希釈換気は有害物を作業場全体に拡散させて濃度を下げる方式であり、高毒性物質や局所高濃度発生には局所排気等が適する。Bについて：制御風速は局所排気装置が発散物質を捕捉できるかを判断する重要な性能指標である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0069

有害業務の管理＞局所排気・換気・発散源対策 | 難易度：標準

研修担当者が二つの事項を説明した。内容がともに適切なものを選べ。

A：制御風速

B：対策優先順位

ア．【制御風速】フードが有害物質を所定の範囲から捕捉するために確保すべき気流の速さを示す /

【対策優先順位】有害物質を発生源で抑え、密閉化・局所排気等で作業場への拡散を防ぐ

イ．【制御風速】フードが有害物質を所定の範囲から捕捉するために確保すべき気流の速さを示す /

【対策優先順位】保護具だけに依存し発散源は放置する

ウ．【制御風速】換気扇の電気料金を示す /

【対策優先順位】有害物質を発生源で抑え、密閉化・局所排気等で作業場への拡散を防ぐ

エ．【制御風速】健康診断の判定区分を示す /

【対策優先順位】発生した有害物質を作業者が吸入してから健康診断で見つける

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。フード形式や対象物質に応じて必要な制御風速が定められる。

Bも適切。正しい。発生源対策・工学的対策を優先する。

イ：Aは適切。正しい。フード形式や対象物質に応じて必要な制御風速が定められる。

一方Bは不適切。保護具は重要だが上位対策と組み合わせる。

ウ：Aは不適切。電気料金ではない。一方Bは適切。正しい。発生源対策・工学的対策を優先する。

エ：Aは不適切。健康診断の指標ではない。Bも不適切。事後的な健康診断だけではばく露を防げない。

総合解説：Aについて：制御風速は局所排気装置が発散物質を捕捉できるかを判断する重要な性能指標である。Bについて：リスク低減では、代替・工程変更、密閉化や局所排気など工学的対策を優先し、その後に管理的対策・保護具を検討する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0070

有害業務の管理＞局所排気・換気・発散源対策 | 難易度：応用

次の二つの事項について整理したメモのうち、両方とも正しいものはどれか。

A：気流設計

B：代替

ア．【気流設計】蒸気が作業者の呼吸域を通り、吸入ばく露を増やすおそれがある /

【代替】材料変更は労働衛生対策には含まれない

イ．【気流設計】蒸気が作業者の呼吸域を通り、吸入ばく露を増やすおそれがある /

【代替】より低有害性の物質への代替は、発生源そのもののリスクを下げる上位対策として優先的に検討する

ウ．【気流設計】有機溶剤蒸気は必ず真空中でしか移動しないから /

【代替】より低有害性の物質への代替は、発生源そのもののリスクを下げる上位対策として優先的に検討する

エ．【気流設計】上方吸引では電氣を使用できないから /

【代替】局所排気装置を設置していれば代替は検討してはいけない

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。汚染気流を作業者の呼吸域へ通さない配置が基本である。

一方Bは不適切。代替は重要なリスク低減策である。

イ：Aは適切。正しい。汚染気流を作業者の呼吸域へ通さない配置が基本である。

Bも適切。正しい。代替はリスク低減の最上位に位置付けられる。

ウ：Aは不適切。蒸気は空気流とともに移動する。一方Bは適切。正しい。代替はリスク低減の最上位に位置付けられる。

エ：Aは不適切。電源使用の可否とは関係しない。Bも不適切。工学的対策と併せて代替も検討できる。

総合解説：Aについて：局排設計では捕捉効率だけでなく、発散源—作業者—フードの位置関係を考え、汚染空気を呼吸域へ流さない。Bについて：リスク低減措置は、危険有害性の低い物質・工程への代替をまず検討し、その後に工学的・管理的対策、保護具を組み合わせる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0071

有害業務の管理＞局所排気・換気・発散源対策 | 難易度：標準

試験対策として二つの関連事項を比較する。正しい説明の組合せはどれか。

A：保守管理

B：換気方式

ア．【保守管理】フィルター詰まりやダクト損傷、ファン性能低下等を点検し、必要な保守を行う /
【換気方式】室内の温度調整を行う場合

イ．【保守管理】設置時に性能が出ていれば、その後は一切点検不要である /

【換気方式】有害性が高く、発生量が多い物質を局所的に大量発散する作業

ウ．【保守管理】フィルター詰まりやダクト損傷、ファン性能低下等を点検し、必要な保守を行う /

【換気方式】有害性が高く、発生量が多い物質を局所的に大量発散する作業

エ．【保守管理】吸引力が低下したらフードを発散源から遠ざける /

【換気方式】一般事務室の二酸化炭素濃度を管理する場合

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。点検・保守で設計性能を維持する。一方Bは不適切。換気・空調の目的となり得る。

イ：Aは不適切。設備性能は経時的に低下し得る。一方Bは適切。正しい。高毒性・高発生量では発生源での捕捉が重要である。

ウ：Aは適切。正しい。点検・保守で設計性能を維持する。

Bも適切。正しい。高毒性・高発生量では発生源での捕捉が重要である。

エ：Aは不適切。さらに捕捉性能を低下させる。Bも不適切。一般換気で管理することがある。

総合解説：Aについて：局所排気装置はダクト、ファン、フィルター、フード等の状態で性能が変化するため、定期的な点検・整備が必要である。Bについて：希釈換気は有害物を作業場全体に拡散させて濃度を下げる方式であり、高毒性物質や局所高濃度発生には局所排気等が適する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0072

有害業務の管理＞局所排気・換気・発散源対策 | 難易度：応用

次の確認事項A・Bについて、適切な説明だけを組み合わせたものはどれか。

A：代替

B：フード配置

ア．【代替】より低有害性の物質への代替は、発生源そのもののリスクを下げる上位対策として優先的に検討する /
【フード配置】外付け式では制御風速を確認する必要はない

イ．【代替】局所排気装置を設置していれば代替は検討してはいけない /

【フード配置】発散源にできるだけ近づけ、作業者の呼吸域を通らずフードへ流れるよう配置する

ウ．【代替】保護具を着ける方が必ず代替より上位である /

【フード配置】発散源から離せるだけ離し、作業者の呼吸域を通過した後には吸引する

エ．【代替】より低有害性の物質への代替は、発生源そのもののリスクを下げる上位対策として優先的に検討する /

【フード配置】発散源にできるだけ近づけ、作業者の呼吸域を通らずフードへ流れるよう配置する

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。代替はリスク低減の最上位に位置付けられる。一方Bは不適切。制御風速の確認が重要である。

イ：Aは不適切。工学的対策と併せて代替も検討できる。

一方Bは適切。正しい。発散源近傍で捕捉し、作業者を汚染気流の下流に置かない。

ウ：Aは不適切。保護具は通常、代替や工学的対策より下位の対策である。Bも不適切。距離が増えるほど捕捉効率が低下する。

エ：Aは適切。正しい。代替はリスク低減の最上位に位置付けられる。

Bも適切。正しい。発散源近傍で捕捉し、作業者を汚染気流の下流に置かない。

総合解説：Aについて：リスク低減措置は、危険有害性の低い物質・工程への代替をまず検討し、その後に工学的・管理的対策、保護具を組み合わせる。

Bについて：外付け式フードでは発散源との距離と周囲気流の影響が大きいため、位置・向き・制御風速を適切に設計する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0073 有害業務の管理＞保護具・特殊健康診断・リスク低減 | 難易度：基礎

次の二つの論点に関する説明の組合せとして、両方とも適切なものはどれか。

A：呼吸用保護具

B：化学防護手袋

ア．【呼吸用保護具】空気呼吸器や送気マスクなど、呼吸用空気を供給できる方式を選ぶ /

【化学防護手袋】化学物質が手袋材料に吸収され、分子レベルで内部を拡散して裏面から離脱する現象

イ．【呼吸用保護具】空気呼吸器や送気マスクなど、呼吸用空気を供給できる方式を選ぶ /

【化学防護手袋】手袋が大きすぎて手から外れる現象をいう

ウ．【呼吸用保護具】ろ過式防じんマスクだけで酸素を補給できる /

【化学防護手袋】化学物質が手袋材料に吸収され、分子レベルで内部を拡散して裏面から離脱する現象

エ．【呼吸用保護具】防毒マスクの吸収缶だけで酸素濃度を上げられる /

【化学防護手袋】手袋に粉じんが付着することだけをいう

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。酸素欠乏環境では空気供給式の保護具が必要となる。Bも適切。正しい。JIS T

8116で定義される透過の考え方である。

イ：Aは適切。正しい。酸素欠乏環境では空気供給式の保護具が必要となる。一方Bは不適切。サイズ不適合とは別の概念である。

ウ：Aは不適切。防じんマスクは酸素を供給しない。一方Bは適切。正しい。JIS T 8116で定義される透過の考え方である。

エ：Aは不適切。防毒マスクも酸素を供給しない。Bも不適切。表面付着だけでは透過の定義にならない。

総合解説：Aについて：ろ過式呼吸用保護具は空気中の有害物を除去するもので、酸素欠乏そのものを改善できない。

Bについて：化学防護手袋は材質ごとに耐透過性が異なるため、対象化学物質と使用時間に合う製品を選ぶ。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0074 有害業務の管理＞保護具・特殊健康診断・リスク低減 | 難易度：標準

新人教育用の確認資料を作成する。次の組合せのうち、二つの説明がともに適切なものはどれか。

A：化学防護手袋

B：健康管理

ア．【化学防護手袋】化学物質が手袋材料に吸収され、分子レベルで内部を拡散して裏面から離脱する現象 /

【健康管理】健康診断だけで作業環境の濃度を直接測定できる

イ．【化学防護手袋】化学物質が手袋材料に吸収され、分子レベルで内部を拡散して裏面から離脱する現象 / 【健康管理】

健康診断は有害業務による健康影響を早期に把握し事後措置へつなげるが、発散源対策を代替するものではない

ウ．【化学防護手袋】手袋が大きすぎて手から外れる現象をいう / 【健康管理】健康診断は有害業務による健康影響を

早期に把握し事後措置へつなげるが、発散源対策を代替するものではない

エ．【化学防護手袋】手袋に粉じんが付着することだけをいう /

【健康管理】健診を実施すれば有害物質へのばく露低減策は不要になる

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。JIS T 8116で定義される透過の考え方である。一方Bは不適切。環境濃度は作業環境測定等で評価する。

イ：Aは適切。正しい。JIS T 8116で定義される透過の考え方である。

Bも適切。正しい。健康管理と環境・作業管理を組み合わせる。

ウ：Aは不適切。サイズ不適合とは別の概念である。一方Bは適切。正しい。健康管理と環境・作業管理を組み合わせる。

エ：Aは不適切。表面付着だけでは透過の定義にならない。Bも不適切。健康診断はばく露防止の代替ではない。

総合解説：Aについて：化学防護手袋は材質ごとに耐透過性が異なるため、対象化学物質と使用時間に合う製品を選ぶ。

Bについて：特殊健康診断は三管理のうち健康管理に位置付けられ、作業環境管理・作業管理と連携して用いる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0075 有害業務の管理＞保護具・特殊健康診断・リスク低減 | 難易度：標準

衛生管理の復習として、二つの事項を同時に確認する。記述の組合せとして正しいものはどれか。

A：手袋管理

B：フィット

ア．【手袋管理】手袋に付着した化学物質は透過が進み得るため、中断ただけで使用可能時間が延びるとは考えない /

【フィット】面体と顔面の間に隙間があってもフィルター性能だけで十分である

イ．【手袋管理】二重に装着すれば使用可能時間は無限になる /

【フィット】面体の密着性を確保し、使用前点検や適切な装着確認を行う

ウ．【手袋管理】手袋に付着した化学物質は透過が進み得るため、中断ただけで使用可能時間が延びるとは考えない /

【フィット】面体の密着性を確保し、使用前点検や適切な装着確認を行う

エ．【手袋管理】中断中は化学物質の透過も完全に停止するため、使用可能時間を最初から数え直す /

【フィット】ひげや装着方法で密着性が低下しても保護性能に影響しない

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。中断ただけで使用可能時間を延長しない。一方Bは不適切。隙間から有害物が漏れ込む。

イ：Aは不適切。二重装着しても個々の手袋の耐透過性を無視できない。一方Bは適切。正しい。適正装着と点検が必要である。

ウ：Aは適切。正しい。中断ただけで使用可能時間を延長しない。Bも適切。正しい。適正装着と点検が必要である。

エ：Aは不適切。付着した化学物質の透過は中断中も進み得る。Bも不適切。密着性は保護性能に重要である。

総合解説：Aについて：手袋は作業前点検を行い、科学的根拠に基づく使用可能時間を超えて使用しない。

Bについて：呼吸用保護具は選定しただけでは不十分で、顔面との密着、点検、保守、教育まで含めて管理する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0076 有害業務の管理＞保護具・特殊健康診断・リスク低減 | 難易度：標準

次のA・Bに関する説明のうち、誤りを含まない組合せはどれか。

A：健康管理

B：対策順位

ア．【健康管理】健康診断は有害業務による健康影響を早期に把握し事後措置へつなげるが、発散源対策を代替するものではない / 【対策順位】健康診断→保護具→作業者の注意力だけ

イ．【健康管理】健診を実施すれば有害物質へのばく露低減策は不要になる /

【対策順位】低有害性物質への代替・工程変更→密閉化・局排等の工学的対策→管理的対策→保護具

ウ．【健康管理】健診結果は本人にも事業者にも一切利用しない / 【対策順位】最初から保護具だけを選ぶ

エ．【健康管理】健康診断は有害業務による健康影響を早期に把握し事後措置へつなげるが、発散源対策を代替するものではない / 【対策順位】低有害性物質への代替・工程変更→密閉化・局排等の工学的対策→管理的対策→保護具

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。健康管理と環境・作業管理を組み合わせる。一方Bは不適切。健康診断はリスク低減の代替ではない。

イ：Aは不適切。健康診断はばく露防止の代替ではない。一方Bは適切。正しい。厚生労働省のリスク低減措置の優先順位に沿う。

ウ：Aは不適切。結果は適切な健康管理・事後措置に活用する。Bも不適切。保護具だけへの依存は避ける。

エ：Aは適切。正しい。健康管理と環境・作業管理を組み合わせる。

Bも適切。正しい。厚生労働省のリスク低減措置の優先順位に沿う。

総合解説：Aについて：特殊健康診断は三管理のうち健康管理に位置付けられ、作業環境管理・作業管理と連携して用いる。

Bについて：対策は危険有害性そのものを減らす方法から優先し、個人の行動や保護具への依存をできるだけ下げる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0077 有害業務の管理＞保護具・特殊健康診断・リスク低減 | 難易度：標準

研修担当者が二つの事項を説明した。内容がともに適切なものを選べ。

A：対策順位

B：呼吸用保護具

ア．【対策順位】低有害性物質への代替・工程変更→密閉化・局排等の工学的対策→管理的対策→保護具 / 【呼吸用保護具】空気呼吸器や送気マスクなど、呼吸用空気を供給できる方式を選ぶ

イ．【対策順位】低有害性物質への代替・工程変更→密閉化・局排等の工学的対策→管理的対策→保護具 / 【呼吸用保護具】保護眼鏡だけで呼吸保護できる

ウ．【対策順位】健康診断→保護具→作業者の注意力だけ /

【呼吸用保護具】空気呼吸器や送気マスクなど、呼吸用空気を供給できる方式を選ぶ

エ．【対策順位】最初から保護具だけを選ぶ /

【呼吸用保護具】ろ過式防じんマスクだけで酸素を補給できる

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。厚生労働省のリスク低減措置の優先順位に沿う。

Bも適切。正しい。酸素欠乏環境では空気供給式の保護具が必要となる。

イ：Aは適切。正しい。厚生労働省のリスク低減措置の優先順位に沿う。一方Bは不適切。眼保護具は呼吸保護にならない。

ウ：Aは不適切。健康診断はリスク低減の代替ではない。

一方Bは適切。正しい。酸素欠乏環境では空気供給式の保護具が必要となる。

エ：Aは不適切。保護具だけへの依存は避ける。Bも不適切。防じんマスクは酸素を供給しない。

総合解説：Aについて：対策は危険有害性そのものを減らす方法から優先し、個人の行動や保護具への依存をできるだけ下げる。

Bについて：ろ過式呼吸用保護具は空気中の有害物を除去するもので、酸素欠乏そのものを改善できない。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0078 有害業務の管理＞保護具・特殊健康診断・リスク低減 | 難易度：標準

次の二つの事項について整理したメモのうち、両方とも正しいものはどれか。

A：フィット

B：総合判断

ア．【フィット】面体の密着性を確保し、使用前点検や適切な装着確認を行う /

【総合判断】最初から保護具だけを使用し、設備改善は行わない

イ．【フィット】面体の密着性を確保し、使用前点検や適切な装着確認を行う / 【総合判断】より低有害性の物質への代替、密閉・局排、作業手順改善を行い、それでも残るリスクに適切な保護具を使用する

ウ．【フィット】保護具は共有し、点検せず使用するのが望ましい / 【総合判断】より低有害性の物質への代替、密閉・局排、作業手順改善を行い、それでも残るリスクに適切な保護具を使用する

エ．【フィット】面体と顔面の間に隙間があってもフィルター性能だけで十分である /

【総合判断】健康診断だけでなく露を管理する

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。適正装着と点検が必要である。一方Bは不適切。保護具だけへの依存は望ましくない。

イ：Aは適切。正しい。適正装着と点検が必要である。Bも適切。正しい。リスク低減の優先順位に沿った総合対策である。

ウ：Aは不適切。衛生・適合性・保守の問題がある。一方Bは適切。正しい。リスク低減の優先順位に沿った総合対策である。

エ：Aは不適切。隙間から有害物が漏れ込む。Bも不適切。健康診断はばく露低減そのものではない。

総合解説：Aについて：呼吸用保護具は選定しただけでは不十分で、顔面との密着、点検、保守、教育まで含めて管理する。

Bについて：労働衛生管理では、代替・工学的対策・管理的対策・保護具を階層的に組み合わせ、残留リスクを低減する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0079 有害業務の管理＞保護具・特殊健康診断・リスク低減 | 難易度：応用

試験対策として二つの関連事項を比較する。正しい説明の組合せはどれか。

A：事後措置

B：健康管理

ア．【事後措置】作業環境測定、作業方法、局排性能、保護具使用状況などを再評価し、必要なくば露低減措置を講じる / 【健康管理】健診結果は本人にも事業者にも一切利用しない

イ．【事後措置】個人の問題として処理し、設備や作業方法は調べない / 【健康管理】健康診断は有害業務による健康影響を早期に把握し事後措置へつなげるが、発散源対策を代替するものではない

ウ．【事後措置】作業環境測定、作業方法、局排性能、保護具使用状況などを再評価し、必要なくば露低減措置を講じる / 【健康管理】健康診断は有害業務による健康影響を早期に把握し事後措置へつなげるが、発散源対策を代替するものではない

エ．【事後措置】健診結果を廃棄して経過を見ない / 【健康管理】健康診断だけで作業環境の濃度を直接測定できる

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。健康管理の情報を環境・作業管理の改善へ戻す。

一方Bは不適切。結果は適切な健康管理・事後措置に活用する。

イ：Aは不適切。集団の傾向があれば作業要因を調べる必要がある。

一方Bは適切。正しい。健康管理と環境・作業管理を組み合わせる。

ウ：Aは適切。正しい。健康管理の情報を環境・作業管理の改善へ戻す。

Bも適切。正しい。健康管理と環境・作業管理を組み合わせる。

エ：Aは不適切。記録廃棄は適切でない。Bも不適切。環境濃度は作業環境測定等で評価する。

総合解説：Aについては：健診異常は作業環境や作業方法の問題を示す手掛かりになり得るため、三管理を横断して原因を検討する。

Bについては：特殊健康診断は三管理のうち健康管理に位置付けられ、作業環境管理・作業管理と連携して用いる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0080 有害業務の管理＞保護具・特殊健康診断・リスク低減 | 難易度：応用

次の確認事項A・Bについて、適切な説明だけを組み合わせたものはどれか。

A：総合判断

B：手袋管理

ア．【総合判断】より低有害性の物質への代替、密閉・局排、作業手順改善を行い、それでも残るリスクに適切な保護具を使用する / 【手袋管理】二重に装着すれば使用可能時間は無限になる

イ．【総合判断】健康診断だけでなく露を管理する /

【手袋管理】手袋に付着した化学物質は透過が進み得るため、中断しただけで使用可能時間が延びるとは考えない

ウ．【総合判断】作業者の経験に任せて対策を決めない /

【手袋管理】中断中は化学物質の透過も完全に停止するため、使用可能時間を最初から数え直す

エ．【総合判断】より低有害性の物質への代替、密閉・局排、作業手順改善を行い、それでも残るリスクに適切な保護具を使用する /

【手袋管理】手袋に付着した化学物質は透過が進み得るため、中断しただけで使用可能時間が延びるとは考えない

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。リスク低減の優先順位に沿った総合対策である。

一方Bは不適切。二重装着しても個々の手袋の耐透過性を無視できない。

イ：Aは不適切。健康診断はばく露低減そのものではない。一方Bは適切。正しい。中断だけで使用可能時間を延長しない。

ウ：Aは不適切。経験だけに依存せず、リスクアセスメントに基づく必要がある。

Bも不適切。付着した化学物質の透過は中断中も進み得る。

エ：Aは適切。正しい。リスク低減の優先順位に沿った総合対策である。

Bも適切。正しい。中断だけで使用可能時間を延長しない。

総合解説：Aについては：労働衛生管理では、代替・工学的対策・管理的対策・保護具を階層的に組み合わせ、残留リスクを低減する。Bについては：手袋は作業前点検を行い、科学的根拠に基づく使用可能時間を超過して使用しない。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0081

一般作業環境・作業管理 > 温熱条件・WBGT | 難易度：基礎

次の二つの論点に関する説明の組合せとして、両方とも適切なものはどれか。

A：定義

B：WBGT計算

ア．【定義】気温、湿度、放射熱などを総合して暑熱ストレスを評価する指数である /

【WBGT計算】 $0.7 \times \text{自然湿球温度} + 0.3 \times \text{黒球温度}$

イ．【定義】気温、湿度、放射熱などを総合して暑熱ストレスを評価する指数である /

【WBGT計算】 $0.7 \times \text{乾球温度} + 0.3 \times \text{風速}$

ウ．【定義】気温だけで暑熱ストレスを評価する指数である /

【WBGT計算】 $0.7 \times \text{自然湿球温度} + 0.3 \times \text{黒球温度}$

エ．【定義】騒音の周波数特性を示す指数である / 【WBGT計算】 $0.5 \times \text{黒球温度} + 0.5 \times \text{相対湿度}$

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。湿球温度、黒球温度、乾球温度等を用いて暑熱環境を評価する。

Bも適切。正しい。日射がない場合は自然湿球温度と黒球温度から算出する。

イ：Aは適切。正しい。湿球温度、黒球温度、乾球温度等を用いて暑熱環境を評価する。

一方Bは不適切。風速を直接この形で加える式ではない。

ウ：Aは不適切。WBGTは気温だけでは評価しない。

一方Bは適切。正しい。日射がない場合は自然湿球温度と黒球温度から算出する。

エ：Aは不適切。騒音指標ではない。Bも不適切。相対湿度をそのまま加算する式ではない。

総合解説：Aについて：WBGTは熱中症リスク評価の代表的指標で、気温だけでなく湿度や放射熱の影響も反映する。

Bについて：日射なしでは $WBGT = 0.7 \times \text{自然湿球温度} + 0.3 \times \text{黒球温度}$ 。日射ありでは乾球温度も加わる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0082

一般作業環境・作業管理 > 温熱条件・WBGT | 難易度：標準

新人教育用の確認資料を作成する。次の組合せのうち、二つの説明がともに適切なものはどれか。

A：WBGT計算

B：衣服補正

ア．【WBGT計算】 $0.7 \times \text{自然湿球温度} + 0.3 \times \text{黒球温度}$ /

【衣服補正】衣類は湿度にしか影響しないため補正不要である

イ．【WBGT計算】 $0.7 \times \text{自然湿球温度} + 0.3 \times \text{黒球温度}$ /

【衣服補正】衣類の種類に応じた補正値をWBGT評価に加味する

ウ．【WBGT計算】 $0.7 \times \text{乾球温度} + 0.3 \times \text{風速}$ /

【衣服補正】衣類の種類に応じた補正値をWBGT評価に加味する

エ．【WBGT計算】 $0.5 \times \text{黒球温度} + 0.5 \times \text{相対湿度}$ /

【衣服補正】測定したWBGT値だけで評価し、衣類の影響は無視する

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。日射がない場合は自然湿球温度と黒球温度から算出する。一方Bは不適切。衣類は蒸発・放熱に影響する。

イ：Aは適切。正しい。日射がない場合は自然湿球温度と黒球温度から算出する。

Bも適切。正しい。衣服補正値を加えて評価する。

ウ：Aは不適切。風速を直接この形で加える式ではない。一方Bは適切。正しい。衣服補正値を加えて評価する。

エ：Aは不適切。相対湿度をそのまま加算する式ではない。Bも不適切。衣類による熱放散阻害を考慮する必要がある。

総合解説：Aについて：日射なしでは $WBGT = 0.7 \times \text{自然湿球温度} + 0.3 \times \text{黒球温度}$ 。日射ありでは乾球温度も加わる。

Bについて：WBGT基準値の評価では、着用衣類による熱負担の増加を補正して判断することが重要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0083

一般作業環境・作業管理 > 温熱条件・WBGT | 難易度：標準

衛生管理の復習として、二つの事項を同時に確認する。記述の組合せとして正しいものはどれか。

A：WBGT計算

B：水分塩分

ア．【WBGT計算】自然湿球温度・黒球温度・乾球温度 / 【水分塩分】喉が渇くまで一切飲水しない

イ．【WBGT計算】気圧と騒音レベルだけ /

【水分塩分】作業条件に応じて定期的に水分と必要な塩分を摂取する

ウ．【WBGT計算】自然湿球温度・黒球温度・乾球温度 /

【水分塩分】作業条件に応じて定期的に水分と必要な塩分を摂取する

エ．【WBGT計算】自然湿球温度だけ / 【水分塩分】作業後にまとめて大量の水だけを飲む

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。自然湿球0.7、黒球0.2、乾球0.1の重みで算出する。

一方Bは不適切。自覚的口渇だけに頼ると補給が遅れることがある。

イ：Aは不適切。WBGTの算定要素ではない。一方Bは適切。正しい。汗で失われる水分・塩分を計画的に補給する。

ウ：Aは適切。正しい。自然湿球0.7、黒球0.2、乾球0.1の重みで算出する。

Bも適切。正しい。汗で失われる水分・塩分を計画的に補給する。

エ：Aは不適切。日射ありでは複数の温度指標を用いる。Bも不適切。定期的な補給が望ましい。

総合解説：Aについて：屋外日射ありでは、湿度影響、放射熱、気温を反映するため三つの温度指標を用いる。

Bについて：暑熱作業では作業強度・WBGT・発汗量等を考慮し、定期的な水分・塩分補給を行う。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0084

一般作業環境・作業管理 > 温熱条件・WBGT | 難易度：標準

次のA・Bに関する説明のうち、誤りを含まない組合せはどれか。

A：衣服補正

B：暑熱順化

ア．【衣服補正】衣類の種類に応じた補正値をWBGT評価に加味する /

【暑熱順化】一度順化すれば数か月暑熱作業を中断しても能力は完全に維持される

イ．【衣服補正】測定したWBGT値だけで評価し、衣類の影響は無視する /

【暑熱順化】順化していない者は、概ね7日以上かけて暑熱ばく露時間を徐々に延ばす

ウ．【衣服補正】防護服を着れば熱中症リスクは必ず下がる /

【暑熱順化】順化は水分摂取だけで即日完成する

エ．【衣服補正】衣類の種類に応じた補正値をWBGT評価に加味する /

【暑熱順化】順化していない者は、概ね7日以上かけて暑熱ばく露時間を徐々に延ばす

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。衣服補正値を加えて評価する。一方Bは不適切。中断により順化は失われていく。

イ：Aは不適切。衣類による熱放散阻害を考慮する必要がある。一方Bは適切。正しい。段階的な暑熱ばく露で順化を進める。

ウ：Aは不適切。防護服は熱負担を増やす場合がある。Bも不適切。即日完成するものではない。

エ：Aは適切。正しい。衣服補正値を加えて評価する。Bも適切。正しい。段階的な暑熱ばく露で順化を進める。

総合解説：Aについて：WBGT基準値の評価では、着用衣類による熱負担の増加を補正して判断することが重要である。

Bについて：新規配置者や長期休業明けでは順化不足に注意し、作業時間・強度を段階的に増やす。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0085

一般作業環境・作業管理 > 温熱条件・WBGT | 難易度：基礎

研修担当者が二つの事項を説明した。内容がともに適切なものを選べ。

A：暑熱順化

B：緊急対応

ア：【暑熱順化】順化していない者は、概ね7日以上かけて暑熱ばく露時間を徐々に延ばす /

【緊急対応】意識状態を確認し、涼しい場所へ移動させ、必要に応じ救急要請し、回復まで一人にしない

イ：【暑熱順化】順化していない者は、概ね7日以上かけて暑熱ばく露時間を徐々に延ばす /

【緊急対応】汗をかいていれば重症ではないと判断する

ウ：【暑熱順化】一度順化すれば数か月暑熱作業を中断しても能力は完全に維持される /

【緊急対応】意識状態を確認し、涼しい場所へ移動させ、必要に応じ救急要請し、回復まで一人にしない

エ：【暑熱順化】順化は水分摂取だけで即日完成する /

【緊急対応】本人を一人で休憩室へ歩かせ、翌日まで様子を見る

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。段階的な暑熱ばく露で順化を進める。

Bも適切。正しい。早期発見、冷却、救急要請判断、見守りが重要である。

イ：Aは適切。正しい。段階的な暑熱ばく露で順化を進める。一方Bは不適切。発汗の有無だけで重症度は判断できない。

ウ：Aは不適切。中断により順化は失われていく。一方Bは適切。正しい。早期発見、冷却、救急要請判断、見守りが重要である。

エ：Aは不適切。即日完成するものではない。Bも不適切。重症化の見逃しにつながる。

総合解説：Aについて：新規配置者や長期休業明けでは順化不足に注意し、作業時間・強度を段階的に増やす。

Bについて：熱中症は急速に悪化することがあるため、職場で定めた報告・対応手順に沿って迅速に対処する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0086

一般作業環境・作業管理 > 温熱条件・WBGT | 難易度：標準

次の二つの事項について整理したメモのうち、両方とも正しいものはどれか。

A：水分塩分

B：法令改正

ア：【水分塩分】作業条件に応じて定期的に水分と必要な塩分を摂取する /

【法令改正】WBGT25 以上なら時間に関係なく全作業が対象

イ：【水分塩分】作業条件に応じて定期的に水分と必要な塩分を摂取する / 【法令改正】WBGT28 以上または気温31

以上の環境で、連続1時間以上または1日4時間を超えて行うことが見込まれる作業

ウ：【水分塩分】発汗量が多いほど飲水量を減らす / 【法令改正】WBGT28 以上または気温31 以上の環境で、連続1

時間以上または1日4時間を超えて行うことが見込まれる作業

エ：【水分塩分】喉が渇くまで一切飲水しない / 【法令改正】気温28 以上なら10分作業でも必ず対象

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。汗で失われる水分・塩分を計画的に補給する。一方Bは不適切。法定の目安と異なる。

イ：Aは適切。正しい。汗で失われる水分・塩分を計画的に補給する。

Bも適切。正しい。2025年6月施行の強化措置の対象条件である。

ウ：Aは不適切。発汗が多いほど脱水リスクに注意する。一方Bは適切。正しい。2025年6月施行の強化措置の対象条件である。

エ：Aは不適切。自覚的口渇だけに頼ると補給が遅れることがある。Bも不適切。温度と時間の条件が異なる。

総合解説：Aについて：暑熱作業では作業強度・WBGT・発汗量等を考慮し、定期的な水分・塩分補給を行う。

Bについて：対象作業では、熱中症の早期発見体制、重篤化防止の手順作成、関係作業者への周知が義務付けられている。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0087

一般作業環境・作業管理 > 温熱条件・WBGT | 難易度：標準

試験対策として二つの関連事項を比較する。正しい説明の組合せはどれか。

A：健康管理

B：作業環境管理

ア．【健康管理】下痢による脱水や発熱、糖尿病・高血圧等の基礎疾患 /

【作業環境管理】直射日光下で風の少ない場所

イ．【健康管理】十分な睡眠と良好な体調 /

【作業環境管理】冷房・日陰・通風等により身体を冷却できる休憩場所

ウ．【健康管理】下痢による脱水や発熱、糖尿病・高血圧等の基礎疾患 /

【作業環境管理】冷房・日陰・通風等により身体を冷却できる休憩場所

エ．【健康管理】適切な暑熱順化 / 【作業環境管理】水分を持ち込めない場所

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。脱水や一部の疾病・薬剤は熱中症リスクを高める。一方Bは不適切。暑熱負担を増やす。

イ：Aは不適切。リスク低減に寄与する。一方Bは適切。正しい。暑熱ばく露から離れて休息・冷却できる場所を確保する。

ウ：Aは適切。正しい。脱水や一部の疾病・薬剤は熱中症リスクを高める。

Bも適切。正しい。暑熱ばく露から離れて休息・冷却できる場所を確保する。

エ：Aは不適切。順化は予防に有利である。Bも不適切。水分補給ができないのは不適切である。

総合解説：Aについて：暑熱作業前には体調確認を行い、発熱・下痢・睡眠不足・基礎疾患等がある者では就業配慮を検討する。

Bについて：作業環境管理ではWBGT低減に加え、適切な休憩場所を設け、作業休止・身体冷却を行えるようにする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0088

一般作業環境・作業管理 > 温熱条件・WBGT | 難易度：応用

次の確認事項A・Bについて、適切な説明だけを組み合わせたものはどれか。

A：法令改正

B：健康管理

ア．【法令改正】WBGT28 以上または気温31 以上の環境で、連続1時間以上または1日4時間を超えて行うことが見込まれる作業 / 【健康管理】約3.5%。減少量を作業後体重の約30分の1とみなす

イ．【法令改正】気温28 以上なら10分作業でも必ず対象 / 【健康管理】約1.7%。1.2÷70×100で求める

ウ．【法令改正】屋外作業だけで屋内作業は対象外 / 【健康管理】約0.6%。減少量を体重の約200分の1として評価する

エ．【法令改正】WBGT28 以上または気温31 以上の環境で、連続1時間以上または1日4時間を超えて行うことが見込まれる作業 / 【健康管理】約1.7%。1.2÷70×100で求める

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。2025年6月施行の強化措置の対象条件である。一方Bは不適切。約3.5%ではない。

イ：Aは不適切。温度と時間の条件が異なる。一方Bは適切。正しい。1.2÷70×100 1.7%である。

ウ：Aは不適切。屋内外を問わず条件に該当し得る。Bも不適切。1.2kg減は70kgの約0.6%ではない。

エ：Aは適切。正しい。2025年6月施行の強化措置の対象条件である。Bも適切。正しい。1.2÷70×100 1.7%である。

総合解説：Aについて：対象作業では、熱中症の早期発見体制、重篤化防止の手順作成、関係作業への周知が義務付けられている。

Bについて：暑熱作業では体重減少が脱水の目安になる。ガイドラインでは作業前より1.5%を超える体重減少などを熱ばく露停止の兆候として挙げている。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0089

一般作業環境・作業管理 > 温熱条件・WBGT | 難易度：標準

二つの論点を関連付けて判断する問題である。両方の記述が正しい選択肢はどれか。

A：緊急対応

B：作業強度

ア．【緊急対応】意識状態を確認し、涼しい場所へ移動させ、必要に応じ救急要請し、回復まで一人にしない /

【作業強度】作業強度が高いほど許容されるWBGT基準値は一般に低くなる

イ．【緊急対応】意識状態を確認し、涼しい場所へ移動させ、必要に応じ救急要請し、回復まで一人にしない /

【作業強度】作業強度が高いほどWBGT基準値は必ず高くなる

ウ．【緊急対応】汗をかいていれば重症ではないと判断する /

【作業強度】作業強度が高いほど許容されるWBGT基準値は一般に低くなる

エ．【緊急対応】本人を一人で休憩室へ歩かせ、翌日まで様子を見る /

【作業強度】作業強度はWBGT評価に関係しない

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。早期発見、冷却、救急要請判断、見守りが重要である。

Bも適切。正しい。代謝熱が増えるため、高強度作業ほどより低いWBGTでも負担が大きい。

イ：Aは適切。正しい。早期発見、冷却、救急要請判断、見守りが重要である。一方Bは不適切。逆である。

ウ：Aは不適切。発汗の有無だけで重症度は判断できない。

一方Bは適切。正しい。代謝熱が増えるため、高強度作業ほどより低いWBGTでも負担が大きい。

エ：Aは不適切。重症化の見逃しにつながる。Bも不適切。作業強度は重要な評価要素である。

総合解説：Aについて：熱中症は急速に悪化することがあるため、職場で定めた報告・対応手順に沿って迅速に対処する。

Bについて：暑熱リスクは環境熱だけでなく、作業で体内に生じる代謝熱にも左右される。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0090

一般作業環境・作業管理 > 温熱条件・WBGT | 難易度：標準

次のA・Bの説明を確認した。訂正の必要がない組合せはどれか。

A：作業強度

B：作業環境管理

ア．【作業強度】作業強度が高いほど許容されるWBGT基準値は一般に低くなる /

【作業環境管理】直射日光下で風のない場所

イ．【作業強度】作業強度が高いほど許容されるWBGT基準値は一般に低くなる /

【作業環境管理】冷房・日陰・通風等により身体を冷却できる休憩場所

ウ．【作業強度】作業強度が高いほどWBGT基準値は必ず高くなる /

【作業環境管理】冷房・日陰・通風等により身体を冷却できる休憩場所

エ．【作業強度】作業強度はWBGT評価に関係しない / 【作業環境管理】水分を持ち込めない場所

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。代謝熱が増えるため、高強度作業ほどより低いWBGTでも負担が大きい。

一方Bは不適切。暑熱負担を増やす。

イ：Aは適切。正しい。代謝熱が増えるため、高強度作業ほどより低いWBGTでも負担が大きい。

Bも適切。正しい。暑熱ばく露から離れて休息・冷却できる場所を確保する。

ウ：Aは不適切。逆である。一方Bは適切。正しい。暑熱ばく露から離れて休息・冷却できる場所を確保する。

エ：Aは不適切。作業強度は重要な評価要素である。Bも不適切。水分補給ができないのは不適切である。

総合解説：Aについて：暑熱リスクは環境熱だけでなく、作業で体内に生じる代謝熱にも左右される。

Bについて：作業環境管理ではWBGT低減に加え、適切な休憩場所を設け、作業休止・身体冷却を行えるようにする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0091 一般作業環境・作業管理 > 温熱条件・WBGT | 難易度：応用

実務上の確認として、二つの論点に対する説明がともに妥当なものはどれか。

A：健康管理

B：WBGT計算

ア．【健康管理】約1.7%。 $1.2 \div 70 \times 100$ で求める / 【WBGT計算】気圧と騒音レベルだけ

イ．【健康管理】約1.0%。 1.2kg 減をそのまま1%とみなす /

【WBGT計算】自然湿球温度・黒球温度・乾球温度

ウ．【健康管理】約1.7%。 $1.2 \div 70 \times 100$ で求める / 【WBGT計算】自然湿球温度・黒球温度・乾球温度

エ．【健康管理】約3.5%。減少量を作業後体重の約30分の1とみなす / 【WBGT計算】自然湿球温度だけ

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。 $1.2 \div 70 \times 100$ 1.7%である。一方Bは不適切。WBGTの算定要素ではない。

イ：Aは不適切。約1.0%より大きい。一方Bは適切。正しい。自然湿球0.7、黒球0.2、乾球0.1の重みで算出する。

ウ：Aは適切。正しい。 $1.2 \div 70 \times 100$ 1.7%である。Bも適切。正しい。自然湿球0.7、黒球0.2、乾球0.1の重みで算出する。

エ：Aは不適切。約3.5%ではない。Bも不適切。日射ありでは複数の温度指標を用いる。

総合解説：Aについて：暑熱作業では体重減少が脱水の目安になる。ガイドラインでは作業前より1.5%を超える体重減少などを熱ばく露停止の兆候として挙げている。

Bについて：屋外日射ありでは、湿度影響、放射熱、気温を反映するため三つの温度指標を用いる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0092 一般作業環境・作業管理 > 温熱条件・WBGT | 難易度：基礎

次の二事項を同時に確認する。正しい説明のみで構成された選択肢はどれか。

A：作業環境管理

B：WBGT計算

ア．【作業環境管理】冷房・日陰・通風等により身体を冷却できる休憩場所 /

【WBGT計算】自然湿球温度だけ

イ．【作業環境管理】水分を持ち込めない場所 / 【WBGT計算】自然湿球温度・黒球温度・乾球温度

ウ．【作業環境管理】作業場所よりさらに高温の密閉室 / 【WBGT計算】黒球温度と照度だけ

エ．【作業環境管理】冷房・日陰・通風等により身体を冷却できる休憩場所 /

【WBGT計算】自然湿球温度・黒球温度・乾球温度

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。暑熱ばく露から離れて休息・冷却できる場所を確保する。

一方Bは不適切。日射ありでは複数の温度指標を用いる。

イ：Aは不適切。水分補給ができないのは不適切である。

一方Bは適切。正しい。自然湿球0.7、黒球0.2、乾球0.1の重みで算出する。

ウ：Aは不適切。身体冷却にならない。Bも不適切。照度はWBGT算定要素ではない。

エ：Aは適切。正しい。暑熱ばく露から離れて休息・冷却できる場所を確保する。

Bも適切。正しい。自然湿球0.7、黒球0.2、乾球0.1の重みで算出する。

総合解説：Aについて：作業環境管理ではWBGT低減に加え、適切な休憩場所を設け、作業休止・身体冷却を行えるようにする。

Bについて：屋外日射ありでは、湿度影響、放射熱、気温を反映するため三つの温度指標を用いる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0093

一般作業環境・作業管理 > 換気・採光・照明・事務室環境 / 換気計算 | 難易度：基礎

次の二つの論点に関する説明の組合せとして、両方とも適切なものはどれか。

A：換気基礎

B：換気計算

ア．【換気基礎】室内の二酸化炭素、臭気、熱、水蒸気などを希釈・排出し、外気を導入する /

【換気計算】 $Q = K \div (C_i - C_o)$

イ．【換気基礎】室内の二酸化炭素、臭気、熱、水蒸気などを希釈・排出し、外気を導入する /

【換気計算】 $Q = (C_i + C_o) \div K$

ウ．【換気基礎】騒音を必ずゼロにする / 【換気計算】 $Q = K \div (C_i - C_o)$

エ．【換気基礎】有害物質を発生源付近に濃縮する / 【換気計算】 $Q = K \div (C_i + C_o)$

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。換気は室内汚染物質や熱・湿気の排出と外気導入を行う。

Bも適切。正しい。定常状態の物質収支から $Q = K/(C_i - C_o)$ となる。

イ：Aは適切。正しい。換気は室内汚染物質や熱・湿気の排出と外気導入を行う。一方Bは不適切。次元が合わない。

ウ：Aは不適切。騒音対策そのものではない。一方Bは適切。正しい。定常状態の物質収支から $Q = K/(C_i - C_o)$ となる。

エ：Aは不適切。逆に濃度を下げるために行う。Bも不適切。外気濃度は差として扱う。

総合解説：Aについて：換気は室内空気質を維持する基本手段であり、高濃度局所発生には局所排気と使い分ける。

Bについて：必要換気量は、発生量が多いほど大きく、許容室内濃度と外気濃度の差が小さいほど大きくなる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0094

一般作業環境・作業管理 > 換気・採光・照明・事務室環境 / 換気計算 | 難易度：標準

新人教育用の確認資料を作成する。次の組合せのうち、二つの説明がともに適切なものはどれか。

A：換気計算

B：換気計算

ア．【換気計算】 $Q = K \div (C_i - C_o)$ / 【換気計算】4回/h。室容積を225m³と誤認する

イ．【換気計算】 $Q = K \div (C_i - C_o)$ / 【換気計算】3回/h。900÷300で求める

ウ．【換気計算】 $Q = (C_i + C_o) \div K$ / 【換気計算】3回/h。900÷300で求める

エ．【換気計算】 $Q = K \div (C_i + C_o)$ / 【換気計算】1回/h。室容積と換気量を同じとみなす

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。定常状態の物質収支から $Q = K/(C_i - C_o)$ となる。一方Bは不適切。室容積は300m³である。

イ：Aは適切。正しい。定常状態の物質収支から $Q = K/(C_i - C_o)$ となる。Bも適切。正しい。換気回数 = $900 \div 300 = 3$ 回/h。

ウ：Aは不適切。次元が合わない。一方Bは適切。正しい。換気回数 = $900 \div 300 = 3$ 回/h。

エ：Aは不適切。外気濃度は差として扱う。Bも不適切。 $900 \div 300 = 3$ であり1回ではない。

総合解説：Aについて：必要換気量は、発生量が多いほど大きく、許容室内濃度と外気濃度の差が小さいほど大きくなる。

Bについて：換気回数は、1時間に室内空気の何倍に相当する空気が入れ替わるかを表す。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0095 一般作業環境・作業管理 > 換気・採光・照明・事務室環境 / 換気計算 | 難易度：応用

衛生管理の復習として、二つの事項を同時に確認する。記述の組合せとして正しいものはどれか。

A：換気計算

B：空気環境

ア．【換気計算】約300m³/h。0.18÷0.0006で求める / 【空気環境】照度を下げる

イ．【換気計算】約1,800m³/h。CO₂発生量0.18m³/hを10倍して扱う /

【空気環境】換気量や外気導入量が在室人数に対して十分か確認する

ウ．【換気計算】約300m³/h。0.18÷0.0006で求める /

【空気環境】換気量や外気導入量が在室人数に対して十分か確認する

エ．【換気計算】約30m³/h。濃度差を0.006として計算する / 【空気環境】騒音計を追加する

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。K = 0.18m³/h、濃度差 = 0.0006なので300m³/h。一方Bは不適切。CO₂上昇への直接的対策ではない。
イ：Aは不適切。発生量を重複して10倍している。一方Bは適切。正しい。人由来CO₂が蓄積している場合、換気不足を示唆する。
ウ：Aは適切。正しい。K = 0.18m³/h、濃度差 = 0.0006なので300m³/h。
Bも適切。正しい。人由来CO₂が蓄積している場合、換気不足を示唆する。
エ：Aは不適切。600ppmは0.006ではなく0.0006である。Bも不適切。騒音とは別問題である。
総合解説：Aについて：ppmは体積比に直して計算する。1000ppm - 400ppm = 600ppm = 0.0006である。
Bについて：CO₂は人の在室に伴う換気状況の目安として利用され、濃度上昇時は外気量や設備運転を点検する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0096 一般作業環境・作業管理 > 換気・採光・照明・事務室環境 / 換気計算 | 難易度：標準

次のA・Bに関する説明のうち、誤りを含まない組合せはどれか。

A：換気計算

B：換気方式

ア．【換気計算】3回/h。900÷300で求める / 【換気方式】自然換気は必ず一定換気量を保証できる

イ．【換気計算】1回/h。室容積と換気量を同じとみなす /

【換気方式】自然換気は風圧差・温度差等を利用し、機械換気は送風機等を利用する

ウ．【換気計算】2回/h。900÷300を2と計算する / 【換気方式】機械換気では外気導入ができない

エ．【換気計算】3回/h。900÷300で求める /

【換気方式】自然換気は風圧差・温度差等を利用し、機械換気は送風機等を利用する

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。換気回数 = 900÷300 = 3回/h。一方Bは不適切。自然換気量は外気条件に左右される。
イ：Aは不適切。900÷300 = 3であり1回ではない。一方Bは適切。正しい。駆動力の違いが基本である。
ウ：Aは不適切。計算が誤っている。Bも不適切。外気導入型の機械換気がある。
エ：Aは適切。正しい。換気回数 = 900÷300 = 3回/h。Bも適切。正しい。駆動力の違いが基本である。
総合解説：Aについて：換気回数は、1時間に室内空気の何倍に相当する空気量が入れ替わるかを表す。
Bについて：自然換気は省エネルギー性がある一方、外気条件で換気量が変動しやすい。機械換気は制御しやすい。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0097 一般作業環境・作業管理 > 換気・採光・照明・事務室環境 / 換気計算 | 難易度：基礎

研修担当者が二つの事項を説明した。内容がともに適切なものを選び。

A：換気方式

B：事務室環境

ア．【換気方式】自然換気は風圧差・温度差等を利用し、機械換気は送風機等を利用する /

【事務室環境】10m³/人で、事務所衛生基準規則の最低基準に一致する

イ．【換気方式】自然換気は風圧差・温度差等を利用し、機械換気は送風機等を利用する /

【事務室環境】20m³/人である

ウ．【換気方式】自然換気は必ず一定換気量を保証できる /

【事務室環境】10m³/人で、事務所衛生基準規則の最低基準に一致する

エ．【換気方式】機械換気では外気導入ができない / 【事務室環境】5m³/人で基準を満たす

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。駆動力の違いが基本である。Bも適切。正しい。1人10m³で最低基準に一致する。

イ：Aは適切。正しい。駆動力の違いが基本である。一方Bは不適切。計算値が異なる。

ウ：Aは不適切。自然換気量は外気条件に左右される。一方Bは適切。正しい。1人10m³で最低基準に一致する。

エ：Aは不適切。外気導入型の機械換気がある。Bも不適切。240÷24=10である。

総合解説：Aについて：自然換気は省エネルギー性がある一方、外気条件で換気量が変動しやすい。機械換気は制御しやすい。

Bについて：気積は単なる床面積ではなく室内空気量の尺度で、1人10m³以上が基準となる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0098 一般作業環境・作業管理 > 換気・採光・照明・事務室環境 / 換気計算 | 難易度：標準

次の二つの事項について整理したメモのうち、両方とも正しいものはどれか。

A：空気環境

B：照明

ア．【空気環境】換気量や外気導入量が在室人数に対して十分か確認する /

【照明】ディスプレイを窓に正対させ反射を増やす

イ．【空気環境】換気量や外気導入量が在室人数に対して十分か確認する /

【照明】光源・画面・窓の位置関係を調整し、ブラインドや遮光等でグレアを抑える

ウ．【空気環境】机の色だけ変更する /

【照明】光源・画面・窓の位置関係を調整し、ブラインドや遮光等でグレアを抑える

エ．【空気環境】照度を下げる / 【照明】室内照明をすべて消して暗室にする

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。人由来CO₂が蓄積している場合、換気不足を示唆する。

一方Bは不適切。反射を増やす配置は望ましくない。

イ：Aは適切。正しい。人由来CO₂が蓄積している場合、換気不足を示唆する。

Bも適切。正しい。直接・反射グレアを抑える配置調整が基本である。

ウ：Aは不適切。空気質改善にならない。一方Bは適切。正しい。直接・反射グレアを抑える配置調整が基本である。

エ：Aは不適切。CO₂上昇への直接的対策ではない。Bも不適切。暗すぎる環境も視覚負担となる。

総合解説：Aについて：CO₂は人の在室に伴う換気状況の目安として利用され、濃度上昇時は外気量や設備運転を点検する。

Bについて：ディスプレイ作業では、窓や照明の映り込みを避け、周囲と画面の明るさの差を過度にしない。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0099

一般作業環境・作業管理 > 換気・採光・照明・事務室環境 / 換気計算 | 難易度：基礎

試験対策として二つの関連事項を比較する。正しい説明の組合せはどれか。

A：照明

B：換気計算

ア．【照明】視対象を見やすくし、眼の過度な負担や作業ミスを減らす /

【換気計算】換気量をゼロにして再測定する

イ．【照明】室内CO2濃度を下げる /

【換気計算】給排気口の短絡、室内気流、発生量の変動、外気濃度などを確認する

ウ．【照明】視対象を見やすくし、眼の過度な負担や作業ミスを減らす /

【換気計算】給排気口の短絡、室内気流、発生量の変動、外気濃度などを確認する

エ．【照明】騒音を吸収する / 【換気計算】在室人数は濃度に関係しないので確認しない

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。適切な照度は視認性と視覚負担に関係する。一方Bは不適切。換気停止は濃度上昇を招く。
イ：Aは不適切。換気の役割である。一方Bは適切。正しい。実際の混合状態や発生条件が理想式と異なることがある。
ウ：Aは適切。正しい。適切な照度は視認性と視覚負担に関係する。
Bも適切。正しい。実際の混合状態や発生条件が理想式と異なることがある。
エ：Aは不適切。防音とは別である。Bも不適切。在室人数はCO2発生量に関係する。
総合解説：Aについて：照明は必要照度だけでなく、まぶしさ、反射、明暗差、光源配置も含めて視環境を整える。
Bについて：換気計算は設計の基礎だが、実際の室内では気流や発生源分布があるため、必要に応じ実測で確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0100

一般作業環境・作業管理 > 換気・採光・照明・事務室環境 / 換気計算 | 難易度：標準

次の確認事項A・Bについて、適切な説明だけを組み合わせたものはどれか。

A：照明

B：採光

ア．【照明】光源・画面・窓の位置関係を調整し、ブラインドや遮光等でグレアを抑える /

【採光】直射日光をディスプレイへ当てる

イ．【照明】室内照明をすべて消して暗室にする /

【採光】自然光を活用しつつ、必要に応じ人工照明・ブラインド等で照度とグレアを調整する

ウ．【照明】画面輝度を最大に固定する /

【採光】昼光だけに依存し、天候や時刻による明るさ変化は無視する

エ．【照明】光源・画面・窓の位置関係を調整し、ブラインドや遮光等でグレアを抑える /

【採光】自然光を活用しつつ、必要に応じ人工照明・ブラインド等で照度とグレアを調整する

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。直接・反射グレアを抑える配置調整が基本である。一方Bは不適切。グレアや反射を増やす。
イ：Aは不適切。暗すぎる環境も視覚負担となる。一方Bは適切。正しい。採光と人工照明を組み合わせる。
ウ：Aは不適切。周囲輝度とのバランスを取る必要がある。Bも不適切。昼光は変動するため補助照明等が必要となる。
エ：Aは適切。正しい。直接・反射グレアを抑える配置調整が基本である。Bも適切。正しい。採光と人工照明を組み合わせる。
総合解説：Aについて：ディスプレイ作業では、窓や照明の映り込みを避け、周囲と画面の明るさの差を過度にしない。
Bについて：自然光は有効だが変動が大きいため、人工照明と遮光を組み合わせで安定した視環境をつくる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0101 一般作業環境・作業管理 > 換気・採光・照明・事務室環境 / 換気計算 | 難易度：標準

二つの論点を関連付けて判断する問題である。両方の記述が正しい選択肢はどれか。

A：事務室環境

B：事務室環境

ア：【事務室環境】10m³/人で、事務所衛生基準規則の最低基準に一致する /

【事務室環境】気温と相対湿度の双方を適切な範囲に保ち、過度な乾燥・高湿度を避ける

イ：【事務室環境】10m³/人で、事務所衛生基準規則の最低基準に一致する /

【事務室環境】気温だけ管理すれば相対湿度は無視してよい

ウ：【事務室環境】20m³/人である /

【事務室環境】気温と相対湿度の双方を適切な範囲に保ち、過度な乾燥・高湿度を避ける

エ：【事務室環境】5m³/人で基準を満たす / 【事務室環境】湿度100%に近いほど常に快適である

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。1人10m³で最低基準に一致する。Bも適切。正しい。温度と湿度を総合管理する。
イ：Aは適切。正しい。1人10m³で最低基準に一致する。一方Bは不適切。湿度も快適性・乾燥感等に関係する。

ウ：Aは不適切。計算値が異なる。一方Bは適切。正しい。温度と湿度を総合管理する。

エ：Aは不適切。240÷24＝10である。Bも不適切。高湿度は不快感や結露等を招く。

総合解説：Aについて：気積は単なる床面積ではなく室内空気量の尺度で、1人10m³以上が基準となる。

Bについて：事務室環境では温度・湿度・気流・換気を合わせて管理し、局所的な不快や乾燥も確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0102 一般作業環境・作業管理 > 換気・採光・照明・事務室環境 / 換気計算 | 難易度：標準

次のA・Bの説明を確認した。訂正の必要がない組合せはどれか。

A：事務室環境

B：換気計算

ア：【事務室環境】気温と相対湿度の双方を適切な範囲に保ち、過度な乾燥・高湿度を避ける /

【換気計算】換気量をゼロにして再測定する

イ：【事務室環境】気温と相対湿度の双方を適切な範囲に保ち、過度な乾燥・高湿度を避ける /

【換気計算】給排気口の短絡、室内気流、発生量の変動、外気濃度などを確認する

ウ：【事務室環境】気温だけ管理すれば相対湿度は無視してよい /

【換気計算】給排気口の短絡、室内気流、発生量の変動、外気濃度などを確認する

エ：【事務室環境】湿度100%に近いほど常に快適である /

【換気計算】在室人数は濃度に関係しないので確認しない

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。温度と湿度を総合管理する。一方Bは不適切。換気停止は濃度上昇を招く。

イ：Aは適切。正しい。温度と湿度を総合管理する。Bも適切。正しい。実際の混合状態や発生条件が理想式と異なることがある。

ウ：Aは不適切。湿度も快適性・乾燥感等に関係する。

一方Bは適切。正しい。実際の混合状態や発生条件が理想式と異なることがある。

エ：Aは不適切。高湿度は不快感や結露等を招く。Bも不適切。在室人数はCO2発生量に関係する。

総合解説：Aについて：事務室環境では温度・湿度・気流・換気を合わせて管理し、局所的な不快や乾燥も確認する。

Bについて：換気計算は設計の基礎だが、実際の室内では気流や発生源分布があるため、必要に応じ実測で確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0103

一般作業環境・作業管理 > 換気・採光・照明・事務室環境 / 換気計算 | 難易度：標準

実務上の確認として、二つの論点に対する説明がともに妥当なものはどれか。

A：採光

B：換気計算

ア．【採光】自然光を活用しつつ、必要に応じ人工照明・ブラインド等で照度とグレアを調整する /

【換気計算】約1,800m³/h。CO₂発生量0.18m³/hを10倍して扱う

イ．【採光】窓をすべて塞ぎ、照度を測定しない / 【換気計算】約300m³/h。0.18 ÷ 0.0006で求める

ウ．【採光】自然光を活用しつつ、必要に応じ人工照明・ブラインド等で照度とグレアを調整する /

【換気計算】約300m³/h。0.18 ÷ 0.0006で求める

エ．【採光】直射日光をディスプレイへ当てる / 【換気計算】約30m³/h。濃度差を0.006として計算する

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。採光と人工照明を組み合わせる。一方Bは不適切。発生量を重複して10倍している。

イ：Aは不適切。採光を不要に排除する必要はない。一方Bは適切。正しい。K = 0.18m³/h、濃度差 = 0.0006なので300m³/h。

ウ：Aは適切。正しい。採光と人工照明を組み合わせる。Bも適切。正しい。K = 0.18m³/h、濃度差 = 0.0006なので300m³/h。

エ：Aは不適切。グレアや反射を増やす。Bも不適切。600ppmは0.006ではなく0.0006である。

総合解説：Aについて：自然光は有効だが変動が大きいため、人工照明と遮光を組み合わせで安定した視環境をつくる。

Bについて：ppmは体積比に直して計算する。1000ppm - 400ppm = 600ppm = 0.0006である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0104

一般作業環境・作業管理 > 換気・採光・照明・事務室環境 / 換気計算 | 難易度：応用

次の二事項を同時に確認する。正しい説明のみで構成された選択肢はどれか。

A：換気計算

B：換気計算

ア．【換気計算】給排気口の短絡、室内気流、発生量の変動、外気濃度などを確認する /

【換気計算】約300m³/h。濃度差を0.006として計算する

イ．【換気計算】在室人数は濃度に関係しないので確認しない /

【換気計算】約300m³/h。0.18 ÷ 0.0006で求める

ウ．【換気計算】計算式は常に完全なので実測値を無視する /

【換気計算】約100m³/h。1人当たり10m³/hだけ必要とみなす

エ．【換気計算】給排気口の短絡、室内気流、発生量の変動、外気濃度などを確認する /

【換気計算】約300m³/h。0.18 ÷ 0.0006で求める

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。実際の混合状態や発生条件が理想式と異なることがある。

一方Bは不適切。600ppmは0.006ではなく0.0006である。

イ：Aは不適切。在室人数はCO₂発生量に関係する。一方Bは適切。正しい。K = 0.18m³/h、濃度差 = 0.0006なので300m³/h。

ウ：Aは不適切。実測と計算の双方を検討する。Bも不適切。在室人数だけの簡易値ではなく物質収支で求める。

エ：Aは適切。正しい。実際の混合状態や発生条件が理想式と異なることがある。

Bも適切。正しい。K = 0.18m³/h、濃度差 = 0.0006なので300m³/h。

総合解説：Aについて：換気計算は設計の基礎だが、実際の室内では気流や発生源分布があるため、必要に応じ実測で確認する。

Bについて：ppmは体積比に直して計算する。1000ppm - 400ppm = 600ppm = 0.0006である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0105 一般作業環境・作業管理 > 人間工学・腰痛・情報機器作業 | 難易度：基礎

次の二つの論点に関する説明の組合せとして、両方とも適切なものはどれか。

A：人間工学

B：腰痛要因

- ア．【人間工学】作業者の身体特性や能力に合わせて設備・作業方法を設計し、負担や誤操作を減らす / 【腰痛要因】重量物、不自然な姿勢、長時間の静的姿勢、振動、心理社会的要因など
イ．【人間工学】作業者の身体特性や能力に合わせて設備・作業方法を設計し、負担や誤操作を減らす / 【腰痛要因】血中鉛量だけ
ウ．【人間工学】人を設備に無理に合わせる / 【腰痛要因】重量物、不自然な姿勢、長時間の静的姿勢、振動、心理社会的要因など
エ．【人間工学】疲労は個人の根性だけで解決する / 【腰痛要因】年齢だけで決まり作業条件は関係しない

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。人に仕事を合わせるのが人間工学の基本である。
Bも適切。正しい。腰痛は動作・環境・個人・心理社会的要因が複合して生じる。
イ：Aは適切。正しい。人に仕事を合わせるのが人間工学の基本である。
一方Bは不適切。鉛ばく露は腰痛の一般的主要要因ではない。
ウ：Aは不適切。人側だけに適応を求める考え方ではない。
一方Bは適切。正しい。腰痛は動作・環境・個人・心理社会的要因が複合して生じる。
エ：Aは不適切。作業設計上の問題を無視している。Bも不適切。年齢だけで決まらない。
総合解説：Aについては：人間工学では身体寸法、姿勢、視認性、操作性、認知特性等を考慮して作業を設計する。
Bについては：腰痛予防は単一対策ではなく、作業環境管理、作業管理、健康管理、教育を総合的に行う。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0106 一般作業環境・作業管理 > 人間工学・腰痛・情報機器作業 | 難易度：標準

新人教育用の確認資料を作成する。次の組合せのうち、二つの説明がともに適切なものはどれか。

A：腰痛要因

B：作業姿勢

- ア．【腰痛要因】重量物、不自然な姿勢、長時間の静的姿勢、振動、心理社会的要因など / 【作業姿勢】片足立ちで持ち上げる
イ．【腰痛要因】重量物、不自然な姿勢、長時間の静的姿勢、振動、心理社会的要因など / 【作業姿勢】荷物を身体に近づけ、重心を低くし、ひねりを避ける
ウ．【腰痛要因】血中鉛量だけ / 【作業姿勢】荷物を身体に近づけ、重心を低くし、ひねりを避ける
エ．【腰痛要因】年齢だけで決まり作業条件は関係しない / 【作業姿勢】荷物からできるだけ離れ、腰だけを深く曲げる

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。腰痛は動作・環境・個人・心理社会的要因が複合して生じる。一方Bは不適切。不安定で負担が大きい。
イ：Aは適切。正しい。腰痛は動作・環境・個人・心理社会的要因が複合して生じる。
Bも適切。正しい。対象物を近づけ不自然姿勢を避ける。
ウ：Aは不適切。鉛ばく露は腰痛の一般的主要要因ではない。一方Bは適切。正しい。対象物を近づけ不自然姿勢を避ける。
エ：Aは不適切。年齢だけで決まらない。Bも不適切。荷物が身体から遠いほど腰部負担が増える。
総合解説：Aについては：腰痛予防は単一対策ではなく、作業環境管理、作業管理、健康管理、教育を総合的に行う。
Bについては：腰痛予防では前屈・ひねり・急激な動作を避け、対象物を身体に近づけて安定した姿勢をとる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0107

一般作業環境・作業管理 > 人間工学・腰痛・情報機器作業 | 難易度：標準

衛生管理の復習として、二つの事項を同時に確認する。記述の組合せとして正しいものはどれか。

A：腰痛対策

B：介護作業

ア．【腰痛対策】台車、リフター等を導入し、人力での持ち上げ回数・負担を減らす /

【介護作業】介助者1人で必ず抱え上げる

イ．【腰痛対策】荷物を身体から離して持ち上げる /

【介護作業】原則として人力による抱え上げを避け、リフト等の福祉用具を活用する

ウ．【腰痛対策】台車、リフター等を導入し、人力での持ち上げ回数・負担を減らす /

【介護作業】原則として人力による抱え上げを避け、リフト等の福祉用具を活用する

エ．【腰痛対策】作業者に速く持ち上げるよう指示する / 【介護作業】腰をひねりながら勢いで移乗する

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。自動化・省力化が原則である。一方Bは不適切。一人介助が最適とは限らない。

イ：Aは不適切。身体から離れるほど腰部モーメントが増える。

一方Bは適切。正しい。人力抱え上げは腰部負担が大きく、省力化・福祉用具活用を優先する。

ウ：Aは適切。正しい。自動化・省力化が原則である。

Bも適切。正しい。人力抱え上げは腰部負担が大きく、省力化・福祉用具活用を優先する。

エ：Aは不適切。急な動作は負担を増やす。Bも不適切。ひねりは腰部負担を増やす。

総合解説：Aについて：重量物作業ではまず人力取扱いそのものを減らし、残る作業では姿勢・重量・頻度を調整する。

Bについて：介護・看護では対象者の状態変化も考慮し、リフト・スライディングボード等を用いて抱え上げを減らす。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0108

一般作業環境・作業管理 > 人間工学・腰痛・情報機器作業 | 難易度：標準

次のA・Bに関する説明のうち、誤りを含まない組合せはどれか。

A：作業姿勢

B：重量物

ア．【作業姿勢】荷物を身体に近づけ、重心を低くし、ひねりを避ける /

【重量物】21kg。荷姿や頻度を考慮せず30%だけで決める

イ．【作業姿勢】荷物からできるだけ離れ、腰だけを深く曲げる /

【重量物】28kg。体重70kgの40%として算出する

ウ．【作業姿勢】身体をひねりながら勢いをつけて持ち上げる /

【重量物】35kg。体重の半分までなら姿勢に関係なく安全とみなす

エ．【作業姿勢】荷物を身体に近づけ、重心を低くし、ひねりを避ける /

【重量物】28kg。体重70kgの40%として算出する

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。対象物を近づけ不自然姿勢を避ける。一方Bは不適切。設問の40%ではなく30%で計算している。

イ：Aは不適切。荷物が身体から遠いほど腰部負担が増える。一方Bは適切。正しい。 $70 \times 0.4 = 28\text{kg}$ 。

ウ：Aは不適切。ひねり動作は腰痛リスクとなる。Bも不適切。50%であり、設問の目安と異なる。姿勢等の条件も別途考慮する。

エ：Aは適切。正しい。対象物を近づけ不自然姿勢を避ける。Bも適切。正しい。 $70 \times 0.4 = 28\text{kg}$ 。

総合解説：Aについて：腰痛予防では前屈・ひねり・急激な動作を避け、対象物を身体に近づけて安定した姿勢をとる。

Bについて：重量の目安は絶対的な安全限界ではなく、頻度、姿勢、距離、持続時間等も考慮して負担を低減する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0109

一般作業環境・作業管理 > 人間工学・腰痛・情報機器作業 | 難易度：応用

研修担当者が二つの事項を説明した。内容がともに適切なものを選び。

A：重量物

B：作業姿勢

ア：【重量物】28kg。体重70kgの40%として算出する /

【作業姿勢】椅子に深く腰掛け背を背もたれにあて、足裏全体を床または足台で支持する

イ：【重量物】28kg。体重70kgの40%として算出する / 【作業姿勢】画面を見るため首を常に大きくひねる

ウ：【重量物】21kg。荷姿や頻度を考慮せず30%だけで決める /

【作業姿勢】椅子に深く腰掛け背を背もたれにあて、足裏全体を床または足台で支持する

エ：【重量物】35kg。体重の半分までなら姿勢に関係なく安全とみなす /

【作業姿勢】椅子に浅く腰掛け、足を床から浮かせる

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。70×0.4=28kg。Bも適切。正しい。安定した支持と自然な姿勢が基本である。

イ：Aは適切。正しい。70×0.4=28kg。一方Bは不適切。頸肩部負担が増える。

ウ：Aは不適切。設問の40%ではなく30%で計算している。一方Bは適切。正しい。安定した支持と自然な姿勢が基本である。

エ：Aは不適切。50%であり、設問の目安と異なる。姿勢等の条件も別途考慮する。Bも不適切。姿勢が不安定になりやすい。

総合解説：Aについて：重量の目安は絶対的な安全限界ではなく、頻度、姿勢、距離、持続時間等も考慮して負担を低減する。

Bについて：机・椅子・ディスプレイ・キーボード等を個人に合わせて調整し、無理のない姿勢を保つ。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0110

一般作業環境・作業管理 > 人間工学・腰痛・情報機器作業 | 難易度：応用

次の二つの事項について整理したメモのうち、両方とも正しいものはどれか。

A：介護作業

B：作業休止

ア：【介護作業】原則として人力による抱え上げを避け、リフト等の福祉用具を活用する /

【作業休止】1～2分

イ：【介護作業】原則として人力による抱え上げを避け、リフト等の福祉用具を活用する /

【作業休止】10～15分

ウ：【介護作業】対象者の状態に関係なく同じ方法で行う / 【作業休止】10～15分

エ：【介護作業】介助者1人で必ず抱え上げる / 【作業休止】5分だけ

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。人力抱え上げは腰部負担が大きく、省力化・福祉用具活用を優先する。一方Bは不適切。短すぎる。

イ：Aは適切。正しい。人力抱え上げは腰部負担が大きく、省力化・福祉用具活用を優先する。

Bも適切。正しい。10～15分の作業休止時間を設ける。

ウ：Aは不適切。対象者の状態に応じ作業標準を見直す。一方Bは適切。正しい。10～15分の作業休止時間を設ける。

エ：Aは不適切。一人介助が最適とは限らない。Bも不適切。ガイドラインの目安より短い。

総合解説：Aについて：介護・看護では対象者の状態変化も考慮し、リフト・スライディングボード等を用いて抱え上げを減らす。

Bについて：作業休止時間には画面から目を離し、姿勢を変える、他の作業を行うなどして局所疲労を軽減する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0111 一般作業環境・作業管理 > 人間工学・腰痛・情報機器作業 | 難易度：基礎

試験対策として二つの関連事項を比較する。正しい説明の組合せはどれか。

A：作業時間

B：人間工学

ア．【作業時間】1時間を超えないようにする / 【人間工学】疲労は個人の根性だけで解決する
イ．【作業時間】2時間を超えないようにする /
【人間工学】作業者の身体特性や能力に合わせて設備・作業方法を設計し、負担や誤操作を減らす
ウ．【作業時間】1時間を超えないようにする /
【人間工学】作業者の身体特性や能力に合わせて設備・作業方法を設計し、負担や誤操作を減らす
エ．【作業時間】30分を超えてはならないと法律で禁止されている /
【人間工学】すべての作業を同じ机・椅子に固定する

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。一連続作業時間が1時間を超えないよう指導する。一方Bは不適切。作業設計上の問題を無視している。
イ：Aは不適切。ガイドラインは1時間を基本とする。一方Bは適切。正しい。人に仕事を合わせるのが人間工学の基本である。
ウ：Aは適切。正しい。一連続作業時間が1時間を超えないよう指導する。
Bも適切。正しい。人に仕事を合わせるのが人間工学の基本である。
エ：Aは不適切。30分という法的禁止ではない。Bも不適切。個人差に対応できない。
総合解説：Aについて：情報機器作業では長時間の画面注視や固定姿勢を避けるため、一連続作業を1時間以内とする。
Bについて：人間工学では身体寸法、姿勢、視認性、操作性、認知特性等を考慮して作業を設計する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0112 一般作業環境・作業管理 > 人間工学・腰痛・情報機器作業 | 難易度：基礎

次の確認事項A・Bについて、適切な説明だけを組み合わせたものはどれか。

A：作業休止

B：座りすぎ

ア．【作業休止】10～15分 / 【座りすぎ】首肩痛が出るまで姿勢を変えない
イ．【作業休止】5分だけ /
【座りすぎ】可能な範囲で立位や他作業を交え、同一姿勢が長時間続かないようにする
ウ．【作業休止】30～60分を必ず休憩扱いにする / 【座りすぎ】椅子から一度も立たず集中を維持する
エ．【作業休止】10～15分 /
【座りすぎ】可能な範囲で立位や他作業を交え、同一姿勢が長時間続かないようにする

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。10～15分の作業休止時間を設ける。一方Bは不適切。症状が出る前から予防的に姿勢を変える。
イ：Aは不適切。ガイドラインの目安より短い。一方Bは適切。正しい。同一座位の長時間持続を避ける。
ウ：Aは不適切。作業休止時間は必ずしも労基法上の休憩時間と同じではない。Bも不適切。静的負担が蓄積する。
エ：Aは適切。正しい。10～15分の作業休止時間を設ける。Bも適切。正しい。同一座位の長時間持続を避ける。
総合解説：Aについて：作業休止時間には画面から目を離し、姿勢を変える、他の作業を行うなどして局所疲労を軽減する。Bについて：情報機器作業では視覚負担だけでなく座位持続による筋骨格負担を考慮し、姿勢変換や作業ローテーションを取り入れる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0113 一般作業環境・作業管理 > 人間工学・腰痛・情報機器作業 | 難易度：標準

二つの論点を関連付けて判断する問題である。両方の記述が正しい選択肢はどれか。

A：作業姿勢

B：機器調整

- ア．【作業姿勢】椅子に深く腰掛け背を背もたれにあて、足裏全体を床または足台で支持する / 【機器調整】画面を正面付近に置き、視距離や高さを調整して自然な頭頸部姿勢をとれるようにする
イ．【作業姿勢】椅子に深く腰掛け背を背もたれにあて、足裏全体を床または足台で支持する / 【機器調整】画面を作業者の真横に置き、常に首を90度ひねる
ウ．【作業姿勢】画面を見るため首を常に大きくひねる / 【機器調整】画面を正面付近に置き、視距離や高さを調整して自然な頭頸部姿勢をとれるようにする
エ．【作業姿勢】椅子に浅く腰掛け、足を床から浮かせる / 【機器調整】画面を極端に高くし、常に上を向く

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。安定した支持と自然な姿勢が基本である。Bも適切。正しい。正面配置と高さ・距離調整が基本である。
イ：Aは適切。正しい。安定した支持と自然な姿勢が基本である。一方Bは不適切。長時間の頸部回旋を招く。
ウ：Aは不適切。頸肩部負担が増える。一方Bは適切。正しい。正面配置と高さ・距離調整が基本である。
エ：Aは不適切。姿勢が不安定になりやすい。Bも不適切。頸部伸展が続く。
総合解説：Aについて：机・椅子・ディスプレイ・キーボード等を個人に合わせて調整し、無理のない姿勢を保つ。
Bについて：視認性だけでなく、首・肩・上肢が中立に近い姿勢を保てるよう機器配置を調整する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0114 一般作業環境・作業管理 > 人間工学・腰痛・情報機器作業 | 難易度：標準

次のA・Bの説明を確認した。訂正の必要がない組合せはどれか。

A：機器調整

B：人間工学

- ア．【機器調整】画面を正面付近に置き、視距離や高さを調整して自然な頭頸部姿勢をとれるようにする / 【人間工学】疲労は個人の根性だけで解決する
イ．【機器調整】画面を正面付近に置き、視距離や高さを調整して自然な頭頸部姿勢をとれるようにする / 【人間工学】作業者の身体特性や能力に合わせて設備・作業方法を設計し、負担や誤操作を減らす
ウ．【機器調整】画面を作業者の真横に置き、常に首を90度ひねる / 【人間工学】作業者の身体特性や能力に合わせて設備・作業方法を設計し、負担や誤操作を減らす
エ．【機器調整】画面を極端に高くし、常に上を向く / 【人間工学】すべての作業を同じ机・椅子に固定する

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。正面配置と高さ・距離調整が基本である。一方Bは不適切。作業設計上の問題を無視している。
イ：Aは適切。正しい。正面配置と高さ・距離調整が基本である。
Bも適切。正しい。人に仕事を合わせるのが人間工学の基本である。
ウ：Aは不適切。長時間の頸部回旋を招く。一方Bは適切。正しい。人に仕事を合わせるのが人間工学の基本である。
エ：Aは不適切。頸部伸展が続く。Bも不適切。個人差に対応できない。
総合解説：Aについて：視認性だけでなく、首・肩・上肢が中立に近い姿勢を保てるよう機器配置を調整する。
Bについて：人間工学では身体寸法、姿勢、視認性、操作性、認知特性等を考慮して作業を設計する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0115 一般作業環境・作業管理 > 人間工学・腰痛・情報機器作業 | 難易度：応用

実務上の確認として、二つの論点に対する説明がともに妥当なものはどれか。

A：座りすぎ

B：作業姿勢

ア．【座りすぎ】可能な範囲で立位や他作業を交え、同一姿勢が長時間続かないようにする /

【作業姿勢】片足立ちで持ち上げる

イ．【座りすぎ】作業休止時間も画面を見続ける /

【作業姿勢】荷物を身体に近づけ、重心を低くし、ひねりを避ける

ウ．【座りすぎ】可能な範囲で立位や他作業を交え、同一姿勢が長時間続かないようにする /

【作業姿勢】荷物を身体に近づけ、重心を低くし、ひねりを避ける

エ．【座りすぎ】首肩痛が出るまで姿勢を変えない /

【作業姿勢】荷物からできるだけ離れ、腰だけを深く曲げる

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。同一座位の長時間持続を避ける。一方Bは不適切。不安定で負担が大きい。

イ：Aは不適切。作業休止の目的に反する。一方Bは適切。正しい。対象物を近づけ不自然姿勢を避ける。

ウ：Aは適切。正しい。同一座位の長時間持続を避ける。 Bも適切。正しい。対象物を近づけ不自然姿勢を避ける。

エ：Aは不適切。症状が出る前から予防的に姿勢を変える。 Bも不適切。荷物が身体から遠いほど腰部負担が増える。

総合解説：Aについて：情報機器作業では視覚負担だけでなく座位持続による筋骨格負担を考慮し、姿勢変換や作業ローテーションを取り入れる。 Bについて：腰痛予防では前屈・ひねり・急激な動作を避け、対象物を身体に近づけて安定した姿勢をとる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0116 健康管理・救急・健康保持 > 一般健康診断・生活習慣病・事後措置 | 難易度：基礎

次の二つの論点に関する説明の組合せとして、両方とも適切なものはどれか。

A：健診頻度

B：健診項目

ア．【健診頻度】1年以内ごとに1回 / 【健診項目】血中鉛量だけ

イ．【健診頻度】6か月以内ごとに1回 / 【健診項目】血圧、血中脂質、血糖、尿検査、心電図など

ウ．【健診頻度】本人が希望した時だけ / 【健診項目】作業環境の騒音レベルだけ

エ．【健診頻度】1年以内ごとに1回 / 【健診項目】血圧、血中脂質、血糖、尿検査、心電図など

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。一般の定期健康診断は1年以内ごとに1回行う。一方Bは不適切。鉛の特殊健診項目である。

イ：Aは不適切。深夜業等の特定業務従事者では6か月ごとの場合があるが、一般定期健診の原則ではない。

一方Bは適切。正しい。一般健診には生活習慣病関連項目も含まれる。

ウ：Aは不適切。法定健康診断は本人希望だけで決まらない。 Bも不適切。作業環境測定であり健康診断項目ではない。

エ：Aは適切。正しい。一般の定期健康診断は1年以内ごとに1回行う。

Bも適切。正しい。一般健診には生活習慣病関連項目も含まれる。

総合解説：Aについて：一般定期健康診断は、常時使用する労働者の健康状態を定期的に確認するため、原則年1回実施する。

Bについて：一般健診は既往歴、診察、身体計測、視聴覚、胸部X線、血圧、血液、尿、心電図等から構成される。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0117 健康管理・救急・健康保持 > 一般健康診断・生活習慣病・事後措置 | 難易度：基礎

新人教育用の確認資料を作成する。次の組合せのうち、二つの説明がともに適切なものはどれか。

A：健診項目

B：情報提供

ア：【健診項目】血圧、血中脂質、血糖、尿検査、心電図など /

【情報提供】当該労働者の作業内容、労働時間、勤務形態など健康影響の判断に必要な就業情報

イ：【健診項目】血圧、血中脂質、血糖、尿検査、心電図など / 【情報提供】会社の広告予算だけ

ウ：【健診項目】血中鉛量だけ /

【情報提供】当該労働者の作業内容、労働時間、勤務形態など健康影響の判断に必要な就業情報

エ：【健診項目】作業環境の騒音レベルだけ / 【情報提供】本人の趣味や娯楽費だけ

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。一般健診には生活習慣病関連項目も含まれる。

Bも適切。正しい。医師が仕事による健康影響や必要な就業配慮を判断できるよう、業務内容・労働時間等の情報が重要である。

イ：Aは適切。正しい。一般健診には生活習慣病関連項目も含まれる。

一方Bは不適切。健康影響の判断に必要な就業情報ではない。

ウ：Aは不適切。鉛の特殊健診項目である。一方Bは適切。正しい。医師が仕事による健康影響や必要な就業配慮を判断できるよう、業務内容・労働時間等の情報が重要である。

エ：Aは不適切。作業環境測定であり健康診断項目ではない。 Bも不適切。就業上の措置を判断するための中心情報ではない。

総合解説：Aについて：一般健診は既往歴、診察、身体計測、視聴覚、胸部X線、血圧、血液、尿、心電図等から構成される。Bについて：健康診断後の事後措置では、検査値だけでなく実際の作業内容、労働時間、勤務形態等を踏まえて就業上の配慮を判断する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0118 健康管理・救急・健康保持 > 一般健康診断・生活習慣病・事後措置 | 難易度：基礎

衛生管理の復習として、二つの事項を同時に確認する。記述の組合せとして正しいものはどれか。

A：記録保存

B：生活習慣病

ア：【記録保存】5年間。健康診断個人票として保存する / 【生活習慣病】血液型だけ

イ：【記録保存】5年間。健康診断個人票として保存する /

【生活習慣病】喫煙、運動不足、過剰な飲酒、不適切な食習慣など

ウ：【記録保存】30年間。一般健診も長期保存対象とする /

【生活習慣病】喫煙、運動不足、過剰な飲酒、不適切な食習慣など

エ：【記録保存】1年間。次回健診まで保存すれば足りる / 【生活習慣病】照度だけ

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。健康診断個人票は5年間保存する。一方Bは不適切。血液型は代表的な改善可能生活習慣因子ではない。

イ：Aは適切。正しい。健康診断個人票は5年間保存する。

Bも適切。正しい。複数の生活習慣が循環器疾患や糖尿病等のリスクに関係する。

ウ：Aは不適切。一般健診では一律30年保存ではない。

一方Bは適切。正しい。複数の生活習慣が循環器疾患や糖尿病等のリスクに関係する。

エ：Aは不適切。1年では不足する。 Bも不適切。単一の環境因子だけでは説明できない。

総合解説：Aについて：健康診断は実施だけでなく、結果を個人票に記録して5年間保存する。

Bについて：生活習慣病対策では、喫煙、飲酒、食事、運動、睡眠等の改善を継続的に支援する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0119

健康管理・救急・健康保持 > 一般健康診断・生活習慣病・事後措置 | 難易度：標準

次のA・Bに関する説明のうち、誤りを含まない組合せはどれか。

A：情報提供

B：事後措置

ア．【情報提供】当該労働者の作業内容、労働時間、勤務形態など健康影響の判断に必要な就業情報 / 【事後措置】本人を叱責して運動させる

イ．【情報提供】本人の趣味や娯楽費だけ /

【事後措置】医師意見を踏まえ、必要に応じ労働時間短縮や作業転換等を検討する

ウ．【情報提供】当該労働者の作業内容、労働時間、勤務形態など健康影響の判断に必要な就業情報 / 【事後措置】医師意見を踏まえ、必要に応じ労働時間短縮や作業転換等を検討する

エ．【情報提供】同僚の私生活に関するうわさ / 【事後措置】健康診断記録を削除する

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。医師が仕事による健康影響や必要な就業配慮を判断できるよう、業務内容・労働時間等の情報が重要である。一方Bは不適切。医学的・労務的措置になっていない。

イ：Aは不適切。就業上の措置を判断するための中心情報ではない。

一方Bは適切。正しい。医師意見を踏まえて就業上の措置を講じる。

ウ：Aは適切。正しい。医師が仕事による健康影響や必要な就業配慮を判断できるよう、業務内容・労働時間等の情報が重要である。Bも適切。正しい。医師意見を踏まえて就業上の措置を講じる。

エ：Aは不適切。不適切な個人情報であり、医学的就業判断の基礎とはならない。Bも不適切。記録削除は不適切である。

総合解説：Aについて：健康診断後の事後措置では、検査値だけでなく実際の作業内容、労働時間、勤務形態等を踏まえて就業上の配慮を判断する。Bについて：健康診断後の事後措置は、疾病の治療だけでなく、仕事による健康悪化を防ぐ就業配慮を含む。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0120

健康管理・救急・健康保持 > 一般健康診断・生活習慣病・事後措置 | 難易度：標準

研修担当者が二つの事項を説明した。内容がともに適切なものを選べ。

A：事後措置

B：生活習慣病

ア．【事後措置】医師意見を踏まえ、必要に応じ労働時間短縮や作業転換等を検討する / 【生活習慣病】運動だけを強制し医療受診は禁止する

イ．【事後措置】本人を叱責して運動させる /

【生活習慣病】本人の生活習慣や受診状況を確認し、必要な保健指導・受診勧奨につなげる

ウ．【事後措置】健康診断記録を削除する / 【生活習慣病】異常項目を一つずつ無関係と考える

エ．【事後措置】医師意見を踏まえ、必要に応じ労働時間短縮や作業転換等を検討する /

【生活習慣病】本人の生活習慣や受診状況を確認し、必要な保健指導・受診勧奨につなげる

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。医師意見を踏まえて就業上の措置を講じる。一方Bは不適切。受診が必要な場合がある。

イ：Aは不適切。医学的・労務的措置になっていない。一方Bは適切。正しい。総合的なリスク管理が重要である。

ウ：Aは不適切。記録削除は不適切である。Bも不適切。複数リスクは相互に影響し得る。

エ：Aは適切。正しい。医師意見を踏まえて就業上の措置を講じる。Bも適切。正しい。総合的なリスク管理が重要である。

総合解説：Aについて：健康診断後の事後措置は、疾病の治療だけでなく、仕事による健康悪化を防ぐ就業配慮を含む。

Bについて：生活習慣病は無症状で進行することがあるため、健診異常を保健指導や医療受診へつなげる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0121 健康管理・救急・健康保持 > 一般健康診断・生活習慣病・事後措置 | 難易度：基礎

次の二つの事項について整理したメモのうち、両方とも正しいものはどれか。

A：生活習慣病

B：BMI

ア．【生活習慣病】喫煙、運動不足、過剰な飲酒、不適切な食習慣など /

【BMI】約24.9。72 ÷ 1.70²で求める

イ．【生活習慣病】喫煙、運動不足、過剰な飲酒、不適切な食習慣など /

【BMI】約18.0。72 ÷ 4として計算する

ウ．【生活習慣病】騒音だけ / 【BMI】約24.9。72 ÷ 1.70²で求める

エ．【生活習慣病】血液型だけ / 【BMI】約21.0。身長を1.85mとして計算した値に近い

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。複数の生活習慣が循環器疾患や糖尿病等のリスクに関係する。Bも適切。正しい。72 ÷ (1.70²) 24.9。

イ：Aは適切。正しい。複数の生活習慣が循環器疾患や糖尿病等のリスクに関係する。一方Bは不適切。計算式が異なる。

ウ：Aは不適切。騒音は健康影響があるが生活習慣病全体の代表的な生活習慣因子ではない。

一方Bは適切。正しい。72 ÷ (1.70²) 24.9。

エ：Aは不適切。血液型は代表的な改善可能生活習慣因子ではない。Bも不適切。与えられた身長を使っていない。

総合解説：Aについて：生活習慣病対策では、喫煙、飲酒、食事、運動、睡眠等の改善を継続的に支援する。

Bについて：BMIは肥満度の一つの目安だが、健康リスクは腹囲、血圧、脂質、血糖等と合わせて評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0122 健康管理・救急・健康保持 > 一般健康診断・生活習慣病・事後措置 | 難易度：標準

試験対策として二つの関連事項を比較する。正しい説明の組合せはどれか。

A：特定健診

B：特定業務従事者健診

ア．【特定健診】40～74歳を対象に、メタボリックシンドロームに着目して生活習慣病リスクを評価する制度である /

【特定業務従事者健診】退職時だけ行う

イ．【特定健診】40～74歳を対象に、メタボリックシンドロームに着目して生活習慣病リスクを評価する制度である /

【特定業務従事者健診】配置替え時およびその後6か月以内ごとに1回行う

ウ．【特定健診】全ての労働者に会社が行う雇入時健康診断と同じ制度である /

【特定業務従事者健診】配置替え時およびその後6か月以内ごとに1回行う

エ．【特定健診】20歳未満だけを対象とする / 【特定業務従事者健診】本人が希望した場合に限り行う

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。医療保険者が行う生活習慣病予防の健診である。一方Bは不適切。退職時だけではない。

イ：Aは適切。正しい。医療保険者が行う生活習慣病予防の健診である。

Bも適切。正しい。特定業務従事者には配置時と6か月以内ごとの健康診断が必要である。

ウ：Aは不適切。事業者健診とは制度主体・目的が異なる。

一方Bは適切。正しい。特定業務従事者には配置時と6か月以内ごとの健康診断が必要である。

エ：Aは不適切。対象年齢が異なる。Bも不適切。法定対象では本人希望だけで決まらない。

総合解説：Aについて：特定健診は事業者の一般健康診断とは別制度であり、40～74歳の生活習慣病予防に重点を置く。

Bについて：深夜業など身体負担の大きい特定業務では、一般労働者より短い周期で健康状態を確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0123 健康管理・救急・健康保持 > 一般健康診断・生活習慣病・事後措置 | 難易度：標準

次の確認事項A・Bについて、適切な説明だけを組み合わせたものはどれか。

A：BMI

B：集団分析

ア．【BMI】約24.9。72÷1.70²で求める / 【集団分析】症状のある者だけ退職させる

イ．【BMI】約21.0。身長を1.85mとして計算した値に近い /

【集団分析】個人情報に配慮しつつ集団的傾向を把握し、労働時間や勤務体制等の職場要因も見直す

ウ．【BMI】約24.9。72÷1.70²で求める /

【集団分析】個人情報に配慮しつつ集団的傾向を把握し、労働時間や勤務体制等の職場要因も見直す

エ．【BMI】約30.5。身長の二乗で割らずに過大評価する /

【集団分析】全て個人の生活習慣だけの問題と決めつける

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。72÷(1.70²) 24.9。一方Bは不適切。根本的な健康管理にならない。

イ：Aは不適切。与えられた身長を使っていない。

一方Bは適切。正しい。個人情報保護に配慮した集団の評価は職場改善に役立つ。

ウ：Aは適切。正しい。72÷(1.70²) 24.9。Bも適切。正しい。個人情報保護に配慮した集団の評価は職場改善に役立つ。

エ：Aは不適切。計算式が異なる。Bも不適切。職場要因も評価すべきである。

総合解説：Aについて：BMIは肥満度の一つの目安だが、健康リスクは腹囲、血圧、脂質、血糖等と合わせて評価する。

Bについて：健康管理は個人への指導だけでなく、勤務体制や職場環境など集団的リスクの改善にもつなげる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0124 健康管理・救急・健康保持 > 一般健康診断・生活習慣病・事後措置 | 難易度：標準

二つの論点を関連付けて判断する問題である。両方の記述が正しい選択肢はどれか。

A：生活習慣病

B：結果通知

ア．【生活習慣病】本人の生活習慣や受診状況を確認し、必要な保健指導・受診勧奨につなげる /

【結果通知】本人に知らせない方が健康行動が改善するため

イ．【生活習慣病】運動だけを強制し医療受診は禁止する /

【結果通知】本人が自らの健康状態を把握し、必要な受診や生活改善につなげるため

ウ．【生活習慣病】異常項目を一つずつ無関係と考える /

【結果通知】事業者だけが結果を知れば十分だから

エ．【生活習慣病】本人の生活習慣や受診状況を確認し、必要な保健指導・受診勧奨につなげる /

【結果通知】本人が自らの健康状態を把握し、必要な受診や生活改善につなげるため

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。総合的なリスク管理が重要である。一方Bは不適切。通知しないことが望ましいわけではない。

イ：Aは不適切。受診が必要な場合がある。一方Bは適切。正しい。本人の健康管理に必要な情報である。

ウ：Aは不適切。複数リスクは相互に影響し得る。Bも不適切。本人への結果通知も重要である。

エ：Aは適切。正しい。総合的なリスク管理が重要である。Bも適切。正しい。本人の健康管理に必要な情報である。

総合解説：Aについて：生活習慣病は無症状で進行することがあるため、健診異常を保健指導や医療受診へつなげる。

Bについて：健診結果は本人のセルフケアにも活用され、必要に応じ保健指導や医療受診へつなげる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0125

健康管理・救急・健康保持 > 一般健康診断・生活習慣病・事後措置 | 難易度：標準

次のA・Bの説明を確認した。訂正の必要がない組合せはどれか。

A：結果通知

B：特定業務従事者健診

ア．【結果通知】本人が自らの健康状態を把握し、必要な受診や生活改善につなげるため /

【特定業務従事者健診】配置替え時およびその後6か月以内に1回行う

イ．【結果通知】本人が自らの健康状態を把握し、必要な受診や生活改善につなげるため /

【特定業務従事者健診】退職時だけ行う

ウ．【結果通知】本人に知らせない方が健康行動が改善するため /

【特定業務従事者健診】配置替え時およびその後6か月以内に1回行う

エ．【結果通知】事業者だけが結果を知れば十分だから /

【特定業務従事者健診】本人が希望した場合に限り行う

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。本人の健康管理に必要な情報である。

Bも適切。正しい。特定業務従事者には配置時と6か月以内ごとの健康診断が必要である。

イ：Aは適切。正しい。本人の健康管理に必要な情報である。一方Bは不適切。退職時だけではない。

ウ：Aは不適切。通知しないことが望ましいわけではない。

一方Bは適切。正しい。特定業務従事者には配置時と6か月以内ごとの健康診断が必要である。

エ：Aは不適切。本人への結果通知も重要である。Bも不適切。法定対象では本人希望だけで決まらない。

総合解説：Aについて：健診結果は本人のセルフケアにも活用され、必要に応じ保健指導や医療受診へつなげる。

Bについて：深夜業など身体負担の大きい特定業務では、一般労働者より短い周期で健康状態を確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0126

健康管理・救急・健康保持 > 一般健康診断・生活習慣病・事後措置 | 難易度：応用

実務上の確認として、二つの論点に対する説明がともに妥当なものはどれか。

A：集団分析

B：記録保存

ア．【集団分析】個人情報に配慮しつつ集団的傾向を把握し、労働時間や勤務体制等の職場要因も見直す /

【記録保存】30年間。一般健診も長期保存対象とする

イ．【集団分析】個人情報に配慮しつつ集団的傾向を把握し、労働時間や勤務体制等の職場要因も見直す /

【記録保存】5年間。健康診断個人票として保存する

ウ．【集団分析】健診データを公開掲示する / 【記録保存】5年間。健康診断個人票として保存する

エ．【集団分析】症状のある者だけ退職させる / 【記録保存】1年間。次回健診まで保存すれば足りる

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。個人情報保護に配慮した集団的評価は職場改善に役立つ。

一方Bは不適切。一般健診では一律30年保存ではない。

イ：Aは適切。正しい。個人情報保護に配慮した集団的評価は職場改善に役立つ。

Bも適切。正しい。健康診断個人票は5年間保存する。

ウ：Aは不適切。個人情報の不適切な公開となる。一方Bは適切。正しい。健康診断個人票は5年間保存する。

エ：Aは不適切。根本的な健康管理にならない。Bも不適切。1年では不足する。

総合解説：Aについて：健康管理は個人への指導だけでなく、勤務体制や職場環境など集団的リスクの改善にもつなげる。

Bについて：健康診断は実施だけでなく、結果を個人票に記録して5年間保存する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0127 健康管理・救急・健康保持 > 一般健康診断・生活習慣病・事後措置 | 難易度：応用

次の二事項を同時に確認する。正しい説明のみで構成された選択肢はどれか。

A：特定業務従事者健診

B：記録保存

ア：【特定業務従事者健診】配置替え時およびその後6か月以内ごとに1回行う /

【記録保存】1年間。次回健診まで保存すれば足りる

イ：【特定業務従事者健診】本人が希望した場合に限り行う /

【記録保存】5年間。健康診断個人票として保存する

ウ：【特定業務従事者健診】配置替え時およびその後6か月以内ごとに1回行う /

【記録保存】5年間。健康診断個人票として保存する

エ：【特定業務従事者健診】一般定期健診と同じく2年に1回だけでよい /

【記録保存】3年間。衛生委員会議事録と同じ期間でよい

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。特定業務従事者には配置時と6か月以内ごとの健康診断が必要である。一方Bは不適切。1年では不足する。

イ：Aは不適切。法定対象では本人希望だけで決まらない。一方Bは適切。正しい。健康診断個人票は5年間保存する。

ウ：Aは適切。正しい。特定業務従事者には配置時と6か月以内ごとの健康診断が必要である。

Bも適切。正しい。健康診断個人票は5年間保存する。

エ：Aは不適切。2年では不足する。Bも不適切。3年では不足する。

総合解説：Aについて：深夜業など身体負担の大きい特定業務では、一般労働者より短い周期で健康状態を確認する。

Bについて：健康診断は実施だけでなく、結果を個人票に記録して5年間保存する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0128 健康管理・救急・健康保持 > メンタルヘルス・過重労働・THP | 難易度：基礎

次の二つの論点に関する説明の組合せとして、両方とも適切なものはどれか。

A：4つのケア

B：セルフケア

ア：【4つのケア】セルフケア、ラインによるケア、事業場内産業保健スタッフ等によるケア、事業場外資源によるケア

／【セルフケア】本人は自分の状態を把握する必要がない

イ：【4つのケア】健康診断、騒音測定、換気、照明だけ /

【セルフケア】労働者自身がストレスや心身の変化に気づき、休養・相談・対処行動につなげる

ウ：【4つのケア】医師による治療だけ / 【セルフケア】ストレスを感じても相談を禁止する

エ：【4つのケア】セルフケア、ラインによるケア、事業場内産業保健スタッフ等によるケア、事業場外資源によるケア

／【セルフケア】労働者自身がストレスや心身の変化に気づき、休養・相談・対処行動につなげる

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。4つのケアを組み合わせで推進する。一方Bは不適切。セルフケアの考え方に反する。

イ：Aは不適切。メンタルヘルス指針の4つのケアではない。

一方Bは適切。正しい。自ら気づき対処する能力を高めるのがセルフケアである。

ウ：Aは不適切。治療だけに限定しない。Bも不適切。相談資源の利用が重要である。

エ：Aは適切。正しい。4つのケアを組み合わせで推進する。

Bも適切。正しい。自ら気づき対処する能力を高めるのがセルフケアである。

総合解説：Aについて：メンタルヘルス対策は労働者本人、管理監督者、産業保健スタッフ、外部専門資源が役割分担して進める。

Bについて：セルフケアを支えるため、事業者はストレスへの気づきや対処方法、相談先に関する教育・情報提供を行う。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0129 健康管理・救急・健康保持＞メンタルヘルス・過重労働・THP | 難易度：基礎

新人教育用の確認資料を作成する。次の組合せのうち、二つの説明がともに適切なものはどれか。

A：セルフケア

B：予防段階

ア．【セルフケア】労働者自身がストレスや心身の変化に気づき、休養・相談・対処行動につなげる /

【予防段階】職場のストレス要因を減らし、教育等で不調の発生を予防する

イ．【セルフケア】労働者自身がストレスや心身の変化に気づき、休養・相談・対処行動につなげる /

【予防段階】自殺企図後の緊急対応だけ

ウ．【セルフケア】本人は自分の状態を把握する必要がない /

【予防段階】職場のストレス要因を減らし、教育等で不調の発生を予防する

エ．【セルフケア】ストレスを感じても相談を禁止する / 【予防段階】休職者の職場復帰支援

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。自ら気づき対処する能力を高めるのがセルフケアである。

Bも適切。正しい。一次予防は不調の発生予防を目的とする。

イ：Aは適切。正しい。自ら気づき対処する能力を高めるのがセルフケアである。一方Bは不適切。発症後対応である。

ウ：Aは不適切。セルフケアの考え方に反する。一方Bは適切。正しい。一次予防は不調の発生予防を目的とする。

エ：Aは不適切。相談資源の利用が重要である。Bも不適切。職場復帰は三次予防に相当する。

総合解説：Aについて：セルフケアを支えるため、事業者はストレスへの気づきや対処方法、相談先に関する教育・情報提供を行う。Bについて：一次予防は発生予防、二次予防は早期発見・早期対応、三次予防は治療・復職・再発防止を中心とする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0130 健康管理・救急・健康保持＞メンタルヘルス・過重労働・THP | 難易度：標準

衛生管理の復習として、二つの事項を同時に確認する。記述の組合せとして正しいものはどれか。

A：ラインケア

B：長時間労働対策

ア．【ラインケア】職場環境を把握・改善し、部下の変化に気づいたら話を聴き適切な相談先につなぐ /

【長時間労働対策】健康診断だけ増やし長時間労働は維持する

イ．【ラインケア】職場環境を把握・改善し、部下の変化に気づいたら話を聴き適切な相談先につなぐ /

【長時間労働対策】時間外・休日労働そのものを削減し、休息を確保する

ウ．【ラインケア】診断を自分で確定して薬を指示する /

【長時間労働対策】時間外・休日労働そのものを削減し、休息を確保する

エ．【ラインケア】部下の私生活を無制限に監視する /

【長時間労働対策】栄養ドリンクの配布だけで対応する

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。職場環境改善と早期の気づき・相談支援が中心である。

一方Bは不適切。健康管理だけでは負荷源を減らせない。

イ：Aは適切。正しい。職場環境改善と早期の気づき・相談支援が中心である。

Bも適切。正しい。過重労働そのものの削減が根本対策である。

ウ：Aは不適切。診断や治療は医療専門職の役割である。一方Bは適切。正しい。過重労働そのものの削減が根本対策である。

エ：Aは不適切。必要範囲を超えた監視は不適切である。Bも不適切。根本対策にならない。

総合解説：Aについて：ラインケアでは、管理監督者が職場のストレス要因を把握し、相談しやすい環境を整えることが重要である。Bについて：面接指導や健康相談は重要だが、長時間労働の削減、勤務間の休息、業務量調整等を組み合わせる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0131 健康管理・救急・健康保持＞メンタルヘルス・過重労働・THP | 難易度：標準

次のA・Bに関する説明のうち、誤りを含まない組合せはどれか。

A：予防段階

B：過重労働

ア：【予防段階】職場のストレス要因を減らし、教育等で不調の発生を予防する /

【過重労働】月20時間を超えた全員に強制実施する

イ：【予防段階】休職者の職場復帰支援 /

【過重労働】時間外・休日労働が月80時間を超え、疲労の蓄積が認められ、本人から申出がある

ウ：【予防段階】職場のストレス要因を減らし、教育等で不調の発生を予防する /

【過重労働】時間外・休日労働が月80時間を超え、疲労の蓄積が認められ、本人から申出がある

エ：【予防段階】発症者への専門治療 /

【過重労働】年360時間を超えれば本人申出なしに必ず同じ制度を適用する

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。一次予防は不調の発生予防を目的とする。一方Bは不適切。法定の基準ではない。

イ：Aは不適切。職場復帰は三次予防に相当する。一方Bは適切。正しい。月80時間超、疲労蓄積、本人申出が基本要件である。

ウ：Aは適切。正しい。一次予防は不調の発生予防を目的とする。

Bも適切。正しい。月80時間超、疲労蓄積、本人申出が基本要件である。

エ：Aは不適切。発症後の対応は二次・三次予防に関係する。Bも不適切。制度の要件と異なる。

総合解説：Aについて：一次予防は発生予防、二次予防は早期発見・早期対応、三次予防は治療・復職・再発防止を中心とする。

Bについて：面接指導では長時間労働による脳・心臓疾患やメンタルヘルス不調のリスクを評価し、必要な就業措置へつなげる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0132 健康管理・救急・健康保持＞メンタルヘルス・過重労働・THP | 難易度：標準

研修担当者が二つの事項を説明した。内容がともに適切なものを選べ。

A：過重労働

B：計画評価

ア：【過重労働】時間外・休日労働が月80時間を超え、疲労の蓄積が認められ、本人から申出がある /

【計画評価】健康づくりは個人任せとして事業場は関与しない

イ：【過重労働】月20時間を超えた全員に強制実施する /

【計画評価】健康課題を把握し、目標と計画を定め、実施結果を評価して改善する

ウ：【過重労働】年360時間を超えれば本人申出なしに必ず同じ制度を適用する /

【計画評価】方針を示さず単発イベントだけ実施する

エ：【過重労働】時間外・休日労働が月80時間を超え、疲労の蓄積が認められ、本人から申出がある /

【計画評価】健康課題を把握し、目標と計画を定め、実施結果を評価して改善する

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。月80時間超、疲労蓄積、本人申出が基本要件である。

一方Bは不適切。事業場として計画的に取り組むことが求められる。

イ：Aは不適切。法定の基準ではない。

一方Bは適切。正しい。方針、体制、課題把握、目標、計画、実施、評価の流れが重要である。

ウ：Aは不適切。制度の要件と異なる。Bも不適切。継続的改善につながりにくい。

エ：Aは適切。正しい。月80時間超、疲労蓄積、本人申出が基本要件である。

Bも適切。正しい。方針、体制、課題把握、目標、計画、実施、評価の流れが重要である。

総合解説：Aについて：面接指導では長時間労働による脳・心臓疾患やメンタルヘルス不調のリスクを評価し、必要な就業措置へつなげる。Bについて：健康保持増進施策は単発の行事ではなく、事業場の課題に応じて計画・実施・評価を繰り返す。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0133 健康管理・救急・健康保持＞メンタルヘルス・過重労働・THP | 難易度：標準

次の二つの事項について整理したメモのうち、両方とも正しいものはどれか。

A：長時間労働対策

B：THP内容

ア．【長時間労働対策】時間外・休日労働そのものを削減し、休息を確保する /

【THP内容】生活習慣病、メンタルヘルス、身体機能の維持向上、睡眠、喫煙、飲酒等

イ．【長時間労働対策】時間外・休日労働そのものを削減し、休息を確保する / 【THP内容】騒音測定だけ

ウ．【長時間労働対策】本人の意思に関係なく睡眠時間を記録し公開する /

【THP内容】生活習慣病、メンタルヘルス、身体機能の維持向上、睡眠、喫煙、飲酒等

エ．【長時間労働対策】健康診断だけ増やし長時間労働は維持する /

【THP内容】有機溶剤の作業環境測定だけ

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。過重労働そのものの削減が根本対策である。Bも適切。正しい。幅広い健康課題を対象とする。

イ：Aは適切。正しい。過重労働そのものの削減が根本対策である。一方Bは不適切。THPの一部ではない。

ウ：Aは不適切。プライバシーに配慮する必要がある。一方Bは適切。正しい。幅広い健康課題を対象とする。

エ：Aは不適切。健康管理だけでは負荷源を減らせない。Bも不適切。化学物質環境管理とは別制度である。

総合解説：Aについて：面接指導や健康相談は重要だが、長時間労働の削減、勤務間の休息、業務量調整等を組み合わせる。

Bについて：THPは疾病の有無だけでなく、働き続けるための身体機能や生活習慣、心の健康を含めて支援する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0134 健康管理・救急・健康保持＞メンタルヘルス・過重労働・THP | 難易度：基礎

試験対策として二つの関連事項を比較する。正しい説明の組合せはどれか。

A：THP

B：4つのケア

ア．【THP】労働者の健康教育・健康相談その他の健康保持増進措置を継続的かつ計画的に講ずるよう事業者を求める考え方である / 【4つのケア】医師による治療だけ

イ．【THP】労働者の健康教育・健康相談その他の健康保持増進措置を継続的かつ計画的に講ずるよう事業者を求める考え方である /

【4つのケア】セルフケア、ラインによるケア、事業場内産業保健スタッフ等によるケア、事業場外資源によるケア

ウ．【THP】健康診断を廃止するための制度である /

【4つのケア】セルフケア、ラインによるケア、事業場内産業保健スタッフ等によるケア、事業場外資源によるケア

エ．【THP】疾病治療だけを目的とする / 【4つのケア】上司によるケアだけ

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。労働安全衛生法69条・70条の2に基づく健康保持増進の考え方である。

一方Bは不適切。治療だけに限定しない。

イ：Aは適切。正しい。労働安全衛生法69条・70条の2に基づく健康保持増進の考え方である。

Bも適切。正しい。4つのケアを組み合わせで推進する。

ウ：Aは不適切。健康診断を代替しない。一方Bは適切。正しい。4つのケアを組み合わせで推進する。

エ：Aは不適切。予防・健康増進も含む。Bも不適切。ラインケアは一要素である。

総合解説：Aについて：THPはTotal Health Promotionの考え方で、身体・こころの両面から健康保持増進を計画的に進める。

Bについて：メンタルヘルス対策は労働者本人、管理監督者、産業保健スタッフ、外部専門資源が役割分担して進める。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0135 健康管理・救急・健康保持>メンタルヘルス・過重労働・THP | 難易度：標準

次の確認事項A・Bについて、適切な説明だけを組み合わせたものはどれか。

A：THP内容

B：睡眠

ア．【THP内容】生活習慣病、メンタルヘルス、身体機能の維持向上、睡眠、喫煙、飲酒等 /

【睡眠】眠気があっても運転業務を増やす

イ．【THP内容】有機溶剤の作業環境測定だけ /

【睡眠】労働時間、睡眠・休養状況、疲労症状等を総合して健康障害リスクを評価する

ウ．【THP内容】生活習慣病、メンタルヘルス、身体機能の維持向上、睡眠、喫煙、飲酒等 /

【睡眠】労働時間、睡眠・休養状況、疲労症状等を総合して健康障害リスクを評価する

エ．【THP内容】労働契約の賃金交渉だけ / 【睡眠】睡眠不足は健康に影響しないため無視する

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。幅広い健康課題を対象とする。一方Bは不適切。事故リスクを高める。

イ：Aは不適切。化学物質環境管理とは別制度である。一方Bは適切。正しい。過重労働と睡眠不足を合わせて評価する。

ウ：Aは適切。正しい。幅広い健康課題を対象とする。Bも適切。正しい。過重労働と睡眠不足を合わせて評価する。

エ：Aは不適切。健康保持増進措置ではない。Bも不適切。睡眠不足は心身機能に影響する。

総合解説：Aについて：THPは疾病の有無だけでなく、働き続けるための身体機能や生活習慣、心の健康を含めて支援する。

Bについて：過重労働対策では時間数だけでなく、睡眠、疲労、既往歴、仕事内容等を含めて個別に評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0136 健康管理・救急・健康保持>メンタルヘルス・過重労働・THP | 難易度：応用

二つの論点を関連付けて判断する問題である。両方の記述が正しい選択肢はどれか。

A：計画評価

B：職場復帰

ア．【計画評価】健康課題を把握し、目標と計画を定め、実施結果を評価して改善する /

【職場復帰】復職初日から休業前と同じ最大業務量に戻す

イ．【計画評価】健康づくりは個人任せとして事業場は関与しない /

【職場復帰】本人・主治医・産業保健スタッフ等の情報を踏まえ、段階的な復職や業務配慮を検討する

ウ．【計画評価】方針を示さず単発イベントだけ実施する / 【職場復帰】病名を職場全員に公開して理解を得る

エ．【計画評価】健康課題を把握し、目標と計画を定め、実施結果を評価して改善する /

【職場復帰】本人・主治医・産業保健スタッフ等の情報を踏まえ、段階的な復職や業務配慮を検討する

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。方針、体制、課題把握、目標、計画、実施、評価の流れが重要である。

一方Bは不適切。再発リスクを高めるおそれがある。

イ：Aは不適切。事業場として計画的に取り組むことが求められる。

一方Bは適切。正しい。本人の状態と職場条件を踏まえた復帰支援が重要である。

ウ：Aは不適切。継続的改善につながりにくい。Bも不適切。必要最小限の情報共有にとどめる。

エ：Aは適切。正しい。方針、体制、課題把握、目標、計画、実施、評価の流れが重要である。

Bも適切。正しい。本人の状態と職場条件を踏まえた復帰支援が重要である。

総合解説：Aについて：健康保持増進施策は単発の行事ではなく、事業場の課題に応じて計画・実施・評価を繰り返す。

Bについて：職場復帰支援は三次予防の一部であり、復帰可否、業務量、勤務時間、フォローアップを計画的に行う。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0137 健康管理・救急・健康保持 > メンタルヘルス・過重労働・THP | 難易度：応用

次のA・Bの説明を確認した。訂正の必要がない組合せはどれか。

A：職場復帰

B：4つのケア

ア．【職場復帰】本人・主治医・産業保健スタッフ等の情報を踏まえ、段階的な復職や業務配慮を検討する / 【4つのケア】セルフケア、ラインによるケア、事業場内産業保健スタッフ等によるケア、事業場外資源によるケア
イ．【職場復帰】本人・主治医・産業保健スタッフ等の情報を踏まえ、段階的な復職や業務配慮を検討する / 【4つのケア】医師による治療だけ
ウ．【職場復帰】復職初日から休業前と同じ最大業務量に戻す / 【4つのケア】セルフケア、ラインによるケア、事業場内産業保健スタッフ等によるケア、事業場外資源によるケア
エ．【職場復帰】病名を職場全員に公開して理解を得る / 【4つのケア】上司によるケアだけ

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。本人の状態と職場条件を踏まえた復帰支援が重要である。
Bも適切。正しい。4つのケアを組み合わせで推進する。
イ：Aは適切。正しい。本人の状態と職場条件を踏まえた復帰支援が重要である。一方Bは不適切。治療だけに限定しない。
ウ：Aは不適切。再発リスクを高めるおそれがある。一方Bは適切。正しい。4つのケアを組み合わせで推進する。
エ：Aは不適切。必要最小限の情報共有にとどめる。Bも不適切。ラインケアは一要素である。
総合解説：Aについては：職場復帰支援は三次予防の一部であり、復帰可否、業務量、勤務時間、フォローアップを計画的に行う。
Bについて：メンタルヘルス対策は労働者本人、管理監督者、産業保健スタッフ、外部専門資源が役割分担して進める。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0138 健康管理・救急・健康保持 > メンタルヘルス・過重労働・THP | 難易度：応用

実務上の確認として、二つの論点に対する説明がともに妥当なものはどれか。

A：睡眠

B：予防段階

ア．【睡眠】労働時間、睡眠・休養状況、疲労症状等を総合して健康障害リスクを評価する / 【予防段階】自殺企図後の緊急対応だけ
イ．【睡眠】労働時間、睡眠・休養状況、疲労症状等を総合して健康障害リスクを評価する / 【予防段階】職場のストレス要因を減らし、教育等で不調の発生を予防する
ウ．【睡眠】休日に一度長く眠れば恒常的長時間労働は問題ない / 【予防段階】職場のストレス要因を減らし、教育等で不調の発生を予防する
エ．【睡眠】眠気があっても運転業務を増やす / 【予防段階】退職者の職場復帰支援

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。過重労働と睡眠不足を合わせて評価する。一方Bは不適切。発症後対応である。
イ：Aは適切。正しい。過重労働と睡眠不足を合わせて評価する。Bも適切。正しい。一次予防は不調の発生予防を目的とする。
ウ：Aは不適切。慢性的な負担は単回の睡眠だけで解消しない。一方Bは適切。正しい。一次予防は不調の発生予防を目的とする。
エ：Aは不適切。事故リスクを高める。Bも不適切。職場復帰は三次予防に相当する。
総合解説：Aについては：過重労働対策では時間数だけでなく、睡眠、疲労、既往歴、仕事内容等を含めて個別に評価する。
Bについて：一次予防は発生予防、二次予防は早期発見・早期対応、三次予防は治療・復職・再発防止を中心とする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0139 健康管理・救急・健康保持 > 救急処置・感染症・健康教育 | 難易度：基礎

次の二つの論点に関する説明の組合せとして、両方とも適切なものはどれか。

A：BLS

B：胸骨圧迫

ア．【BLS】周囲の安全を確認し、反応を確認して助けを呼び、119番通報とAED手配を依頼する /

【胸骨圧迫】1分間160～180回。速いほど効果が高いと考える

イ．【BLS】一人で病院まで運ぶ / 【胸骨圧迫】1分間100～120回。中断を最小限にして圧迫する

ウ．【BLS】周囲の安全を確認し、反応を確認して助けを呼び、119番通報とAED手配を依頼する /

【胸骨圧迫】1分間100～120回。中断を最小限にして圧迫する

エ．【BLS】30分間様子を見る / 【胸骨圧迫】テンポは問わず、深さだけ合わせればよい

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。安全確認、反応確認、応援要請、119番通報・AED手配へ進む。一方Bは不適切。速すぎる。

イ：Aは不適切。搬送より先に救命処置の流れを開始する。一方Bは適切。正しい。100～120回/分が推奨される。

ウ：Aは適切。正しい。安全確認、反応確認、応援要請、119番通報・AED手配へ進む。

Bも適切。正しい。100～120回/分が推奨される。

エ：Aは不適切。心停止では時間が重要である。Bも不適切。適切なテンポも重要である。

総合解説：Aについて：心停止対応では、早期通報、胸骨圧迫、AED使用を迅速に行うことが重要である。

Bについて：胸骨圧迫は中断を最小限にし、十分な深さと適切なテンポを維持する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0140 健康管理・救急・健康保持 > 救急処置・感染症・健康教育 | 難易度：基礎

新人教育用の確認資料を作成する。次の組合せのうち、二つの説明がともに適切なものはどれか。

A：胸骨圧迫

B：呼吸確認

ア．【胸骨圧迫】1分間100～120回。中断を最小限にして圧迫する / 【呼吸確認】本人が起きるまで待つ

イ．【胸骨圧迫】1分間160～180回。速いほど効果が高いと考える /

【呼吸確認】呼吸がないものとして胸骨圧迫を開始する

ウ．【胸骨圧迫】テンポは問わず、深さだけ合わせればよい /

【呼吸確認】呼吸があると決めつけて何もしない

エ．【胸骨圧迫】1分間100～120回。中断を最小限にして圧迫する /

【呼吸確認】呼吸がないものとして胸骨圧迫を開始する

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。100～120回/分が推奨される。一方Bは不適切。救命処置が遅れる。

イ：Aは不適切。速すぎる。一方Bは適切。正しい。迷う場合は心停止を疑い胸骨圧迫を始める。

ウ：Aは不適切。適切なテンポも重要である。Bも不適切。心停止の見逃しにつながる。

エ：Aは適切。正しい。100～120回/分が推奨される。Bも適切。正しい。迷う場合は心停止を疑い胸骨圧迫を始める。

総合解説：Aについて：胸骨圧迫は中断を最小限にし、十分な深さと適切なテンポを維持する。

Bについて：判断に時間をかけ過ぎず、普段どおりの呼吸がない・分からない場合は胸骨圧迫を開始する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0141 健康管理・救急・健康保持 > 救急処置・感染症・健康教育 | 難易度：基礎

衛生管理の復習として、二つの事項を同時に確認する。記述の組合せとして正しいものはどれか。

A：胸骨圧迫

B：止血

ア．【胸骨圧迫】約5cm。胸の真ん中を十分に圧迫する /

【止血】出血部位を清潔な布やガーゼ等で直接強く圧迫する

イ．【胸骨圧迫】約5cm。胸の真ん中を十分に圧迫する / 【止血】出血部位をこすって血流を増やす

ウ．【胸骨圧迫】約10cm。深いほど常に良い /

【止血】出血部位を清潔な布やガーゼ等で直接強く圧迫する

エ．【胸骨圧迫】約1cm。胸骨がわずかに動く程度でよい / 【止血】傷口を心臓より低くして放置する

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。成人では胸が約5cm沈むように圧迫する。Bも適切。正しい。大出血では直接圧迫止血が基本である。

イ：Aは適切。正しい。成人では胸が約5cm沈むように圧迫する。一方Bは不適切。出血を増やす。

ウ：Aは不適切。深すぎる。一方Bは適切。正しい。大出血では直接圧迫止血が基本である。

エ：Aは不適切。浅すぎる。Bも不適切。放置は危険である。

総合解説：Aについて：胸の真ん中を真上から強く速く圧迫し、圧迫後は胸が十分に戻るようにする。

Bについて：止血時は救助者の感染防護にも配慮し、手袋やビニール袋等で血液への直接接触を避ける。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0142 健康管理・救急・健康保持 > 救急処置・感染症・健康教育 | 難易度：標準

次のA・Bに関する説明のうち、誤りを含まない組合せはどれか。

A：呼吸確認

B：AED

ア．【呼吸確認】呼吸がないものとして胸骨圧迫を開始する / 【AED】パッドを衣服の上から貼る

イ．【呼吸確認】呼吸がないものとして胸骨圧迫を開始する /

【AED】電源を入れ音声指示に従い、解析・電気ショック時には傷病者に触れない

ウ．【呼吸確認】呼吸があると決めつけて何もしない /

【AED】電源を入れ音声指示に従い、解析・電気ショック時には傷病者に触れない

エ．【呼吸確認】脈拍を10分間測り続ける / 【AED】解析中も胸を押し続ける

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。迷う場合は心停止を疑い胸骨圧迫を始める。一方Bは不適切。胸部を露出して適切な位置へ貼付する。

イ：Aは適切。正しい。迷う場合は心停止を疑い胸骨圧迫を始める。

Bも適切。正しい。AEDの指示に従い、解析・ショック時は離れる。

ウ：Aは不適切。心停止の見逃しにつながる。一方Bは適切。正しい。AEDの指示に従い、解析・ショック時は離れる。

エ：Aは不適切。市民救助者が長時間判断を続けるべきではない。Bも不適切。解析の妨げになるため触れない。

総合解説：Aについて：判断に時間をかけ過ぎず、普段どおりの呼吸がない・分からない場合は胸骨圧迫を開始する。

Bについて：AEDは一般市民でも使用できるよう音声指示があり、電気ショック後は直ちに胸骨圧迫を再開する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0143 健康管理・救急・健康保持 > 救急処置・感染症・健康教育 | 難易度：標準

研修担当者が二つの事項を説明した。内容がともに適切なものを選び。

A：AED

B：感染対策

- ア：【AED】電源を入れ音声指示に従い、解析・電気ショック時には傷病者に触れない / 【感染対策】手袋の外側を素手で触ってから顔を触る
- イ：【AED】パッドを衣服の上から貼る / 【感染対策】手袋を外した後も手指衛生を行う
- ウ：【AED】電源を入れ音声指示に従い、解析・電気ショック時には傷病者に触れない / 【感染対策】手袋を外した後も手指衛生を行う
- エ：【AED】解析中も胸を押し続ける / 【感染対策】手袋を使ったので手洗い・手指消毒は永久に不要である

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。AEDの指示に従い、解析・ショック時は離れる。一方Bは不適切。接触感染リスクを高める。

イ：Aは不適切。胸部を露出して適切な位置へ貼付する。一方Bは適切。正しい。手袋の脱着時に手指が汚染される可能性がある。

ウ：Aは適切。正しい。AEDの指示に従い、解析・ショック時は離れる。Bも適切。正しい。手袋の脱着時に手指が汚染される可能性がある。

エ：Aは不適切。解析の妨げになるため触れない。Bも不適切。手袋は手指衛生の代替ではない。

総合解説：Aについて：AEDは一般市民でも使用できるよう音声指示があり、電気ショック後は直ちに胸骨圧迫を再開する。

Bについて：感染防護では、適切なPPEの選択と着脱、手指衛生を一連の手順として行う。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0144 健康管理・救急・健康保持 > 救急処置・感染症・健康教育 | 難易度：基礎

次の二つの事項について整理したメモのうち、両方とも正しいものはどれか。

A：止血

B：感染対策

- ア：【止血】出血部位を清潔な布やガーゼ等で直接強く圧迫する / 【感染対策】感染症と診断された人にだけ手指衛生を行う
- イ：【止血】出血量を測るまで圧迫しない / 【感染対策】全ての人の血液・体液等に感染性がある可能性を考え、手指衛生や個人防護具を適切に用いる
- ウ：【止血】出血部位をこすって血流を増やす / 【感染対策】手袋を使えば手指衛生は不要である
- エ：【止血】出血部位を清潔な布やガーゼ等で直接強く圧迫する / 【感染対策】全ての人の血液・体液等に感染性がある可能性を考え、手指衛生や個人防護具を適切に用いる

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。大出血では直接圧迫止血が基本である。一方Bは不適切。診断の有無だけで対応を分けない。

イ：Aは不適切。止血を優先する。一方Bは適切。正しい。感染の有無が不明でも基本的予防策を行う。

ウ：Aは不適切。出血を増やす。Bも不適切。手袋を外した後も手指衛生が必要である。

エ：Aは適切。正しい。大出血では直接圧迫止血が基本である。Bも適切。正しい。感染の有無が不明でも基本的予防策を行う。

総合解説：Aについて：止血時は救助者の感染防護にも配慮し、手袋やビニール袋等で血液への直接接触を避ける。

Bについて：標準予防策では、手指衛生、手袋、ガウン、マスク・ゴーグル、鋭利器材の安全な取扱い等を状況に応じて用いる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0145 健康管理・救急・健康保持 > 救急処置・感染症・健康教育 | 難易度：標準

試験対策として二つの関連事項を比較する。正しい説明の組合せはどれか。

A：気道異物

B：総合判断

ア：【気道異物】119番通報を依頼し、背部叩打法を行い、効果がなければ腹部突き上げ法を行う /
【総合判断】可能な範囲で手袋等を用いて血液への直接接触を避けつつ、直接圧迫止血と119番通報を行う
イ：【気道異物】119番通報を依頼し、背部叩打法を行い、効果がなければ腹部突き上げ法を行う /
【総合判断】素手で血液を触ることを義務付ける
ウ：【気道異物】飲水を無理にさせる /
【総合判断】可能な範囲で手袋等を用いて血液への直接接触を避けつつ、直接圧迫止血と119番通報を行う
エ：【気道異物】仰向けに寝かせて30分待つ / 【総合判断】出血部位を強くこすって洗う

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。完全閉塞が疑われる場合は迅速な異物除去を行う。
Bも適切。正しい。感染防護を行いながら緊急止血を実施する。
イ：Aは適切。正しい。完全閉塞が疑われる場合は迅速な異物除去を行う。一方Bは不適切。感染リスクを不必要に高める。
ウ：Aは不適切。さらに閉塞を悪化させることがある。一方Bは適切。正しい。感染防護を行いながら緊急止血を実施する。
エ：Aは不適切。窒息は緊急対応が必要である。Bも不適切。出血を増やす可能性がある。
総合解説：Aについて：咳が十分にできる場合は咳を続けさせ、できなくなった場合は背部叩打・腹部突き上げ等へ移る。
Bについて：職場の救急体制では、救命処置の技能だけでなく、血液・体液曝露を防ぐ標準予防策も教育する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0146 健康管理・救急・健康保持 > 救急処置・感染症・健康教育 | 難易度：基礎

次の確認事項A・Bについて、適切な説明だけを組み合わせたものはどれか。

A：感染対策

B：健康教育

ア：【感染対策】全ての人の血液・体液等に感染性がある可能性を考え、手指衛生や個人防護具を適切に用いる /
【健康教育】全員に同じ生活方法を強制する
イ：【感染対策】全ての人の血液・体液等に感染性がある可能性を考え、手指衛生や個人防護具を適切に用いる /
【健康教育】労働者が健康リスクを理解し、自ら適切な予防行動・受診・相談を選択できるよう支援する
ウ：【感染対策】手袋を使えば手指衛生は不要である /
【健康教育】労働者が健康リスクを理解し、自ら適切な予防行動・受診・相談を選択できるよう支援する
エ：【感染対策】感染対策は医療職だけに必要で一般職場では一切不要である / 【健康教育】疾病を隠す方法を教える

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。感染の有無が不明でも基本的予防策を行う。一方Bは不適切。個人差や状況への配慮が必要である。
イ：Aは適切。正しい。感染の有無が不明でも基本的予防策を行う。
Bも適切。正しい。知識だけでなく健康行動につなげることが重要である。
ウ：Aは不適切。手袋を外した後も手指衛生が必要である。
一方Bは適切。正しい。知識だけでなく健康行動につなげることが重要である。
エ：Aは不適切。職種・ばく露リスクに応じた感染対策が必要である。Bも不適切。健康管理に反する。
総合解説：Aについて：標準予防策では、手指衛生、手袋、ガウン、マスク・ゴーグル、鋭利器材の安全な取扱い等を状況に応じて用いる。Bについて：健康教育は継続的に行い、対象者の健康課題・職務・理解度に応じた内容とする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0147 健康管理・救急・健康保持 > 救急処置・感染症・健康教育 | 難易度：標準

二つの論点を関連付けて判断する問題である。両方の記述が正しい選択肢はどれか。

A：感染対策

B：感染曝露

ア．【感染対策】手袋を外した後も手指衛生を行う / 【感染曝露】そのまま作業を続け、数週間後に考える

イ．【感染対策】手袋の外側を素手で触ってから顔を触る /

【感染曝露】眼を速やかに流水等で洗浄し、職場の曝露対応手順に従って報告・医学的評価を受ける

ウ．【感染対策】手袋を外した後も手指衛生を行う /

【感染曝露】眼を速やかに流水等で洗浄し、職場の曝露対応手順に従って報告・医学的評価を受ける

エ．【感染対策】手袋を使ったので手洗い・手指消毒は永久に不要である /

【感染曝露】アルコールを眼に直接入れて消毒する

答え・解説

正答：ウ

ア：Aは適切。正しい。手袋の脱着時に手指が汚染される可能性がある。一方Bは不適切。初動を遅らせるべきではない。

イ：Aは不適切。接触感染リスクを高める。一方Bは適切。正しい。洗浄と速やかな報告・評価が重要である。

ウ：Aは適切。正しい。手袋の脱着時に手指が汚染される可能性がある。

Bも適切。正しい。洗浄と速やかな報告・評価が重要である。

エ：Aは不適切。手袋は手指衛生の代替ではない。Bも不適切。眼へのアルコール使用は危険である。

総合解説：Aについて：感染防護では、適切なPPEの選択と着脱、手指衛生を一連の手順として行う。

Bについて：血液・体液曝露は洗浄・報告・医学的評価を速やかに行い、必要に応じ予防措置へつなげる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0148 健康管理・救急・健康保持 > 救急処置・感染症・健康教育 | 難易度：応用

次のA・Bの説明を確認した。訂正の必要がない組合せはどれか。

A：感染曝露

B：総合判断

ア．【感染曝露】眼を速やかに流水等で洗浄し、職場の曝露対応手順に従って報告・医学的評価を受ける /

【総合判断】素手で血液を触ることを義務付ける

イ．【感染曝露】そのまま作業を続け、数週間後に考える /

【総合判断】可能な範囲で手袋等を用いて血液への直接接触を避けつつ、直接圧迫止血と119番通報を行う

ウ．【感染曝露】アルコールを眼に直接入れて消毒する / 【総合判断】出血部位を強くこすって洗う

エ．【感染曝露】眼を速やかに流水等で洗浄し、職場の曝露対応手順に従って報告・医学的評価を受ける /

【総合判断】可能な範囲で手袋等を用いて血液への直接接触を避けつつ、直接圧迫止血と119番通報を行う

答え・解説

正答：エ

ア：Aは適切。正しい。洗浄と速やかな報告・評価が重要である。一方Bは不適切。感染リスクを不必要に高める。

イ：Aは不適切。初動を遅らせるべきではない。一方Bは適切。正しい。感染防護を行いながら緊急止血を実施する。

ウ：Aは不適切。眼へのアルコール使用は危険である。Bも不適切。出血を増やす可能性がある。

エ：Aは適切。正しい。洗浄と速やかな報告・評価が重要である。Bも適切。正しい。感染防護を行いながら緊急止血を実施する。

総合解説：Aについて：血液・体液曝露は洗浄・報告・医学的評価を速やかに行い、必要に応じ予防措置へつなげる。

Bについて：職場の救急体制では、救命処置の技能だけでなく、血液・体液曝露を防ぐ標準予防策も教育する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0149 健康管理・救急・健康保持 > 救急処置・感染症・健康教育 | 難易度：標準

実務上の確認として、二つの論点に対する説明がともに妥当なものはどれか。

A：健康教育

B：胸骨圧迫

ア．【健康教育】労働者が健康リスクを理解し、自ら適切な予防行動・受診・相談を選択できるよう支援する / 【胸骨圧迫】約5cm。胸の真ん中を十分に圧迫する

イ．【健康教育】労働者が健康リスクを理解し、自ら適切な予防行動・受診・相談を選択できるよう支援する / 【胸骨圧迫】約10cm。深いほど常に良い

ウ．【健康教育】健康情報を一方的に暗記させ行動変容は考えない /

【胸骨圧迫】約5cm。胸の真ん中を十分に圧迫する

エ．【健康教育】全員に同じ生活方法を強制する / 【胸骨圧迫】約1cm。胸骨がわずかに動く程度でよい

答え・解説

正答：ア

ア：Aは適切。正しい。知識だけでなく健康行動につなげることが重要である。

Bも適切。正しい。成人では胸が約5cm沈むように圧迫する。

イ：Aは適切。正しい。知識だけでなく健康行動につなげることが重要である。一方Bは不適切。深すぎる。

ウ：Aは不適切。理解や実行可能性を考慮する。一方Bは適切。正しい。成人では胸が約5cm沈むように圧迫する。

エ：Aは不適切。個人差や状況への配慮が必要である。Bも不適切。浅すぎる。

総合解説：Aについて：健康教育は継続的に行い、対象者の健康課題・職務・理解度に応じた内容とする。

Bについて：胸の真ん中を真上から強く速く圧迫し、圧迫後は胸が十分に戻るようにする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08

0150 健康管理・救急・健康保持 > 救急処置・感染症・健康教育 | 難易度：応用

次の二事項を同時に確認する。正しい説明のみで構成された選択肢はどれか。

A：総合判断

B：胸骨圧迫

ア．【総合判断】可能な範囲で手袋等を用いて血液への直接接触を避けつつ、直接圧迫止血と119番通報を行う / 【胸骨圧迫】約1cm。胸骨がわずかに動く程度でよい

イ．【総合判断】可能な範囲で手袋等を用いて血液への直接接触を避けつつ、直接圧迫止血と119番通報を行う / 【胸骨圧迫】約5cm。胸の真ん中を十分に圧迫する

ウ．【総合判断】出血部位を強くこすって洗う / 【胸骨圧迫】約5cm。胸の真ん中を十分に圧迫する

エ．【総合判断】感染防護のため何もせず救急隊到着まで待つ /

【胸骨圧迫】約2cm。成人でも小児と同じ浅さでよい

答え・解説

正答：イ

ア：Aは適切。正しい。感染防護を行いながら緊急止血を実施する。一方Bは不適切。浅すぎる。

イ：Aは適切。正しい。感染防護を行いながら緊急止血を実施する。Bも適切。正しい。成人では胸が約5cm沈むように圧迫する。

ウ：Aは不適切。出血を増やす可能性がある。一方Bは適切。正しい。成人では胸が約5cm沈むように圧迫する。

エ：Aは不適切。救助者の安全と応急手当は両立させる。Bも不適切。浅すぎる。

総合解説：Aについて：職場の救急体制では、救命処置の技能だけでなく、血液・体液曝露を防ぐ標準予防策も教育する。

Bについて：胸の真ん中を真上から強く速く圧迫し、圧迫後は胸が十分に戻るようにする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-08